

一般国道23号中勢道路建設事業に伴う

# 式ノ坪遺跡発掘調査報告

2005. 3

三重県埋蔵文化財センター



弥生土器壺



遺跡全景



# 序

伊勢平野のほぼ中央を東へ流れる安濃川は、この地域周辺では広い沖積地を形成し、古くからこの地で生活を営む人々に潤いと豊かさを与えてきました。

さて、近年、津市内においても数々の緊急発掘調査が実施され、やむなく削られる遺跡については調査機関が記録保存に努めてきた次第です。私たち三重県埋蔵文化財センターも国道23号中勢道路建設に先立って、関係機関と協調を図りながら、主体的に発掘調査を担当してきたところです。そして、これまでに明らかにされていなかった郷土の歴史や文化財の一部を発見し、地域への保護活動の啓発を進めているところです。

今回報告致します式ノ坪遺跡の調査によって、古代条里制における地割りに並行した掘立柱建物や溝跡が多数確認されました。そこには古代の人々の豊かな生活の営みが埋もれていました。また、さらに驚きは、弥生時代の焼失住居跡も当時のそのままの姿で残されていたことです。これら発掘調査で得られた貴重な文化財のひとつひとつを整理し、記録保存に努め、それらを含めた資料研究を深めることが我々県民の役目であると考えております。

末筆ですが、調査に協力いただいた地域の方々をはじめ関係諸機関の皆さんに厚くお礼を申し上げます。

平成17年3月

三重県埋蔵文化財センター  
所長 吉水康夫

## 例　　言

1 本書は、三重県津市野田字二ノ坪・八反田に所在する式ノ坪（にのつぼ）遺跡の発掘調査報告書である。

2 本書が扱う調査成果は、平成9年度に『一般国道23号中勢道路埋蔵文化財発掘調査概報X』として概要を公表しているが、本書をもって正報告とする。

3 平成9年に発掘調査した体制は以下のとおりである。

調査主体 三重県埋蔵文化財センター

調査担当 現地調査 調査第二課 本堂弘之、池端清行、宮田勝功  
米山浩之、水谷 豊、西村美幸

調査協力 津市教育委員会

4 本書の執筆、編集は中川明が行い、遺物写真撮影も中川が担当した。

5 本書が対象とした調査面積は、5,100m<sup>2</sup>である。

6 本書が対象とした現場調査期間は、平成9年5月7日から同年10月20日である。

7 本書で示す方位は、真北を用いた。

なお、国土座標第VI系の座標北は0度18分西偏しており、磁北は6度40分西偏している。  
(平成7年、国土地理院)。

8 本書では下記の遺構表示略号を用いた。

SB:掘立柱建物 SH:竪穴住居 SD:溝・自然流路 SK:土坑 Pit:柱穴・小穴

9 本書で表記する色調は、小山・竹原編「新版標準土色帖」(第9版1989年)に準拠した。

10 発掘調査及び本書の作成に際しては、下記の方々にご指導・ご協力をいただいた(敬称略)。  
八賀 晋(三重大学名誉教授)、青木哲哉(立命館大学講師)

11 本書が扱う発掘調査の原因事業は、一般国道23号中勢道路建設事業である。

12 発掘調査の経費は国土交通省(旧建設省)が負担した。

13 本書が扱う発掘調査の資料や出土遺物は、当三重県埋蔵文化財センターが保管している。

## 本文目次

I 前 言 .....	中川 明 .....	( 1 )
II 位置と環境 .....		( 3 )
III 層序と遺構 .....		( 5 )
IV 遺 物 .....		( 25 )
V 結 語 .....		( 30 )
VI 自然科学分析 .....		( 52 )
附編 SH64炭化材について .....	川崎志乃 .....	( 55 )

## 挿図目次

第1図 遺跡位置図 .....	( 4 )
第2図 調査地区割図 .....	( 5 )
第3図 周辺地形図 .....	( 6 )
第4図 A・B地区遺構平面図 .....	( 11・12 )
第5図 C地区遺構平面図 .....	( 13 )
第6図 土層断面図 1 .....	( 14 )
第7図 土層断面図 2 .....	( 15 )
第8図 土層断面図 3 .....	( 16 )
第9図 土層断面図 4 .....	( 17 )
第10図 SH64実測図 .....	( 18 )
第11図 SK61・69実測図 .....	( 19 )
第12図 SK68・70実測図 .....	( 20 )
第13図 SK59・60・63・72実測図 .....	( 21 )
第14図 SB73・74・5・75・7・76実測図 .....	( 22 )
第15図 SB3・2・6・S A71実測図 .....	( 23 )
第16図 SB65・9・1・4・8実測図 .....	( 24 )

## 表目次

第1表 遺構一覧表 1 .....	( 43 )
第2表 遺構一覧表 2 .....	( 44 )
第3表 遺物観察表 1 .....	( 46 )
第4表 遺物観察表 2 .....	( 47 )
第5表 遺物観察表 3 .....	( 48 )
第6表 遺物観察表 4 .....	( 49 )
第7表 遺物観察表 5 .....	( 50 )
第8表 遺物観察表 6 .....	( 51 )
第9表 放射性炭素年代測定・樹種同定結果 .....	( 52 )

## 図版目次

第17図	出土遺物実測図(1)	.....	( 31 )
第18図	出土遺物実測図(2)	.....	( 32 )
第19図	出土遺物実測図(3)	.....	( 33 )
第20図	出土遺物実測図(4)	.....	( 34 )
第21図	出土遺物実測図(5)	.....	( 35 )
第22図	出土遺物実測図(6)	.....	( 36 )
第23図	出土遺物実測図(7)	.....	( 37 )
第24図	出土遺物実測図(8)	.....	( 38 )
第25図	出土遺物実測図(9)	.....	( 39 )
第26図	出土遺物実測図(10)	.....	( 40 )
第27図	出土遺物実測図(11)	.....	( 41 )
第28図	出土遺物実測図(12)	.....	( 42 )

## 写真目次

PL 1	遺跡周辺空中写真	.....	( 59 )
PL 2	SH64・SH64炭化材等出土状況	.....	( 60 )
PL 3	SK59・SK60遺物出土状況	.....	( 61 )
PL 4	SK69・70土器出土状況	.....	( 62 )
PL 5	SK61・72土器出土状況	.....	( 63 )
PL 6	SB65・SB 6	.....	( 64 )
PL 7	SB 2 ・ SB 7 拡張前	.....	( 65 )
PL 8	SB 3 ・ SB 4	.....	( 66 )
PL 9	SB 8 ・ SB 9	.....	( 67 )
PL10	SB 7 拡張後・73・74	.....	( 68 )
PL11	SB 5 ・ 75、拡張区建物群	.....	( 69 )
PL12	SB75Pit 2 ・ 4 柱材	.....	( 70 )
PL13	SB75Pit 1 ・ 3 柱材	.....	( 71 )
PL14	B地区全景・C地区全景	.....	( 72 )
PL15	C-4地区検出状況等	.....	( 73 )
PL16	SD88土器出土状況	.....	( 74 )
PL17	C地区牛の足跡検出状況・近接写真	.....	( 75 )
付	分析組織写真	.....	( 54 )

PL18	出土遺物 1 ( 1 ~ 8 )	PL24	出土遺物 7 ( 48 ~ 55 )	PL30	出土遺物13(106~116)
PL19	出土遺物 2 ( 9 ~ 16 )	PL25	出土遺物 8 ( 56 ~ 69 )	PL31	出土遺物14(118~126)
PL20	出土遺物 3 ( 17 ~ 24 )	PL26	出土遺物 9 ( 64 ・ 65 )	PL32	出土遺物15(127~136)
PL21	出土遺物 4 ( 25 ~ 32 )	PL27	出土遺物10 ( 68 ・ 70 )	PL33	出土遺物16(137~174)
PL22	出土遺物 5 ( 31 ~ 39 )	PL28	出土遺物11 ( 71 ~ 82 )	PL34	出土遺物17(175~208)
PL23	出土遺物 6 ( 40 ~ 47 )	PL29	出土遺物12 ( 83 ~ 105 )	PL35	出土遺物18(211~235)

# I 前 言

## 1 調査に至る経緯

中勢道路は、鈴鹿市玉垣町から旧一志郡三雲町に至る総延長33.8kmの一般国道23号のバイパスである。この道路は、北の鈴鹿市から南の三雲町までを縦貫し、日常の国道利用者による交通渋滞緩和と当地域の経済発展を目的に計画されたものである。

この計画路線内の調査は、昭和58年に始まる。調査着手は、工事予定地内の遺跡の把握を行う分布調査であった。その結果、古墳時代～江戸時代の遺物が採集されている。これをもとに建設省(現国土交通省)中部地方建設局と三重県教育委員会が埋蔵文化財の取り扱いについての協議を行ってきた。この結果、現状保存が困難な遺跡については、事前に本発掘調査を行い、記録保存を実施することとなった。

調査とその体制は、中部地方建設局から三重県が委託を受け、平成元年度からは、三重県埋蔵文化財センターが調査を担当し、「人事交流要項」に基づき津市教育委員会(S56～H11)と鈴鹿市教育委員会(H 7～H 9)に協力依頼を行ってきた。また、現地作業にあたっては、建設省中部地方建設局が社団法人中部建設協会に土工部門の委託を行っており、事業実施については、建設省(現国土交通省)と三重県、中部建設協会の三者で「協定書」を締結し、推進している。

中勢道路内の発掘調査は、津市内の9工区六大B遺跡から着手した。これに続いて、6・8工区(鈴鹿市、河芸町)の緊急調査と最も南の14工区中林遺跡、小津遺跡(旧称東浦遺跡)の範囲確認調査を行い、現在は旧嬉野町内から久居市にかけての遺跡調査を実施、継続している。

今回報告の10工区内7遺跡の本調査の結果は、以下の通りである。平成6年～11年度に実施した蔵田遺跡(第1～4次)調査においては、弥生前期～中世の全般にかけて集落跡が確認された。遺構から出土した遺物には弥生土器壺(畿内第I様式)や土師器甕、高杯、S字状口縁台付甕がある。また、位田遺跡では、掘立柱建物と溝から碁石や甕等が出土した。さらに里前遺跡では、中世の井戸から多種の墨書き山茶碗が出土し、知識階級の存在も予察された。また隣接の

梁瀬遺跡では、古代の道路跡が発見され、集落を貫く基幹道路である位置付けが成された。

## 2 調査の経過

式ノ坪遺跡は、平成元年度(1989)に範囲確認調査を実施した。その結果を受けて中部建設協会等と調整協議を行い、平成9年5月に本調査に着手した。現地での当該年度の調査体制は、以下の通りである。

<平成元年度>

第二課長 新田 洋

主査 浅生 悅生(津市教育委員会から派遣)

主事 村木 一哉(津市教育委員会から派遣)

臨時職員 竹内 英昭

臨時職員 油田 秀紀

<平成9年度>

係長 本堂 弘之

主査 宮田 勝功

主事 池端 清行(津市教育委員会から派遣)

技師 西村 美幸

主事 米山 浩之(津市教育委員会から派遣)

技師 水谷 豊

(調査日誌抄)

<A地区>

5月7日 重機による表土掘削開始

5月19日 作業員投入、排水溝掘り。

5月20日 包含層掘削、南側調査区から。

5月26日 西側から溝2条とSB1を検出。

6月2日 SB2・3を検出。

6月17日 8列からミニチュア土器出土。

6月25日 6～8列で弥生土器出土。東西溝2条の続き、掘立柱建物のPit数か所確認。

6月27日 3～4列から炭化物含む円形土坑を検出、竪穴住居跡と予想。

7月14日 排水作業及び灰白色シルトの溝を検出。

7月18日 北側拡張部の包含層掘削で山茶碗、須恵器出土。

7月22日 SD39、SK41～45を掘削。弥生壺が出土。

7月25日 遺構掘削続行、空撮予定を調整、協議。

7月30日 航測入札、総合コンサルかんこう(株)に決

定。

8月4日 SH64等を掘削。炭化物が顕著。重複するSD58の掘削は完了。

8月11日 SK60の断面実測。

8月25日 SD49、42土層断面図作成。

8月27日 全面清掃終了、スカイマスターによる全景写真撮影。航測終了。

9月1日 掘立柱建物写真撮影及び土坑平面図作成。

9月3日 資料提供、中日新聞現地取材。

9月6日 現地説明会開催、参加者80名。

9月10日 SH64炭化材出土状況図完成。

9月19日 拡張部遺構検出。SD67・57・58・51・52埋土除去完了。石鏃2点出土。

10月6日 掘立柱建物Pit断割り及び断面実測。

10月8日 SH64のレベル測量実施。

10月16~17日 下層確認、青木哲哉氏ご指導。

10月20日 SD79の流路確認掘削作業。現場作業終了。

<B地区>

7月7日 西壁清掃、土層確認。北西側から遺構検出。

7月14日 北端で遺構検出、SDと予想。

7月15日 SD1、SK2・3、SD4を掘削、時期不明。SD4はA地区SD14に連続する。

7月23日 道具片付け、写真撮影準備。

7月24日 遺構写真撮影及び平板測量実施。

<C地区>

5月7日 表土除去開始。

5月12日 表土除去終了。

5月19日 作業員投入、現場掘削開始。

5月23日 北調査区で東西溝検出、遺物なし。

5月26日 北調査区、平板測量実施。上の水田部分終了、突帯文土器、山茶碗、土師器出土。

5月29日 SD1、SD2検出。牛の足跡掘削。

6月5日 牛の足跡レベル測量。地区名呼称変更

北区はC-1、南区はC-2、三泗川より北はC-3区へ。

6月12日 C-2一次遺構面検出土層掘削終了。

6月17日 C-1二次検出面、土層図補足。

6月20日 暴風雨で作業中止。

6月25日 C-2牛の足跡、型取り。

6月27日 C-3写真撮影。

7月1日 C-3平板測量及びレベル測量。

7月15日~17日 青木哲哉氏来所、土層図作成。

9月2日 C-4区表土除去作業続行。

9月5日 包含層掘削、山茶碗、陶器出土。

9月11日 包含層Ⅱ掘削、遺構検出。

9月18日 SD1埋土除去、遺物取り上げ。

9月22日 SD1南拡張部分掘削。南壁・西壁土層図作成。

9月25日 調査区全景撮影、C-3区断割り2ヶ所図面作成。

9月29日 C-4区平板測量終了。現地作業終了。

### 3 調査の方法

調査区の設定は、既調査時の小地区設定や遺構略測時の煩雑さが顕著となったため、その方法を修正していくことにした。

調査区は、便宜的に農道によって3地区に分別されるため、A・B・C地区の大地区を設定した。縦貫する道路建設用センターの南北杭を基軸にして、各地区に4m四方のメッシュを区切った。東西は中央列のグリッドにアルファベットのMを与える、東西にI~Rの地区番号を付番した。南北にはA地区の北端の0を基点にC地区の94終点を設けた。遺構・遺物の検出地点はこれら数字とアルファベットの組み合わせで呼称し、把握することにした。

掘削の手順は、表土を重機で掘削し、遺物包含層以下遺構面までを移植ゴテ等を使用し、人力で行った。

図面作成は、略測図を1/100、土層断面図や遺物出土状況図を1/20、一部1/10で作成した。全体の遺構図は、A地区1/50(航測)、B・C地区では1/100(平板測量)を用い、作成した。

### 4 文化財保護法等にかかる諸通知

文化財保護法等に掛る諸通知は以下により行っている

法第57条の3

文化長官へ、H9.5.20付け教理第353号 県知事通知

法第98条の2

文化長官へ、H9.6.3付け 教理第 県教育長通知

遺失物法にかかる文化財発見・認定通知

津警察署長へ、H10.3.18付け 教文第6-99号

## II 位置と環境

### 1 位置と地形

式ノ坪遺跡は、津市南河路字式ノ坪・八反田にまたがる遺跡で、遺跡番号は760である。

南北に狭い平野部を有する伊勢平野は、南は伊勢、北は桑名等四季を挟んで気象的にはさまざまな様相を呈する地域である。その中央部に位置する津市は北から志登茂川と安濃川及び雲出川流域に分かれて特徴的な地形が形成されてきた。そのうち安濃川は錫杖ヶ岳付近に水源を発し、美濃矢川等の支流を生み出してきている。そして当遺跡周辺に至っては、水流の運搬作用によって沖積地が形成されている。さらに河川は東流して、河口部から伊勢湾へと注いでいる。

式ノ坪遺跡(1)は安濃川右岸の沖積地に広がる遺跡で、現況は水田及び畑地となっている。近年のほ場整備事業に先立つ調査によって、周辺遺跡とも併せて古代から中世にかけての集落や遺構の所在が解明されつつある。

以下、順に周辺遺跡の特長を含め、概略を記述しておく。

### 2 歴史的環境

当地の縄文時代の幕開けは、位田遺跡(2)に求められる。ここからは竪穴住居跡が数棟確認され、出土した鉢などの遺物から古代より文化の高さが窺える。また晩期には松ノ木遺跡(3)で炭化物を検出した竪穴住居が見つかった。納所遺跡(4)でも突帯文土器とともに東日本からの強い影響を受けたと考えられる浮線網状文土器の混入が見られ、文化圏交流の高さが偲ばれる。<sup>①</sup>

次の弥生時代は、既述の納所遺跡を大集落の拠点とし、前期の上村遺跡(5)、中期の亀井遺跡(6)へと続く。後葉には、大集落の長遺跡(7)と山籠遺跡(8)が出現する。ともに短期間に栄えた遺跡で、どちらも争乱期に繁栄した遺跡である。後期に入ると、美濃屋川沿いに高松C遺跡(9)のように大規模な拠点集落も出現する。西方には、水田遺構を検出した森山東遺跡(10)や灌漑施設が確認できた蔵田遺跡(11)<sup>②</sup>が著名である。

古墳時代に入ると、太田遺跡(12)が展開するが、建物跡を確認するに止まり、集落の形成過程をたどることはできていない。

古墳の造営も盛んになり、4世紀～6世紀の間で展開していく。順にまず明合古墳(13)が造営され、下流部の池の谷古墳(14)、鎌切1号墳(15)が築かれる。次に小型の前方後円墳であるおこし古墳(16)や殿村1号墳(17)が小丘陵に築造されていく。メクサ古墳群(18)や君ヶ口古墳(19)は、それぞれすべてが方墳で構成されることや横穴式木芯室を有することで注目に値する。続いて6世紀に入ると、副葬品で注目される門脇北古墳(20)や西岡古墳(21)からは、埴輪列や鉄製農具が出土している。終末期に入ると、家形石棺を検出した鳥居古墳(22)と400基以上を確認した長谷山古墳群(23)が次第に築造されてくる。

飛鳥時代に入ると、宮ノ前遺跡(24)では竪穴住居に掘立柱建物が共存することが判明している。これに続いて、志登茂川流域の橋垣内遺跡(25)では掘立柱建物のみで構成されていたことが判明した。

古代に入ると、この地域特有の地割りが確認された遺跡が連続する。森山東遺跡や蔵田遺跡においては条里及び坪界が多数確認してきた。平田遺跡(26)式の坪遺跡では、これらと同方向の建物跡が多数認められている。また、位田遺跡や梁瀬遺跡(27)では溝と並行する道路が確認されて、次第に流通の展開が理解できている。

以後の歴史的事実は文献においても詳細に記されているが、本稿では省略する。

### 註

①中村光司『位田遺跡(第2次)発掘調査報告』津市教育委員会  
2002.3

②米山浩之・宮田勝功『蔵田遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター  
1998.3

③水谷豊『惣作遺跡発掘調査遺跡』三重県埋蔵文化財センター  
2002.3



第1図 遺跡位置図(1:50,000)（国土地理院 1:25,000 津東部・津西部・棕本・松阪港による）

この地図は国土地理院長の承認を得て同院発行の2万5千分の1地形図を複製したものである。（承認番号 平16部複、第248号）

### III 層序と遺構

#### 1 基本的層序

A地区からC地区にかけての全調査区間400mで標高が北から6.9m～5.1mと推移し、若干の高低差を持っている。調査区は安濃川右岸に広がる氾濫原で、遺構検出面である地山は沖積地の様相を呈しており、大半がシルト層となっている。以下、順に基本的な層序を記述する。

A地区は、基本的に、第1層は耕作土(茶褐色土)、第2層は(黄褐色砂質土)、第3層(灰暗褐色シルト)、第4層(淡褐色シルト)、第5層(灰色砂質土)が堆積しており、主に第3層で遺構を検出した。ただし、遺構の一部については、第4層上面で認められたものもある。

B地区は、微高地の縁辺部から南斜面側にあたり、中世以降も幾度となく、耕作や搅乱を受けているとみられる。以下、順に記していく。

第1層耕作土(暗茶褐色土)、第2層(黄橙色粘質土)、第3層(灰色砂質土)の順に堆積しており、古代末期の遺構は第3層上面で認められた。

C地区は、幅狭のトレンチ調査となったが、基本的には既述の地区と同様の層序となっている。

第1層耕作土(茶褐色土)、第2層(黄橙色土)、第3層(暗褐灰色シルト)、第4層(灰褐色砂)、第5層(灰色シルト)、第6層(褐色灰シルト)で以下の層位は青色系・灰色系の互層となって堆積している。

#### 2 遺構

A地区からC地区までの調査区からは主に弥生時代中期と平安時代初頭～後期に亘る遺構を検出した。特にA地区は竪穴住居、および計画的に配置された掘立柱建物とそれらを取り巻く溝が注目できる。C地区については限られたトレンチ調査ではあったが、牛の足跡が広い範囲で確認できた。

以下、順に遺構種別に分けてA地区から報告する。

##### (1) A地区

###### 弥生時代

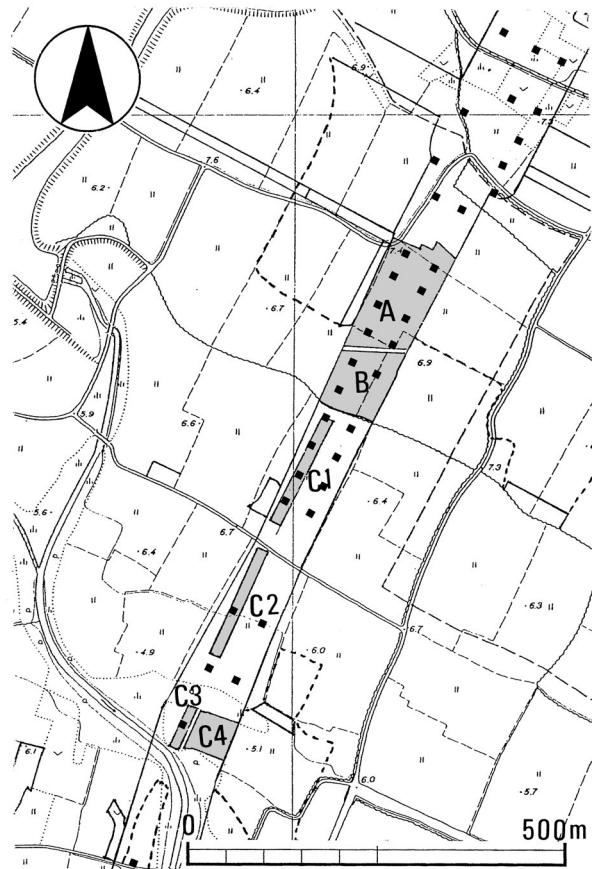
###### a 竪穴住居

S H64 調査区北端のK～M 1～4グリッドで確認した。検出時は土坑と推測していた遺構であるが完掘

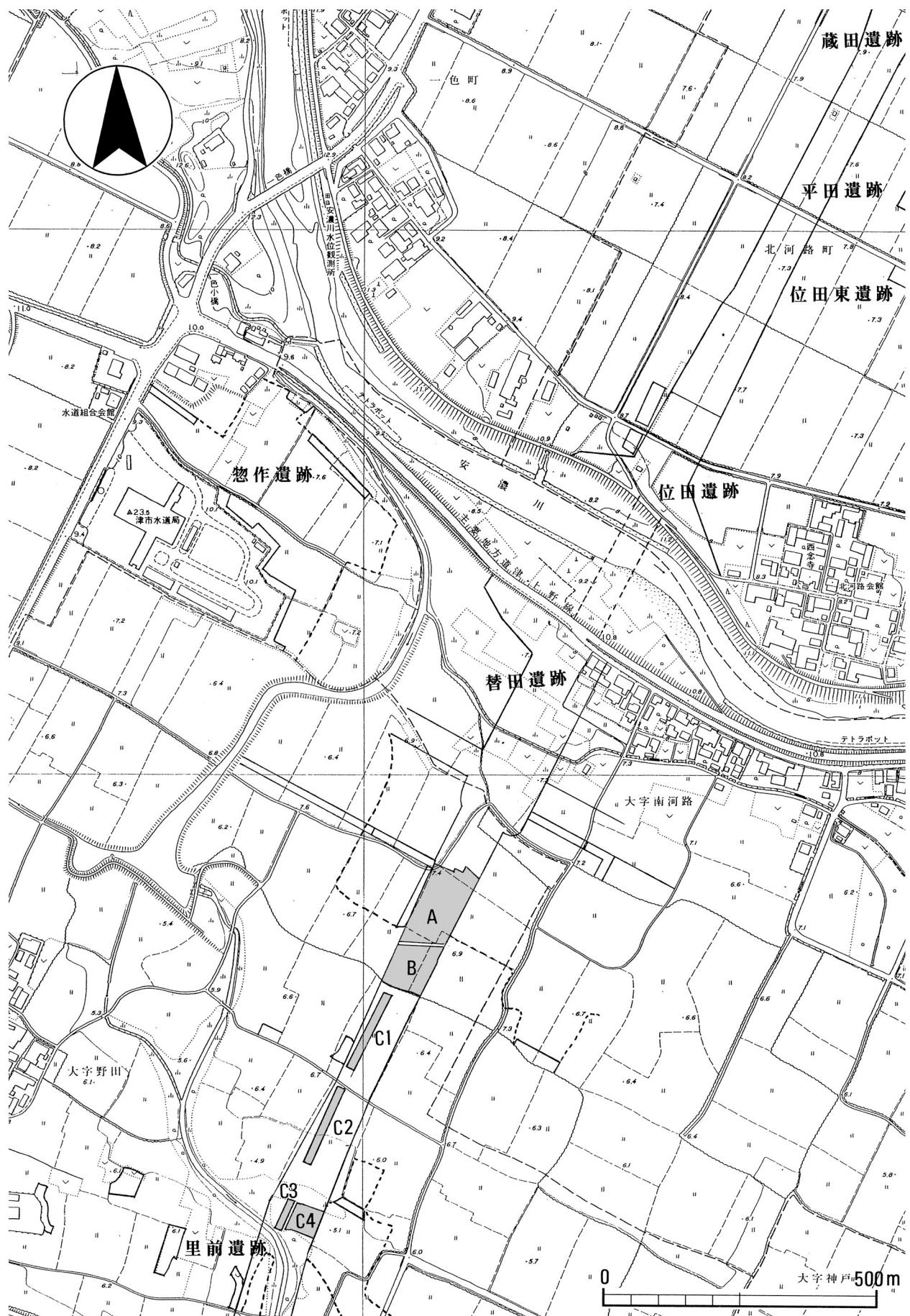
時には、深さは約20cmを測り、直径8.2mで、平面形がほぼ円形を呈し、床面の形状が平坦な竪穴となつた。法面から約1m程内側で、同心円状に7基のPitが掘り窪められていた。これらはどれも直径が30cmで、掘形は最深で20cmである。南東部には、幅1.2m×奥行1.0mの張出部がある。また、床面中央には長軸が1.1m、深さが45cmの不定梢円の土坑を1基確認した。壁面は若干焼けており、埋土には灰や炭化物が少量含まれていた。この状況から炉跡と推察した。また、床面全体に炭化材が多数残存していた。どれも横位で散在しており、焼け落ちた部材であると考えられる。これらの炭化材に混じって、無頸壺(19)等が出土し、出土遺物から弥生時代中期頃の遺構と考えられる。

###### b 土坑

S K41 O 10で確認した。縦0.5m×横0.4mで、深さは10cmである。検出時はその規模が1m程度であった



第2図 調査地区割図(1:5,000)



第3図 周辺地形図(1:5,000)

が、完了時には周囲の柱穴と同形状になった。底部の埋土から壺(1)が出土した。

**S K 42** 主軸が南北方向の遺構である。縦1.4m×横0.7mで、長楕円形である。深さは40cmを測る。底部から甕片が出土したが細片で断定できないが、中期頃に該当するとみられる。

**S K 43** M13~15で確認した。縦5.5m×幅1.4mで、深さは約40cmである。平面形が長楕円の土坑である。SD36に切られる。これについても南北方向の溝群と関連性が予想されたが、最終的に別遺構であると判断した。底部の埋土からは、土器細片しか出土しなかつたため断定できないが弥生時代に相当するものと考えられる。

**S K 45** SK70の東隣、O10グリッドで確認した遺構である。南端部がSD48と重複するため、詳細な規模は不明であるが、残長で、縦1.5m×横0.7mであろう。現存最深は20cmを測る。埋土には炭化物が混じり、焦土も少量が認められた。時期的にはSK70同様、中期頃に該当するとみられる。

**S K 59** SK63の北隣、N・O3グリッドで検出した。直径1.2mのほぼ円形を呈する土坑である。深さは比較的浅く、20cmを測る。周縁部からは、横転した状態の甕(4)が認められた。また、中央からは、やや大きめの炭化材が2点出土した。埋土に多量の炭化物を含むところから、用途的には廃棄土坑とみられる。時期的には、既述のSH64と同様であるとみられる。

**S K 60** 北端部にあたるN1グリッドで確認した遺構である。縦1.2m×横0.8mで、平面形は隅丸長方形を呈する。現存最深は20cmである。出土した広口壺(5~9)から時期的には中期頃の遺構であると考えられる。

**S K 61** P~Q1~2グリッドで検出した。長さ6.2m、最大幅1.2mの長楕円形を呈する。現存最深は35cmを測る。途中、排水溝が掘られ、削平されている。出土した壺(10)、甕(13)から当遺構も中期頃に該当するものと考えられる。

**S K 63** 壱穴住居SH64の周辺に分布する土坑7基のうちの1つである。後攻するSD58と重複し、かなり搅乱を受けている。規模は、縦1.3m×横は北端で0.8mを測り、平面形が長楕円を呈する。深さは10cmである。炭混じりの埋土から壺(17)が出土した。これらから時期的には中期頃に相当する。

**S K 68** SK60に近接する。軸方向は90°南に折れる。縦2.6m×横0.9mで、長楕円形を呈する。深さは約20cmである。上記のSK60に連続する同じ性格の遺構と考えられるが、埋土も若干異なるため、詳細は不明である。内部から壺が出土した。遺物から中期頃とみられる。

**S K 69** 最北部のQ1グリッドで検出した。縦1.1m×横0.5mで、平面形が不整形な楕円を呈する。深さは約20cmである。底から出土した甕(28)、壺(29)の残存状況は良好で、これらから時期的にはSK59と併行する時期のものであろう。

**S K 70** N10・11グリッドで検出した。調査区中央で、しかも土坑群の集中した4基のうちで、西側に位置する。縦2.4m×横1.1m、現存最深は、SD39・48が縦横に交差するため、不確定であるが15cmを測る。平面形が隅丸長方形の遺構である。隣接するSK45・42と比較すると長軸方向が90°西に傾く遺構である。ほぼ完形の壺(64)が南端で出土した。中期末頃の所産である。

**S K 72** SH64内の床近くで確認した遺構である。縦1.3m×横0.8mで、平面形は長楕円形を呈する。深さは、35cmを測る。検出時には平安時代末頃の遺物が少量混入していたが、完掘時には甕(65・66)が認められたので、SH64の埋没直前に掘られた遺構であり、時期的には弥生時代中期頃の遺構であると考えられる。

#### c 溝

**S D 49** 調査区北側の7~8列グリッドに位置し、東西方向に流れ、東側の途中で南北に蛇行する溝である。最大幅は、2.5mを測り、深さは60cm前後である。断面形は、U字形を呈する。埋土は上下層に大別でき、2時期に亘って存続していたとみられる。上層からは壺(49)が、下層の土器溜りからも壺(30)が出土している。これらから時期的には少なくとも中期末頃まで機能していたと推察される。

**S D 78** 調査区の中央部を東西に流れる遺構である。最大幅は2mを測る。調査の制約からトレンチ掘削を実施した。深さは50cm前後であることを確認した。内部から甕(67)が出土した。この遺構も同様の中頃の遺構であるとみられる。

**S D 79** SH64の北側で確認した。概ね東西方向に流れる遺構である。検出時の最大幅は2.5mで、深さは

トレンチ内で、約60cmである。下層から(68)、(69)が出土した。時期的にはSH64と同時期と考えられる。

#### 奈良時代～平安時代

##### a 掘立柱建物

**S B 65** J8 グリッドで検出した。桁行2間×梁行2間の東西棟である。棟方向はN63°Wを示す、側柱建物である。前後関係では、SD49埋没後に建てられた遺構である。規模は、桁行が4.1m、梁行は3.1mを測り、柱間は等間である。柱掘形は一辺は30cm前後の方形を呈し、深さは最深で40cmである。底部径は17cmを測る。

出土した土師器から奈良時代後半に相当する遺構である。

**S B 9** SB65の東方に近接して確認した建物で、桁行3間×梁行2間の東西棟である。やはり棟方向はSB65同様にN62°Wに直交する。規模は、桁行が5.0m、梁行は3.6mを測り、それぞれの柱間は等間である。

柱掘形は一辺が約40～50cmの方形で、深さは35cmである。認められた柱痕跡は径が20cm前後である。

出土遺物から時期的にはSB65と並ぶ建物であろう。

**S B 8** 調査区の中央西側のO～P8・9グリッドで確認した建物である。桁行3間×梁行2間である。規模はそれぞれ7.0m×4.4mの東西棟である。柱間は等間の建物である。棟方向は、ほぼN28°Eに直交する形である。柱掘形は、一辺が40～50cmの方形である。Pitから出土した小片は、詳細な時期は不明であるが、おそらくは平安時代初頭の所産であるとみられる。

**S B 7** 調査区の中央部のP13～15、Q13・15グリッドで確認した。桁行4間×梁行2間で、それぞれ8.4m×4.3mを測り、方向は南北棟を示す。ただ、掘削の制約から梁行はさらに南へ延長されると予想される。掘形は一辺が40～50cmの方形であり、深さは最深で42cm前後である。柱痕跡は直径18cm前後を測る。

時代的にはSB8と同時期の建物であるとみられる。

**S B 6** N～O12～13グリッドで検出した。桁行3間×梁行2間の東西棟である。棟方向は他と若干向きが南に振るが、N62°Wである。規模はそれぞれ6.7m×4.2mを測る。掘形は一辺が30～40cmの方形で、深さは柱痕跡を検出したもので、直径は18cm前後で最深40cmを測る。埋土から灰釉陶器片が認められた。SB5と並行する時期の建物と考えられる。

**S B 5** 調査区の東壁、SB7の北側で確認した。桁行3間×梁行2間で、梁行は調査区の制約からさらに東側の調査区外へ延長される。規模は、6.4m×4.5mである。棟方向はN28°Eを示す、南北棟である。掘形は一辺が40～50cmの方形で、深さは、柱痕跡の最深は45cmである。

出土遺物の土師器甕から平安末頃まで機能していたものとみられる。

**S B 4** SB9の東隣、M～N8～10グリッドで検出した建物である。桁行4間×梁行2間で、南北棟である。棟方向は、N28°Eを示す。柱掘形は他の建物よりも大型で一辺が60～80cmに及ぶ方形で、最深は50cmを測る。柱痕跡は径が判明したもので20cm前後である。

微細な遺物のため、建物の詳細な時期は不明であるが、少なくとも平安時代中頃まで機能していたと考えられる。

**S B 3** SB1の南側、J11～12グリッドで検出した。桁行3間×梁行2間の南北棟で、規模は、それぞれ5.1m×4.1mを測る。棟方向はN33°Eを示す。

柱掘形は、一辺が30cmの方形である。深さは現存最深で56cmである。柱痕跡は、径が20cmを測る。

出土した甕片から平安時代初めの建物である。

**S B 2** K～L11～12グリッドで確認した。桁行3間×梁行2間の東西棟である。規模は、5.2m×4.0mで、柱間は等間である。棟方向はN63°Wを示す。柱掘形は一辺が50cmの方形を呈し、深さは36cmを測る。

**S B 1** SB65の南隣で検出した、南北棟である。桁行2間×梁行3間で、規模はそれぞれ3.8m×5.3mを測る。棟方向は、N28°Eを示す。柱間は東西が2.0mで、南北が1.8mを測り、不均等である。掘形は1辺が40cmまでの方形である。北側の柱穴との切り合いが顕著であり、建替等が考えられる。深さは40cmまでである。

**S B 73** 調査区東壁の拡張した部分で確認した建物である。桁行2間×梁行1間以上の東西棟であると考えられる。規模は南北が4.4mである。東西は調査区外へ延長されるため不明である。棟方向はN62°Wを示す。柱掘形は建物中最大で1辺が60cmで、平面形は方形である。

**S B 74** SB73と重複する建物である。南北がさらに延長されることも予想したが、2間×1間以上の建

物である。棟方向はSB73と若干異なりN60°Wを示している。柱間寸法は長大で桁行が2.4mを示し、梁行は2.1mを測る。

**S B 75** 上記SB74の南側で確認した。桁行1間以上×梁行4間の南北棟である。棟方向はN28°Eを示す。柱間寸法は桁行が2.4m×梁行が2.2mである。東方へ広がる建物とみられるが規模は不明である。柱掘形は一辺は50cmの方形である。柱痕跡には根石を伴うものがある。

**S B 76** SB 7の東側に重複する建物である。桁行2間以上×梁行4間の南北棟である。棟方向はN30°Eを示す。柱間寸法は、不等間である。柱掘形は一辺が60cmの方形である。SB 7に後攻する。

#### b 土坑

**S K 13** J20グリッドで検出した。縦1.0m×横0.5mで、平面形は長楕円の土坑である。現存最深は10cmを測る。検出時には溝と予想したが、南北方向には連続せず、周囲の遺構配置とも鑑みて最終的に土坑と判別した。埋土から土器細片が出土した。断定はできないが、古代の遺構であろう。

**S K 17** SK13のさらに北側に所在し、I18グリッドで検出した。縦1.7m×横1.4m以上の遺構で、平面形は不定形である。深さは、10cmである。西端部は調査区外へ延長されるため、全体の形状は不明である。検出時は重複関係が不明瞭で、いくつかの土坑が集中して掘られている観があったが、遺物も少量で溝からの混入も少ないので、単独の遺構であると判断した。溝SD14以後の遺構であるが古代の遺構であると考えられる。

**S K 30** N～O15～16グリッドで検出した。縦3.7m×横3.6mを測り、掘削完了時の最深が20cmの不定形な土坑である。SD25～SD28と重複し、後攻する。底部の形状は、中心部に向かって緩く窪む船底状を呈する。おそらく廃棄土坑であるとみられる。埋土から細片であるが甌が出土した。平安時代までの遺構であろう

**S K 27** 上記のSK30の埋没後に掘られた遺構である。縦1.9m×横1.0mを測り、平面形は不定形である。現存最深は25cmである。底部から土師器等が出土した。時期的には奈良時代末以降に相当するとみられる。

**S K 50** L～M 7グリッドで検出した。遺構の北半部

がSD49と重複する。東西方向は5mで、南北方向は3m以上になると推定する。床面はやや深く掘り窪められている。最深は30cmを測る。焼土や炉跡は認められなかった。底部の灰色シルト層から土師器杯(71～73)が出土した。時期的には奈良時代後期ころに相当すると考えられる。

**S K 54** SB 8に近接するP 8グリッドで検出した。縦0.8m×横0.3mで、深さは15cmを測る。埋土から土師器が出土した。建物出土の遺物と共に伴するため、同時期に設営された遺構であるとみられる。

#### c 溝

**S D 11・12** 調査区南端で検出した。座標北に対して軸方向が63°西偏する遺構である。どちらも東西方向の溝で、SD11は幅1.7m、深さは最深で、10cmを測る。SD12は最大幅が0.8m、深さは25cmである。

**S D 14・18・16** SD11から北へ12m間隔で平行するSD14とさらに2m間隔で連続する遺構である。幅はどれも0.5～0.7mの範囲で、深さも最深で20cmである。規格的に配置された遺構である。細片であるが土師器片が出土した。時期的には平安時代初めに相当する。

**S D 20・21・22・23** 上記のSD19～16に直交する。それぞれの幅が0.5m、深さは10cmである。遺構間隔は概ね4mと均等であり、規格的な配置の溝群である。灰釉片が出土していることから先述のSD14と同時期の所産である。

**S D 24** SD23と重複する。NO17・18グリッドで検出した。方向的には上記のSD14と比較すると、約25°東に振れる。幅は1.1m、深さは20cmを測る。北端部は東に屈折するが、後世の溝で搅乱を受け、東側の状況は不明である。また、南端部も東に屈折して収束している。おそらくは周溝と予想されるが、詳細は不明である。埋土から土師器が出土した。時期的には古墳時代に相当するものとみられる。

**S D 25・26** 既述の溝群と比較すると約5°北に振れる。規模も小さく、幅が0.4m、深さは7cmを測る。SD25は遺構の半ばでSD22と接続する。

**S D 28・29・36** SD20等一連の溝群と比較して北に傾く遺構で、N38°Wを示す遺構群である。SD28は幅0.6m、29も0.6mを測る。36のみ若干狭くなり、幅は0.4mである。深さはどれも30cmでほぼ同一である。SD34・31・32と重複する。

**S D 35・37・38・47・46・40・53** 掘立柱建物群に近接する位置で認められた遺構である。最大幅は0.7mで、深さは50cmを測る。方向的には同一で、N43°Wを示す。これらを検出状況から溝と判断したが、規模的にもPitと同等のものがあり、詳細な性格は不明である。小片であるが、土師器皿が出土しており、それらから平安時代初頭頃の範疇であると考えられる。

**S D 48** 上記のSD36と平行し、北へ12m進んだ地点で検出された。K列グリッド付近でやや蛇行するが、ほぼ東西に直線状の溝である。幅は0.3m、深さは最深10cmを測る。既述のSD35と同時期の所産であると考えられる。

**S D 39・55** 調査区北半部5～12グリッドで検出した。既述のSD20等の溝群と同方向の遺構である。N30°Eを示す。両遺構間は1.5mを示し、それぞれ幅はSD39が0.4m、55も0.4mである。

**S D 51** 6～7列グリッドに位置し、東西方向に直線状で、SD49の埋没後に設営された遺構である。幅は1.4mで、深さは最深で60cmである。規模からみて、おそらくSD52と同時期の所産であろう。

**S D 52** SD51に近接し、東西方向に走る遺構である。既述のSD4等と同方向の溝である。幅は0.8mである。灰釉陶器(82)が出土した。

**S D 62・56・57・66・67・10** SD62はN5グリッドで検出した。幅0.4mで残存状態が極めて小さい溝である。SD56・10は両遺構間は1.0mを測り、東西に平行して走る遺構である。SD57は最大幅が1.1mを測り、深さは20cmである。やはり東西方向に走る溝である。位置的には既述のSD52から北へ約8.0m部分で平行する溝である。しかもSD56及び10と重複し、後攻するSD66・67も62同様小規模な遺構で、幅は0.5mを測る。その方向性から関連遺構である可能性は高いであろう。SD10はSD57と東部で重複するが、幅も狭く0.3mを測る。時期的には平安時代初頭頃と考えられる。

**S D 34・31・32** SD20等の溝群と同方向の遺構である。最大幅は0.4mを測る。どれも古代～中世初めとみられる山茶椀が出土した。

## (2)B地区

調査区の全体に砂層が堆積し、安定した基盤が検出されなかった。しかし、北端部では既述のA地区から連続する溝を安定した地山上で検出できた。

### a溝

**S D 80** 幅0.5m、検出した長さは10mで深さは最深で0.6mを測る。並行して配置された遺構で、遺物から平安時代初め頃と考えられる。

**S D 82** 東端で確認した。SD12から連続する溝である。長さ6m×幅0.8mで、深さは30cmを測る。細片が出土したが、詳細な時期は不明である。

**S D 83** 西端で確認した。幅0.6m、深さ0.4mである。検出面は不明瞭であり、埋土も上層からの混じりこみが多く不安定であった。が方向的にもSD80ともほぼ並行するので同時期の遺構であるとみられる。

### b土坑

**S K 81** 北西壁際で確認した遺構である。A地区から連続する遺構であるとみられるが、検出時の埋土が異質であったため、別遺構と判断した。規模は長軸2mで、深さは最深で0.5mである。

## (3)C地区

試掘調査を受けて、全面発掘を行わず、幅4mのトレンチ調査を行った。便宜的に4箇所に調査坑を設定した。そして、第3・4層のシルト土が一時的な地山であると確認した。湧水もはげしく、調査に苦慮したが、特にC1・C2地区においては牛の足跡を延長28mに亘り検出できた。

### a溝

**S D 84** トレンチの南側で確認した。東に幅が広がっており、SD85へと連続する遺構である。東壁での幅は3.8mである。深さは検出面からは30cm以上である。これ以下は湧水が激しく掘削を断念した。埋土は灰色粘質土である。

**S D 85** 西側は上記のSD84と重複する。深さは湧水のために確認していない。東壁での幅は0.7mである。

**S D 86** K88グリッドで確認した。幅は調査区外へ広がるため不明確であるが1.4m以上である。深さは現況40cm以上であるとみられる。

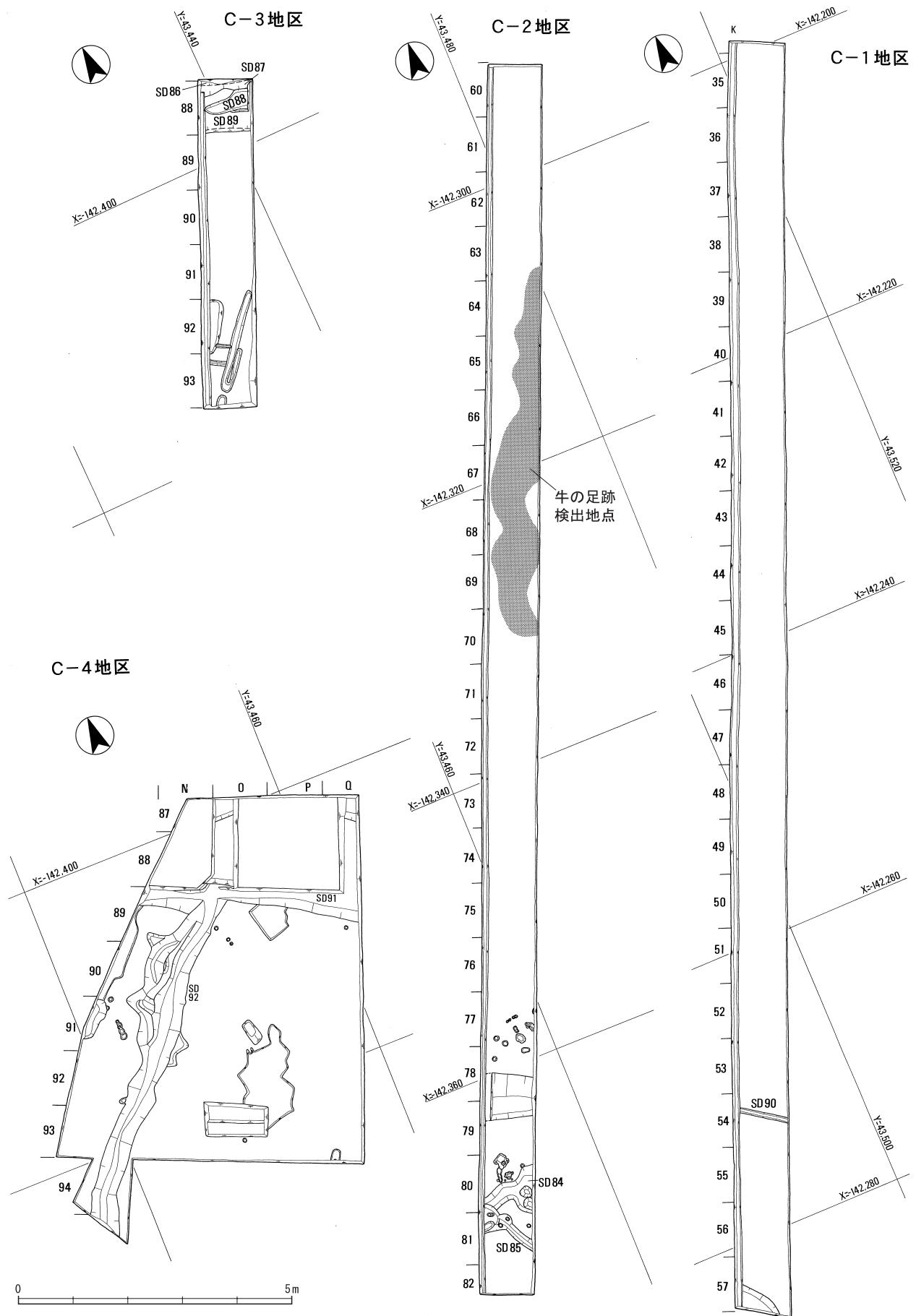
**S D 87** 南側の88グリッドで確認した、東西方向に流れ、N63°Wを示している。幅は0.6mで、深さは10cmと非常に浅い。

**S D 88** 幅1.7mで、深さは、確認していないが、平面形状から自然流路であるとも考えられる。

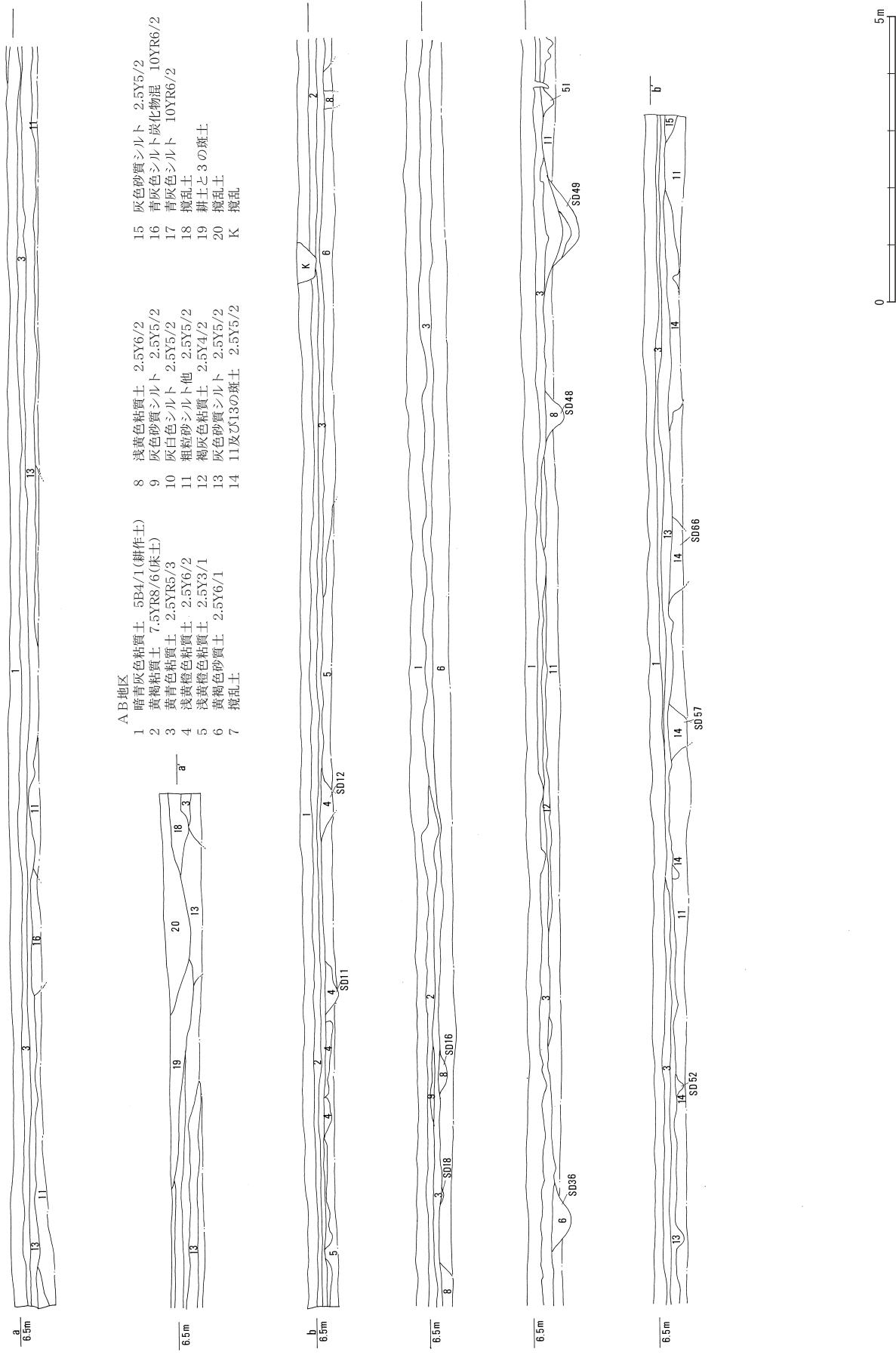
**S D 89** 上記のSD88の南側に検出された。深さは20cmである。並行関係から同時期に機能したと考えられる。



第4図 A・B地区遺構平面図(1:250)



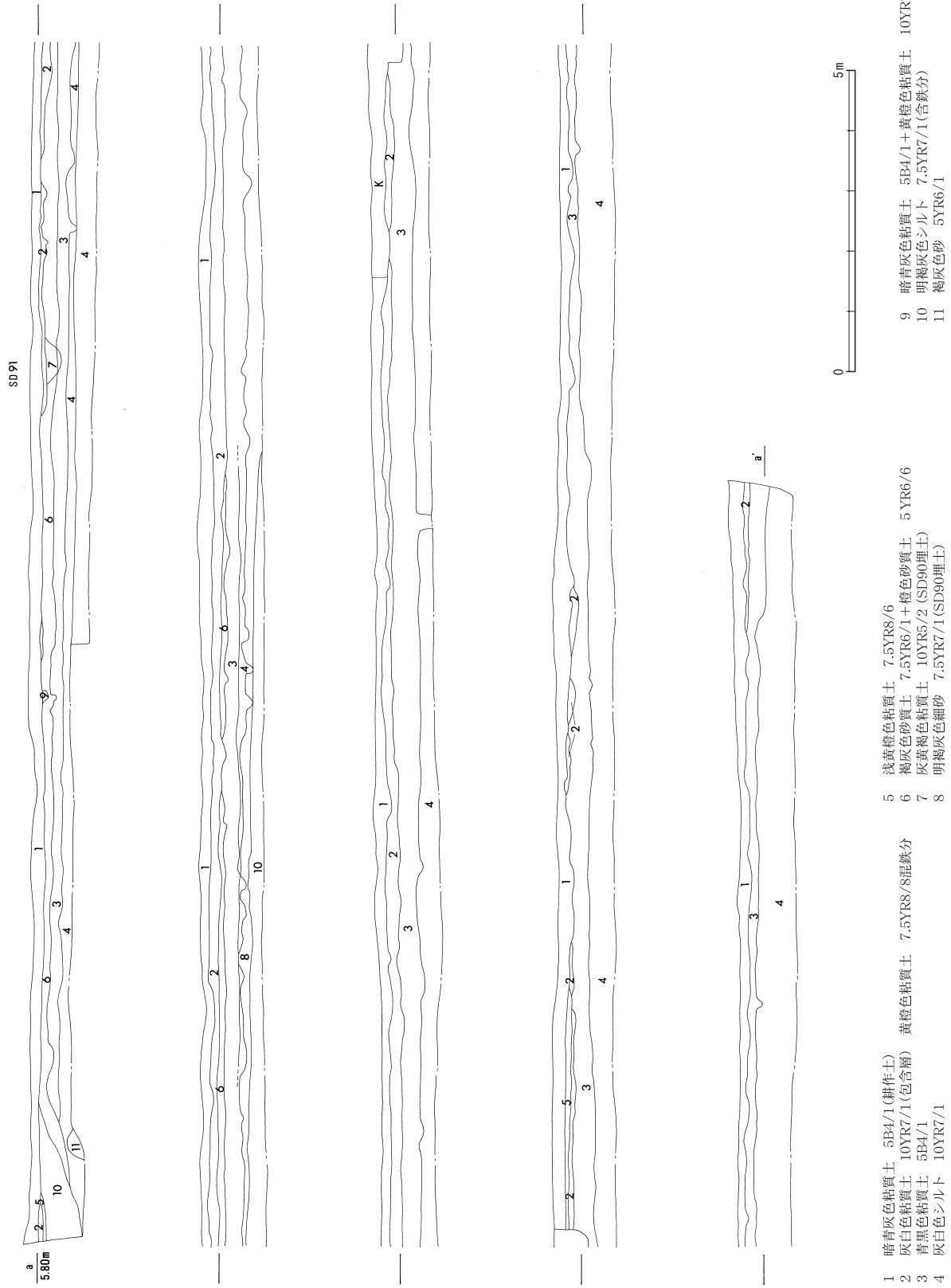
第5図 C地区遺構平面図(1:400)



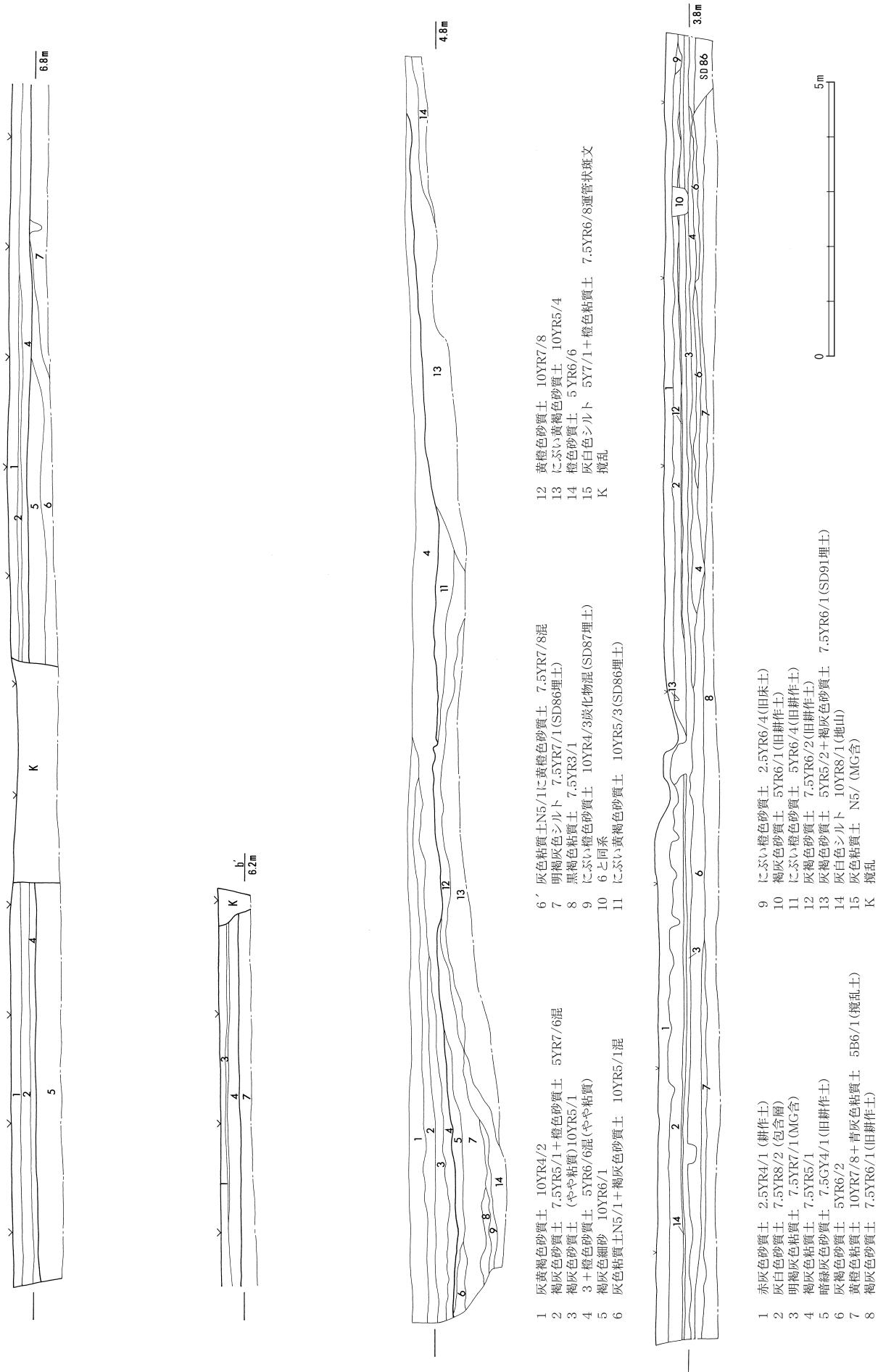
第6図 土層断面図1 (1:100)



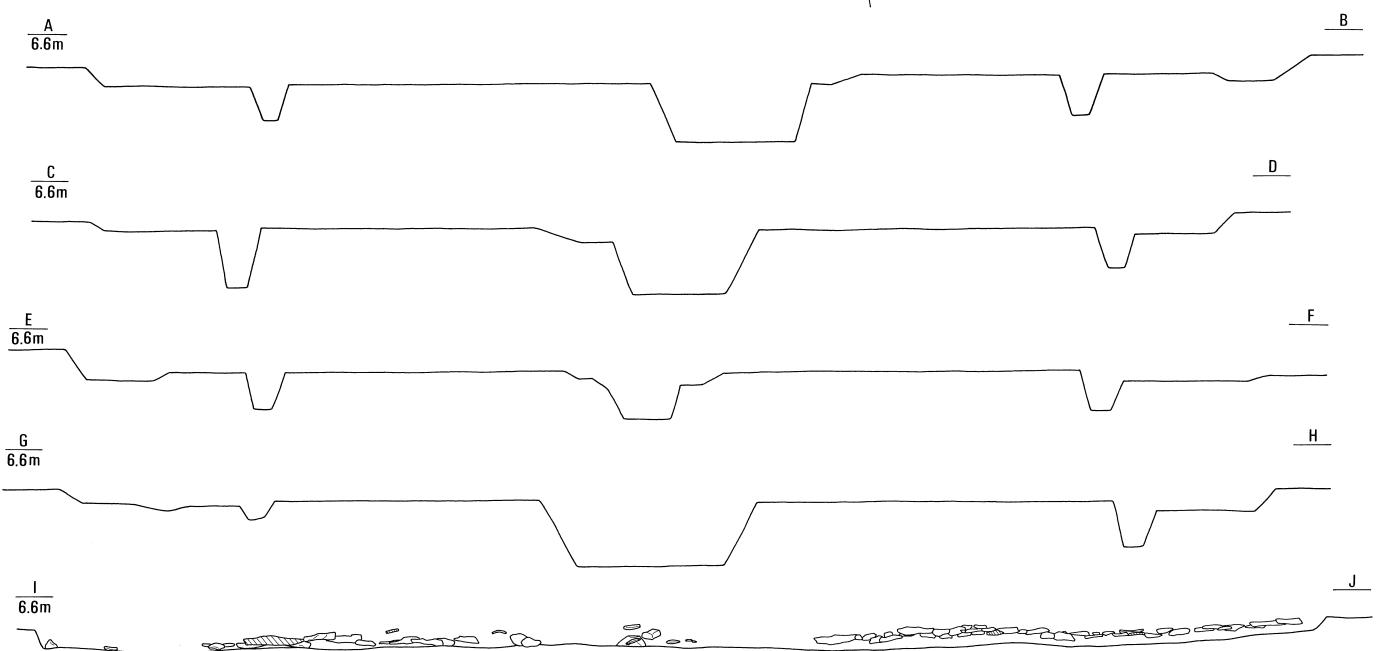
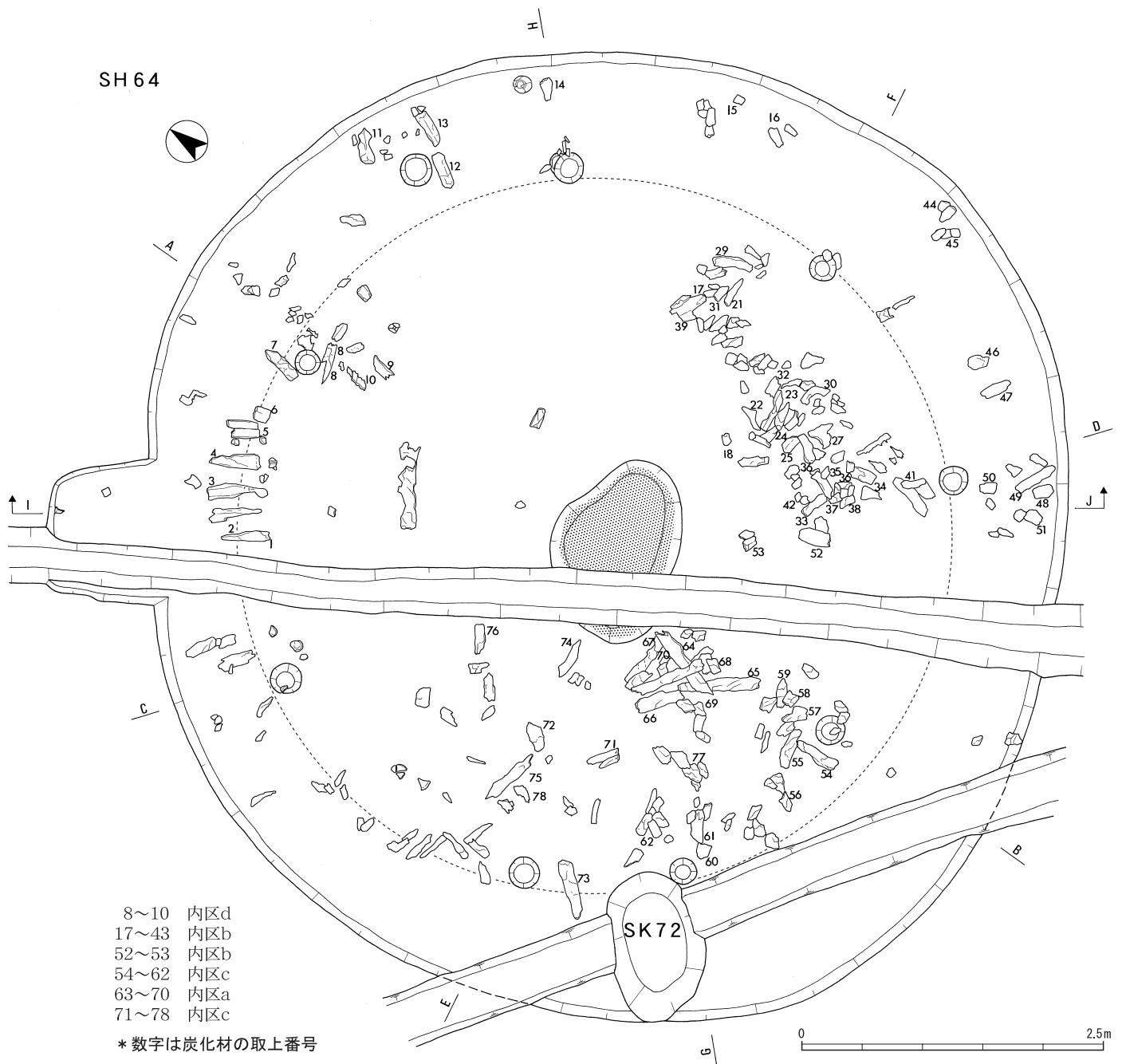
第7図 土層断面図2 (1:100)



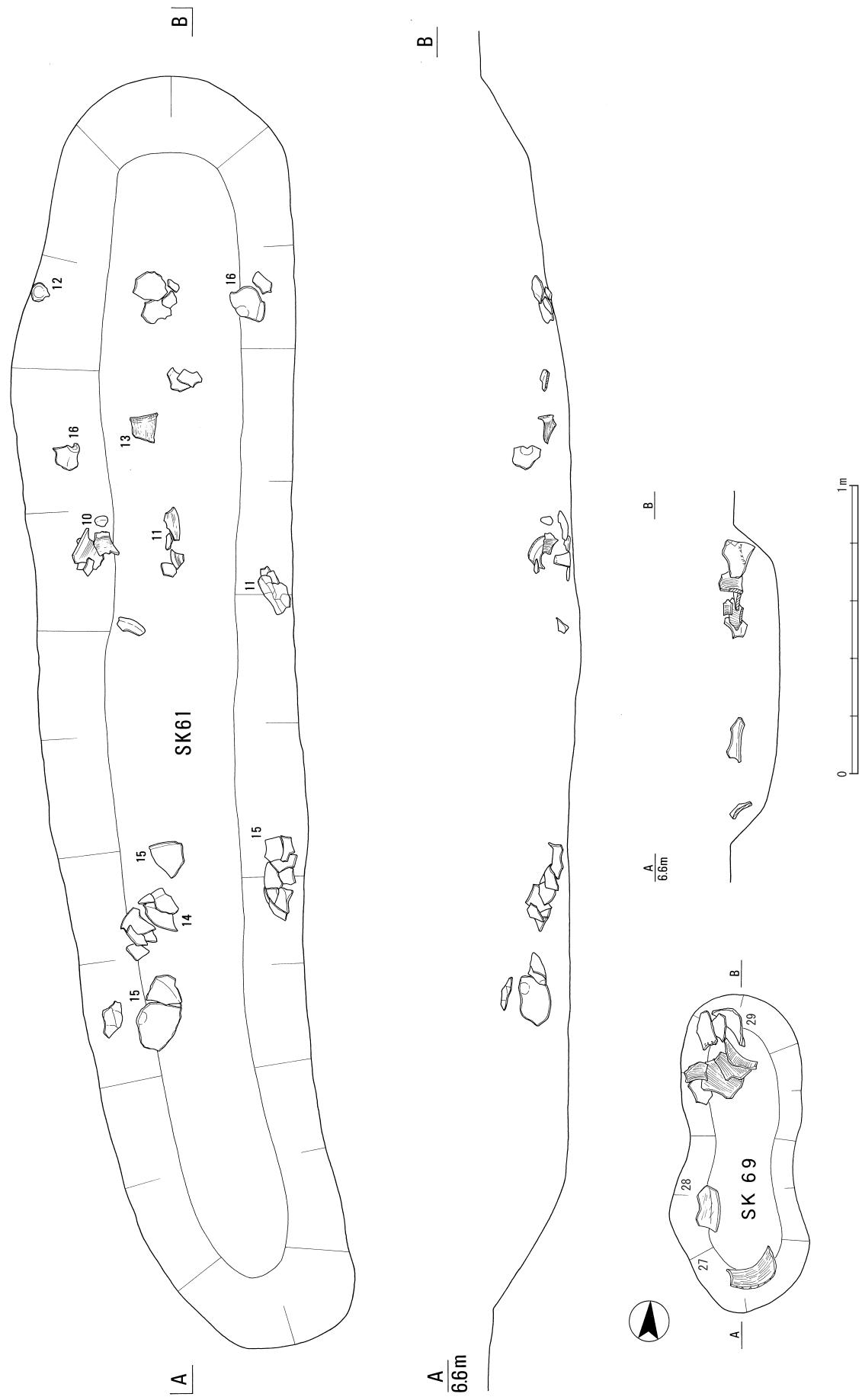
第8図 土層断面図3 (1:100)



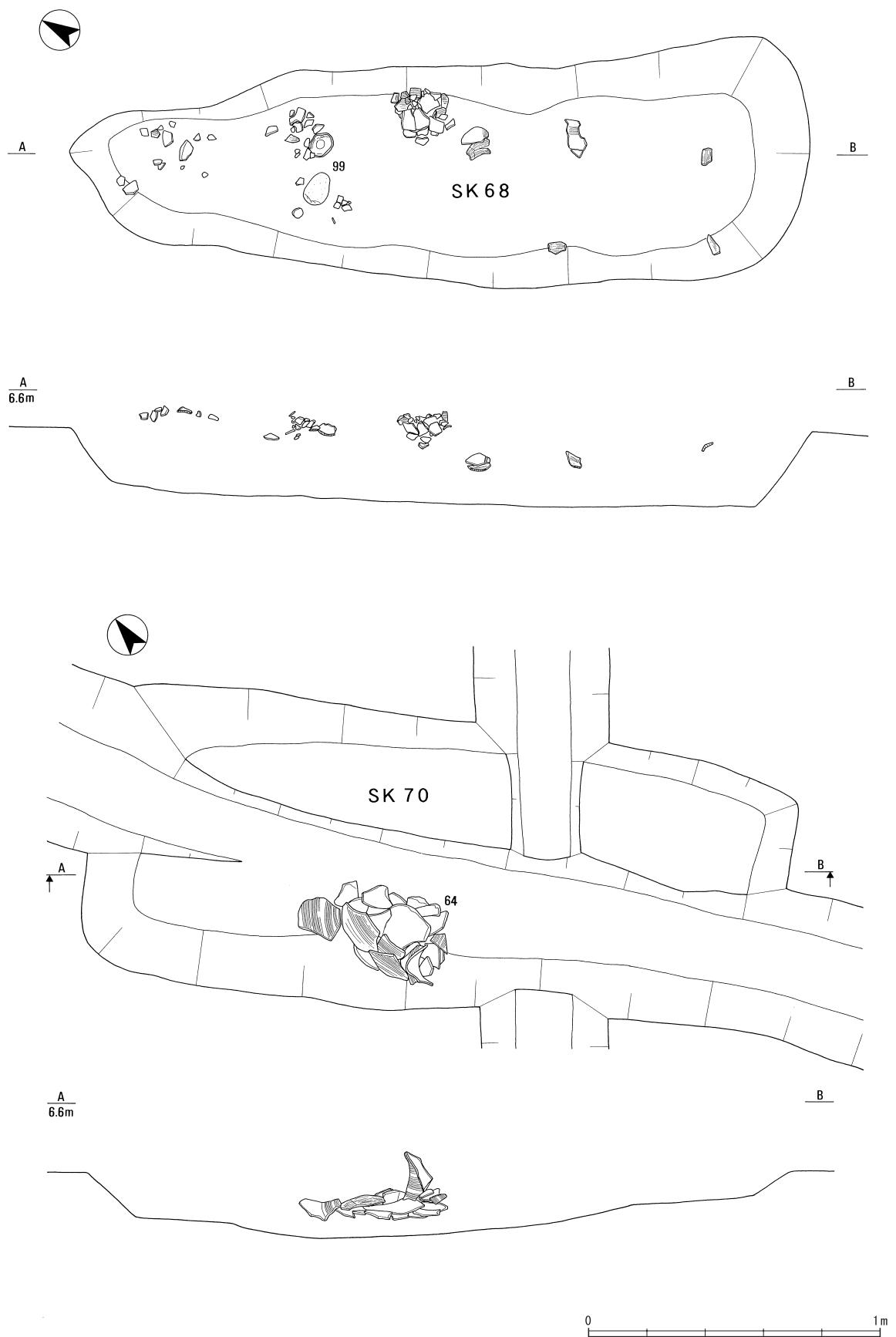
第9図 土層断面図4 (1:100)



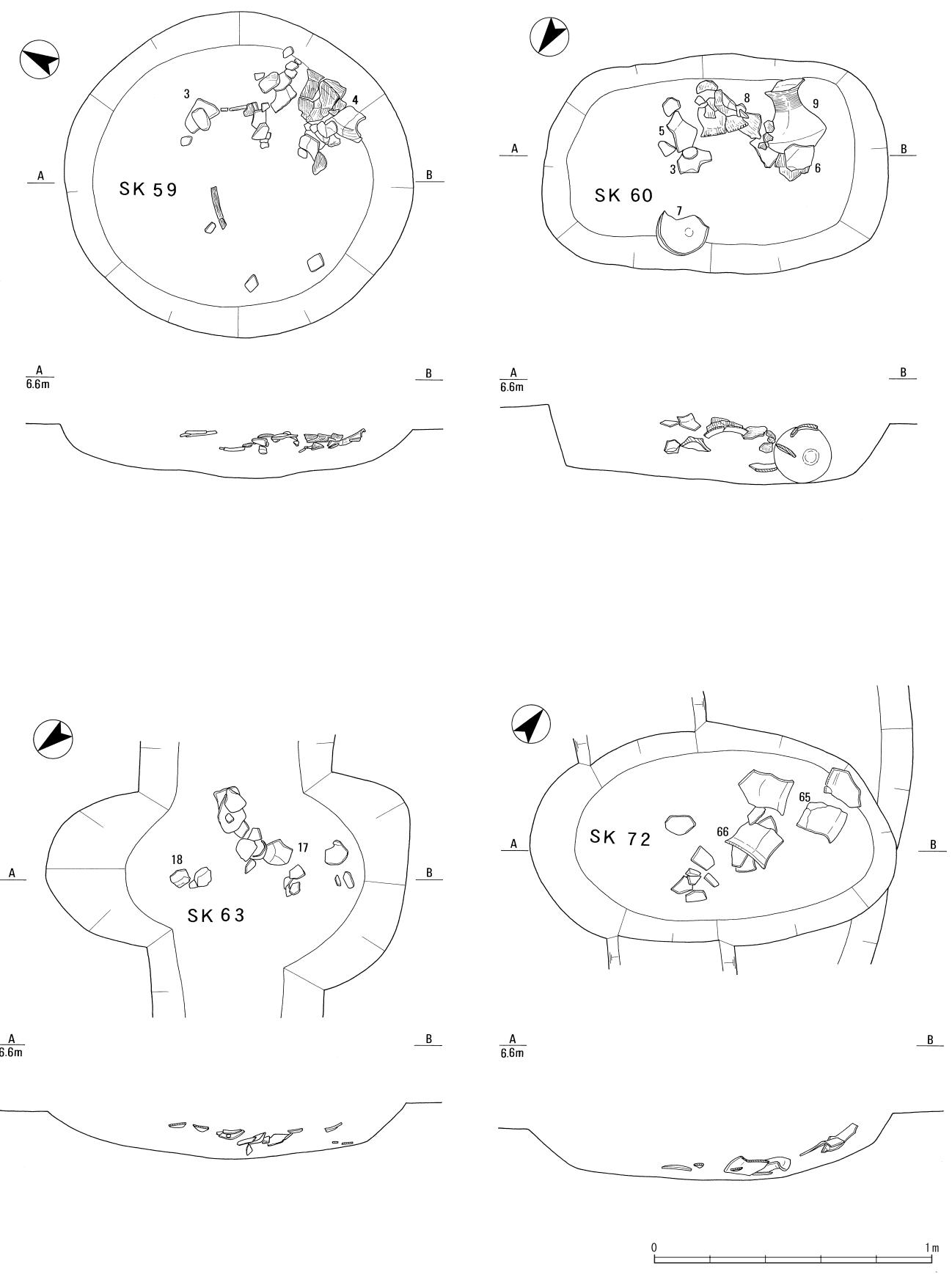
第10図 SH 64実測図(1:50)



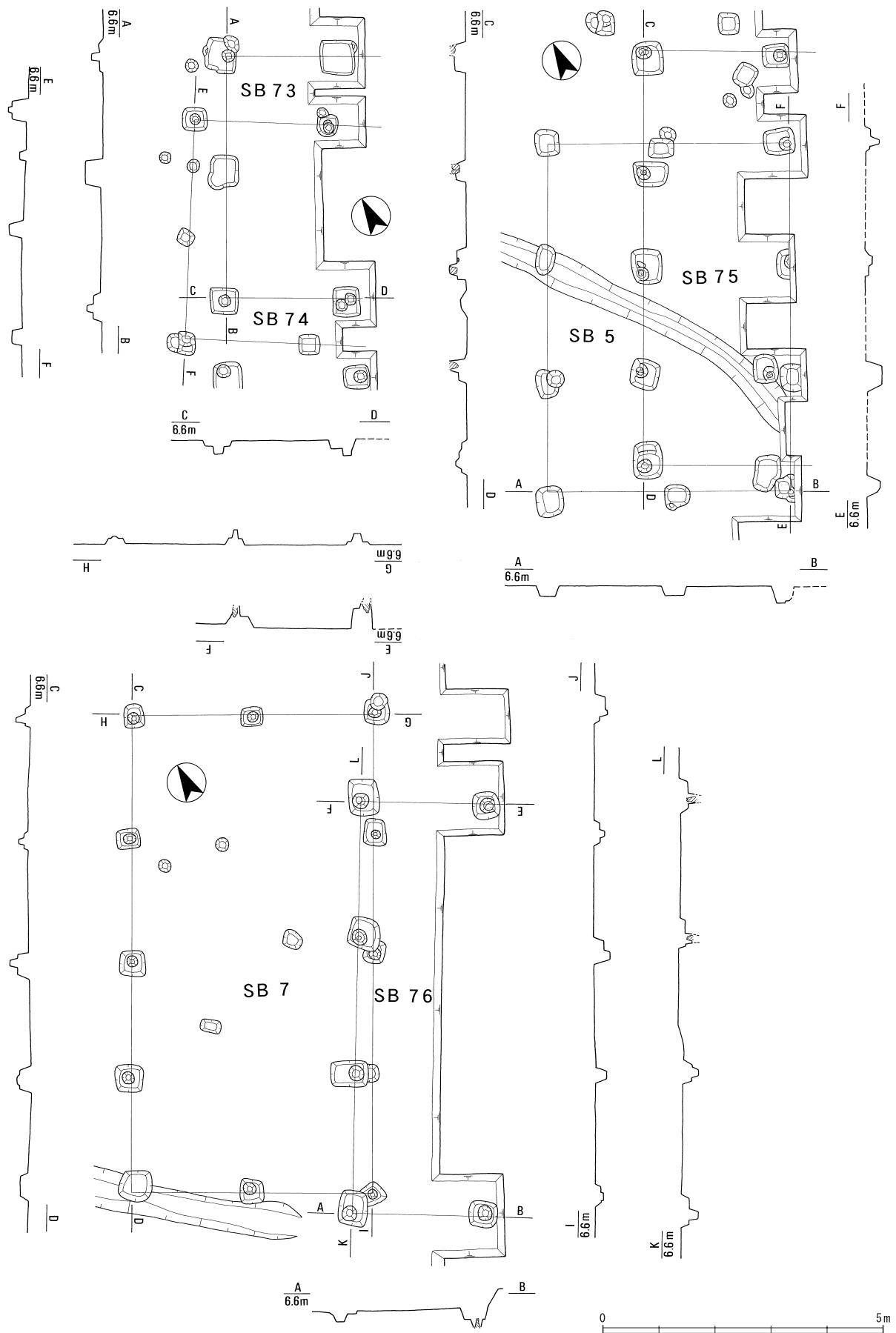
第11図 SK 61・69実測図(1:100)



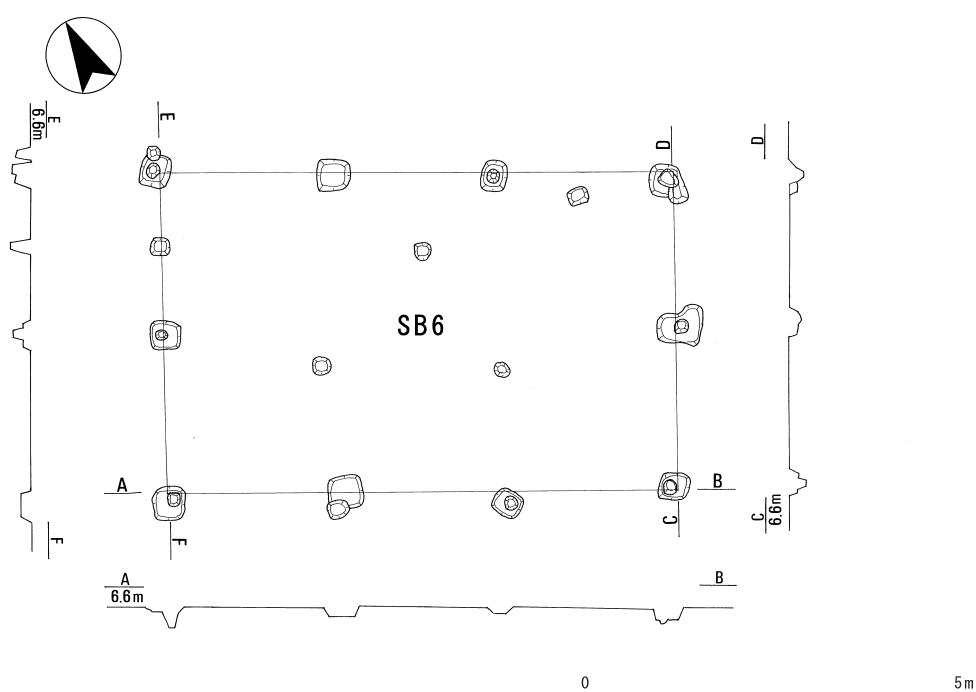
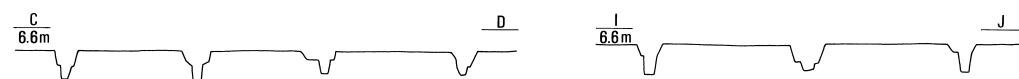
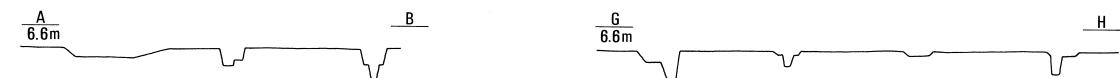
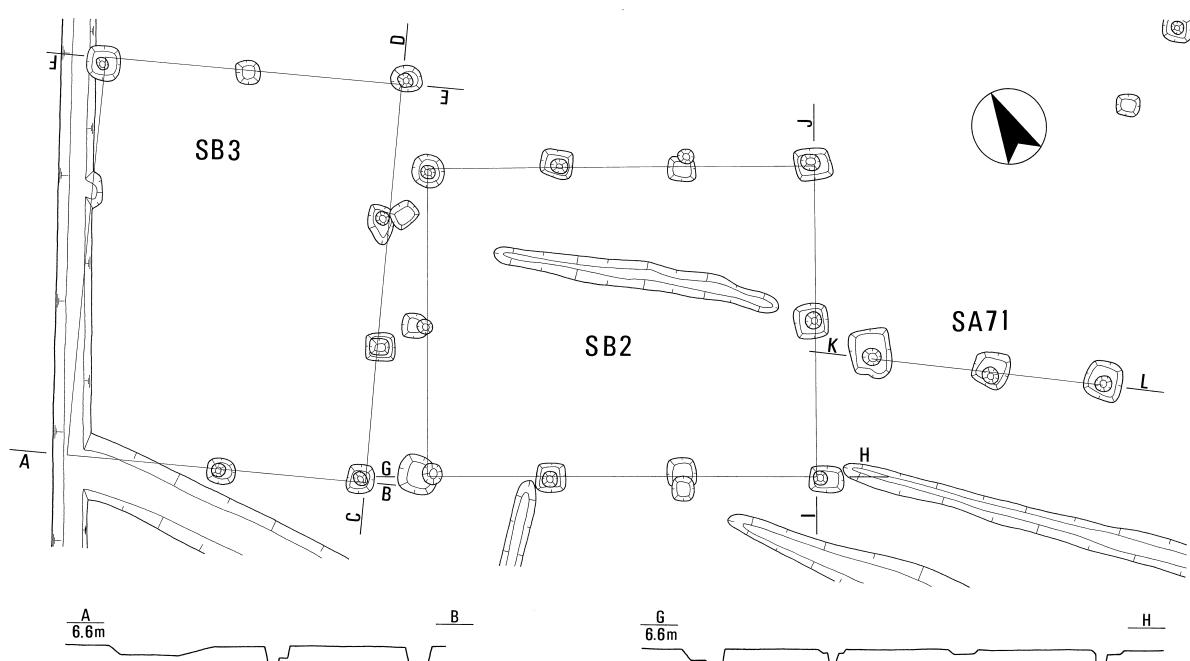
第12図 SK 68・70実測図(1:20)



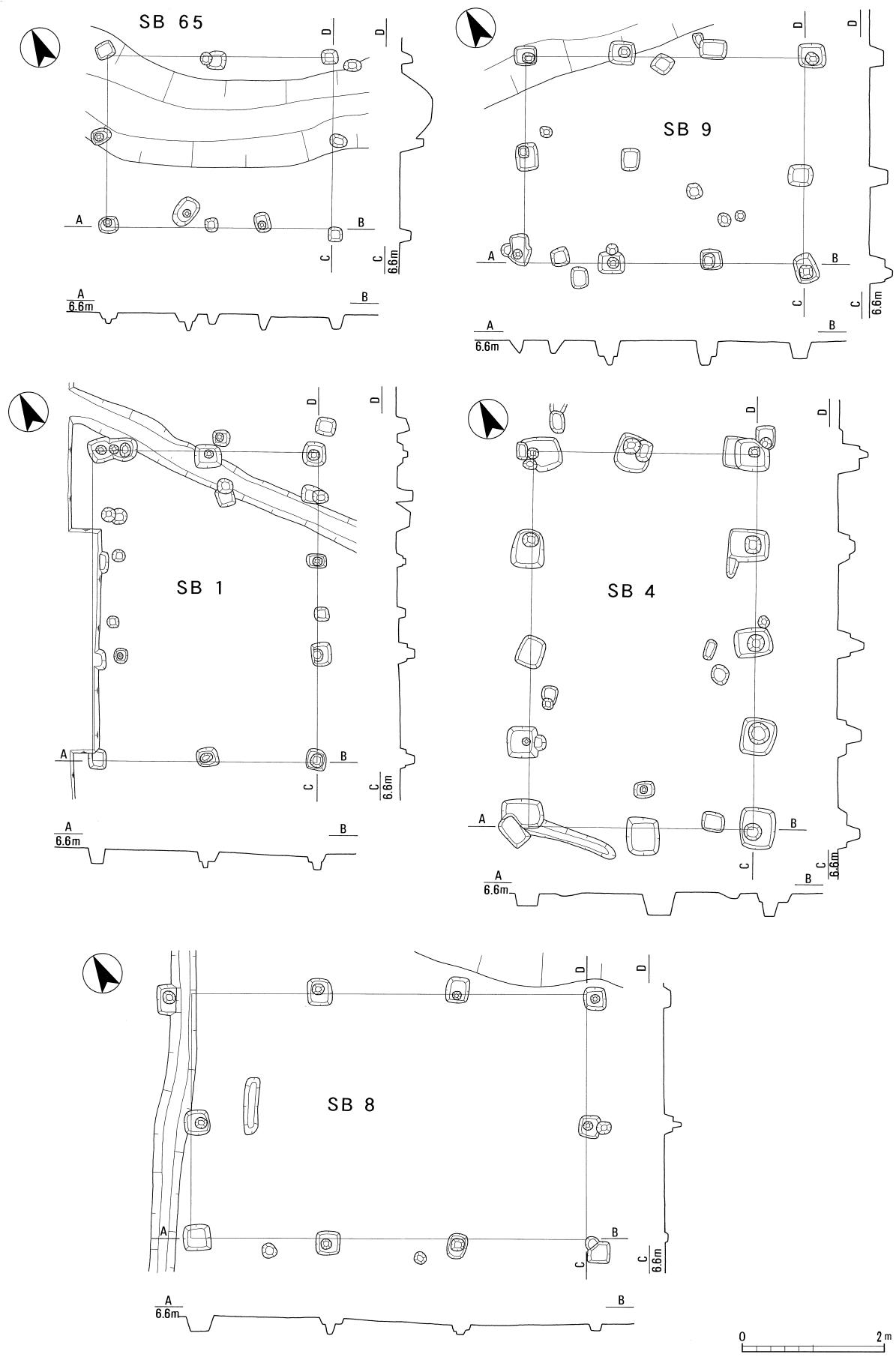
第13図 SK 59・60・63・72実測図(1:100)



第14図 SB 73・74・5・75・7・76実測図(1:100)



第15図 SB3・2・6, SA71実測図(1:100)



第16図 SB65・9・1・4・8実測図(1:100)

## IV 遺 物

今回の調査で出土した遺物の総数はコンテナバットで92箱である。土器は大半が弥生時代中期頃の壺を中心とし、律令時代の土師器等も土坑から出土している。また、弥生時代の石鏸や削器も遺構から土器とともに出土している。さらに、包含層からの遺物にも特殊なものがあるので列記した。

他に焼失住居と仮定したSH64からは炭化物が多量に確認され、使用されたとみられる建材の自然化学分析も実施し、VI章に掲載した。

### 弥生時代の遺物

当代の土坑10基のうち3基からの出土遺物を特徴をふまえ器種別に記述する。

#### S K41出土遺物

壺 (1)は、頸部からややハ字形に開き、口縁はやや内傾気味に成形されている。外面には、この時期に特徴的な櫛描直線文が施されている。(2)は底部の残存である。

#### S K59出土遺物

壺 (3)の内面は劣化が激しく、調整痕が著しく不明瞭である。外面には櫛描直線文2条の上下に沈線を施し、さらに円形浮文を貼り付けたものを一単位の文様帶とするものが二段構成されている。文様帶の間にはヘラミガキが施されている。

甕 (4)は当遺跡では、最も出土量が多いタイプの甕である。口縁部の形状は外反するものである。外面には全体にタテ方向のハケ目が施され、口縁端部外面にはキザミが認められる。口縁部内面には、横方向のハケメが施されている。(3)と同時期に類するものと考えられる。

#### S K60出土遺物

壺 (5)は底部の残存品である。底部内面には指頭痕が認められる。(6)は風化が著しく調整も内外面ともに不明瞭である。(7)は(9)と同様に、体部最大径がくの字形に大きく張出すタイプの壺であろう。内面には、体下半部にハケメの後ナデが施され、上半部のみハケメが残る。最大径を過ぎた後、ハケメ調整後のヨコナデにより、器面を滑らかに仕上げている。(9)の頸部はタテハケ調整後二枚貝腹縁によ

る直線文が施されている。内面は口唇部のみにヨコハケ調整が施されている。

甕 (8)の口縁のキザミ、体部のタテハケメは、既述の(4)に比較すると、強く深めに施されている。内面には口縁下に強いヨコハケ後のナデが施されている。

#### S K61出土遺物

壺 (10)の外面には口縁下の頸部にやや幅の広い単位で、既述の(9)と同様の二枚貝腹縁による直線文が施されている。内面は横線文を施した後に縦方向の指頭によるナデが施されている。全体的に丁寧に壁面を整えている。(14)は風化が激しい。外面でわずかに斜めハケメが確認できる。

(15～16)両者ともに内外面は風化が激しい。頸部から上の部位が欠落しているが、細頸壺と考えられる。

(15)の調整痕は確認しづらいが、各所でナナメハケを確認できる。頸部より上の部位は欠損して確認できないが、胴部最大径で33cmを計る大型品である。(16)はそれ以上の遺物になろう。

甕 (11～13)のうち11・12)は、同一個体と考えられる。(13)の外面にはタテハケ調整が施されている。口縁は外方向に引き出され、端部は垂下する。外面にキザミが施される。内面は口縁～頸部までに緻密なヨコハケメが施され、それ以下はヨコナデである。

#### S K63出土遺物

甕 (17～18)は大型品であろう。(17)は体下半部、底部のみ残存した。(8)と同様の器形になると考えられる大型品である。外面はタテハケメ調整が施され、内面は指オサエで調整されている。また(18)の胎土は非常に粗い。底部外面の胎土は全体的に粗い。

甕 (19)は無頸壺である。口縁直下から外面には3条の貝殻直線文が引かれ、その上から半円弧の文様が施されている。口縁直下の外面には4方向に直径2ミリの穴が2組づつ穿たれている。(21～23)の底部内面にはどれも指頭圧痕が認められた。(20)は口縁端部に2箇所づつ指ナデによるオサエがほどこされている。

甕 (24)は口縁は内から外方向にひきのばされて端

部は湾曲する。上部に山形の浮文が密着している。(25・26)の内面はヨコ方向のハケメが施されていた。(29)は比較的長めの頸部は径が16cmと大型品である。口縁直下の外面にタテハケ調整後の直線文が残る。また外面肩部には刺突文が二段に丁寧に施されている。

#### S D 49 下層出土遺物

壺 (30)は直径が17.4cmの広口壺である。比較的急に立ち上げられた胴部は頸部でラッパ状に広がり、口縁端部ではやや外下方に引き出され丸みを帯びる。調整は頸部で櫛描直線文、さらに肩から胴部にかけてはヨコハケ調整後の二帶構成の直線文が施されている。さらに帶の上下にはヘラ描沈線文が施され、直線文の後には括弧文も刻まれている。第Ⅲ様式期の範疇であろう。(31)も同期の細頸壺である。頸部と胴部の接点が不明瞭ながら(32)と同一個体である。径7.5cmを測り、口縁部は紐状の浮文が2対、4方向に貼付られている。残存する胴上半部の外面には、直線文の後、斜格子文が施されている。

(32)はタテハケメ調整の後、櫛描直線文が施されている。外面の肩にのみ櫛描直線文(33・35・36)が施されている。壺又は甕の底部であるが摩滅が激しく、調整が不明瞭である。(37)の口縁外面にはヨコハケ後に二枚貝複縁によるキザミを施している。また工具による外方からの押圧痕が認められる。

(48)は胴中央部で「くの字型」に屈曲する。最大径は20.6cmを計る。(30)と同様に櫛描直線文帶の上下にヘラ描沈線文が施されている。屈曲部には二枚貝複縁によるキザミが斜方向に等間隔に施されている。

甕 (34)は口径が15.6cmである。外面は底部を除いて、斜方向のハケメを施し、口縁は斜め上外方に反り、端部には4か所に摘み上げによる圧痕が認められた。

(35)・(36)はおそらく同器種の残存する底部である。

(39)は(34)と並行する遺物であろう。残存状況は悪い。外面には斜めハケメ、口縁部内面にはヨコハケメが施されている。

(40)は既述の(4・8・34)のタテハケ調整主体のもとの比較すると、口縁及び頸部外面にヨコハケ調整を施しているのが認められる。内面はハケ調整後若干のヨコナデで仕上げているとみられる。(41)は体部から緩く外方に開き、厚みを帯びる。端部はへの字に下方に折り返されて丸みを帯びる。四方向に指

オサエが入る。工具による刺突痕がわずかに認められる。(42)は口径25.6cm、器高30.7cmを測る。外面はタテハケ主体の遺物であるが体下半部にまでは及んでいない。口縁は刺突が丁寧に施されている。次の(43)の口縁も端部の上、下2方向からの刺突が加えられている。ヨコナデでタテハケが認められない。頸部に強めの櫛描直線文が1帶残存している。口縁内面は短い単位で波状文が施されている。

鉢 (44・45)は体部が上方に開き、口縁端部の外面にキザミが施されている。基本的には既述の甕の系統で、同時期のものであろう。若干(45)が内面にヨコハケ調整が施されているので古いタイプの遺物である。スヌが若干付着している。

#### S D 49 上層出土遺物

壺 (49～52)は細頸壺に属し、口縁が受口状を成すものである。(49)の外面は斜めハケで調整されていて、その後頸部外面には櫛描直線文が施されている。口縁部外面には工具による波状文、口唇でも刺突文が認められる。(50)も外面はタテハケメで調整された後、頸部に櫛描直線文が施されている。(51・52)ともに口径が8.5cm内外の遺物である。どちらも風化が著しく、ハケ調整の残存が良好でない。(52)は外面に櫛描直線文を施している。内面の屈曲にはヨコナデが入る。(54)は太頸壺で、口径は20.6cmの大型品である。ナナメハケで口縁から胴部まで仕上げられているが、頸部に二条の竹管による横線文が施されているのが特徴的である。(59)の底端部からの立ち上がり角度は急で、八の字に開く。外面調整はタテハケ主体である。一方、内面調整は横方向の施されている。(60)の外面は先行して斜方向の擬似縄文が体部中央まで描かれた後、ヘラ状工具による沈線文を6条横行させている。これらの組み合わせにより直線文帶が4つ構成されている。体下半部はヘラによるやや粗いミガキが施されている。(62)は(59)の外面形状と比較しても屈曲が強く、立ち上がりの傾斜も同様である。

甕 (55)は別地点から出土したが、一個体の遺物である。頸部から口縁へ向って急激に外反し、端部外面には強めのキザミが巡らされている。(58・61・63)についても(65)と同様、同時期の遺物であると考えられる。

### S K 70出土遺物

(64)は広口壺である。口径は14.4cmを測る大型品である。調査区内では最大の出土遺物である。外面の特徴は、頸部と体部にそれぞれ櫛描直線文が4条ずつ施され、なおかつ帶上には二枚貝を途中で止めた痕跡が認められた。体下半部には、ヘラミガキが密に施されている。

### S K 72出土遺物

(65・66)はSK70と比較すると若干古い様相を呈している遺物である。(65)は体部外面には先行する斜めハケメとそれに後行する波状文が特徴的である。口縁は頸部から八の字状に開き、端部の四箇所を舌状に引き出して仕上げている。外面は横方向に櫛描直線文が施され、その上から縦方向の沈線文を刻んでいる。さらに(66)は体部には斜めハケメは認められる。

### S D 78出土遺物

甕 (67)は遺物が少量であり、底部のトレンチで唯一残存が良好な部品である。口径が27.6cmの大型品である。口唇部外面には爪状圧痕が施されている。体部外面はタテハケメが施されている。一方内面では、口縁部で斜め方向のハケが先行し、頸部以下でヨコハケが後行するのが観察できた。

### S D 79出土遺物

壺 (68)はラッパ状に口唇が開くタイプの品である。頸部は垂直に立ち上げられ、やや外反し、端部でやや下方気味に外方向へ引き出されている。頸部の櫛描直線文は非常に丁寧に施されている。

甕 (69)の外面は、先行する体部最大径までのタテハケメが認められ、波状文が3帯、均等に施されている。底部には、ほぼ真中に孔が穿たれている。焼成後に入れられたとみられる。(70)の外面は、タテハケ後に斜めハケを施している。口縁が肥厚し、端部は横方向に引き出され、丸みを帯びる。

### S K 50出土遺物

土師器杯 (71~73)は器高が3cm内外の杯である。(74・75)は偏平で口径も14cm前後である。(71~72)の調整では底部に指オサエが施されている。

### S D 51出土遺物

土師器甕(把手) (79)の摩滅が激しい。

土師器杯 (80)は底部から垂直気味に立ちあがり、口縁はやや外反気味に開き、端部は丸く納められて

いる。都城の編年分類では杯Aに該当する。

### S D 16出土遺物

山茶椀 (76)は藤澤編年のⅢ-4型式に該当する。<sup>②</sup>高台は貼り付け後ナデられて、端部はやや八の字形に開く。

### S D 18出土遺物

土師質土錘 (77)は残存状況は比較的良好で、中央部は膨らみをもつ。全長は5.6cmを測る。

### S D 39出土遺物

土師質土錘 (78)は上記の(77)と比べると、体部は直線的に仕上げられている。全長もやや短めの4.8cmを測る。

### S D 52出土遺物

山茶椀 (81)は(76)と比較するとやや薄手であり、高台先端部は安定している。

灰釉陶器 (82)は底部からの立ちあがりはやや丸みを帶びて屈曲し、立ちあがる。高台端部は内側ほど突銳である。

### S K 61・64・67・S D 49・51出土遺物(石器)

石鎌 (83)は平面形がひし形の石鎌で、右側縁部調整は粗く、茎部は細く、やや端部も小剥離を入れつつ、仕上げている。(84)は未成品である。五角形を呈するが、下端部は何らかによって折損している。

(86)は(83)と同様に微細な小剥離を加え仕上げている。抉りはなく、平基鎌に相当する。礫表も残されている。(88)は先端部が折損している。裏面の側縁部は節理のため二次剥離が乱れてやや大きな割れが生じている。(90)は右側縁部に調整が認められず、剥片に類するとも考えられるが一応石鎌とした。抉りが浅く、二次剥離も微細である。

楔形石器 (85)は、剥片か残核の素材とも見えるが一応楔形に含めた。上端部に加撃による剪断面が残る。(89)は両極が加撃により剥がれている。

削器 (87)は長さ5.6cmの大型品である。刃部は比較的大きな剥離が加えられており、裏面は自然礫面を留めている。(91)はやや大きく、裏面左側縁部の二次調整は最も小さく、斜方向から丁寧に小剥離を加えている。

剥片 (92・93)の上端部に二次剥離が加えられている。石材はサヌカイトである。表面の上端に二次調整痕が認められる。裏面は自然な礫表が残されてい

る。(94)の下端は有茎とも判別できそうだが右側の湾曲部に二次調整が認められないため、現段階では剥片に分類した。やはり、裏面の一部に自然礫面を残している。

石斧 (95)は長軸5.8cm×短軸4.3cm、石材は砂岩である。表・裏面ともに上端部の二次調整が細かく施されているのが特徴である

剥片 (96)はSK67から出土した。上端部に二次剥離が認められる。

石鎌 (97)は両側縁部の途中で外側へ屈曲するいわゆる五角形鎌である。周縁加工を施し、調整はほぼ均一である。裏面には一次剥離が残存している。

砥石 (98)はSK64から出土した。断面が台形状を呈する。上面に擦痕が残る。

敲石 (99~101)のうち(99)は二次使用の結果、側面に面取り痕が認められる。(100・101)はともに上面と側面に敲打痕が観察できる。(100)はSD49から、(101)<sup>③</sup>はSD51から出土した。

#### Pit 出土遺物

弥生土器甕 (102)の口縁部への立ち上がり角度は垂直に近く、緩く外反し、端部を丸く納めている。口唇には外方向からのキザミが施されている。外面には短い単位の斜方向のハケ調整が行われ、内面にはハケ調整後に軽く指才サエが行われている。

土師器甕 (103)の口縁は緩く外方に引き出され、端部は強いヨコナデによりやや幅広い面を有する。内・外面とも頸部以下にヨコハケ主体の調整が施される甕である。(104・105)とともに若干の時期差があるが、口縁端部は外方に引き出された後、ヨコナデにより上に摘み上げられた状態になっている。

製塙土器 (106)は口径が22.5cmのやや大きい品である。外面はヨコナデ後、さらに器面を整えるため、均一なヨコ方向の指才サエが施されている。

土師器皿 (107)の立ち上がり角はやや外広がりになり、口縁端部はやや尖り気味に引き出されている。やはり外面には指才サエが認められる。

灰釉陶器椀 (108)は内外面ともに底部まで均一な釉薬がかかっている。

#### SD 91出土遺物

土師器高杯 (109・110)は杯部、(111・112)は脚部である。脚部への接合部は若干張り出し、脚上部には

縦方向のハケメが施されている。(111)は接合部から脚下端部へは八の字状に直線的に広がる。

内面はシボリ痕が認められる。(112)は柱状部から脚部への屈曲は著しく、端部は丸められて垂下する。

小型丸底壺 (113~117)は口径が7.2cmまでの壺である。頸部以下の外面は基本的には面取りナデにより器面を整えている。そのうち(117)のみ、底部に斜方向のヘラケズリが施されている。

土師器壺 (118)は体部最大径が31.2cmの大型品である。欠落しているが、おそらく受口状の口縁部が接合する。頸部以下の内面には成形時の接合痕が明瞭に残されていた。

甕 (119~124)はいわゆる宇田甕から口縁端部が外方に引き出されるb段階までのものである。(121)は受口状の遺物である。外面の調整は頸部以下の斜行ハケメが主体である。

須恵器杯身 (125)は口径が11.6cmのやや小さい杯である。受部はやや斜め外方に摘み上げられて丸く納まる。端部はやや内傾気味に立ちあがる。上層から出土した。

山皿 (126)は流入品と見られるが、完存品である。胎土は密である。

#### SD 92出土遺物

甕 (127)は下層の粘質土から出土した。外面には不明瞭ながらタタキが確認できた。

土師器甕 (128)は検出面直上からの出土である。外形は肩部から体部にかけての膨らみが少なく、緩くなだらかに整形されている。口縁から体上部までの外面には、やや粗い櫛描文が施されている。

土師器高杯 (129)は脚部が欠損している。胎土は密で、丁寧に整形されている。口径は21.0cmのやや大型品である。古墳時代後期ごろの所産である。

山皿 (130)は(126)とは時期的にも降る遺物で、高台は糸切未調整の品である。藤澤氏編年にいう7型式期に相当する。検出面への流入品であるとみられる。

#### 包含層出土遺物

弥生土器甕 (131)は上・下部それぞれ別地点から出土したものであるが、胎土や調整から同一個体と判断した。体部最大径は肩部直下に求められ、38cm以上を測る。体下半部にやや粗く斜め方向の櫛描文が施されている。おそらく弥生時代中期の範疇である。

弥生土器甌 (132)はヨコ又は斜めハケメが主体の土器である。口縁は短く外反し、内面には、原体による波状文が丁寧に施されている。当調査区では特異な遺物である。底部には焼成前の穿孔が認められた。

弥生土器甌 (134・135・136)はそれぞれ口縁と底部の残片である。(133・134)は口径が14.8cmと24.2cmである。両方ともに口唇の外面にはキザミが施されている。弥生土器編年の中前期前葉頃に該当する。

弥生土器壺 (137)の頸部外面には、タテハケ調整後沈線文が施される。

弥生土器甌 (138)は(136)と同形の底部残片である。底部内面は分厚く撫でられている。

須恵器杯蓋 (139)は高杯の蓋である。天井から口縁への屈曲部にやや太めの沈線が施される。端部はクロナデされて、やや開き気味に丸く納められている。

須恵器高杯 (140)は脚部の残存部分である。偏平で頸部が太い遺物である。一方に穿孔が認められる。

須恵器甌 (141)の口径は37.7cmの大型品である。口縁は、外方に引き出されて後、端部はやや強めの面取りナデが施されて、垂直方向に出っ張る。おそらく都城編年のIV期頃と考えられる。<sup>④</sup>

砥石 (142)は重量が143gである。角礫の側面を一次加工してあり、表面に擦面が観察される。

(143)も同様な角礫である。表面は使用頻度が高く、擦面も深い。

敲石 (144)は円礫を一次加工の後使用している。上面端部に密な敲打痕が確認できる。

土師器甌 (145~147)のうち(145)は口縁はくの字型に立ち上がり、端部は上方に摘み上げられ、丸められている。内面の頸下にはヨコハケ調整が行われている。

土師器杯 (148)は直径が11.0cm、器高は2.9cmを計り、胎土は粗く、若干の風化が認められる。

須恵器杯 (149)は口縁がやや湾曲しながら立ち上がり、端部は内側から強めの押圧を受けて、面を有する。胎土は緊密である。

灰釉陶器皿 (150)は口径が12.3cmを計り、体中央まで灰釉が付掛けされている。

陶器甌 (155)は口径が17.8cmを計る。口縁部外面に稜線が入る。外方からの強い指オサエのために上端

部、下端部が外方向へ少し出っ張る。

須恵器碗 (157)は須恵器の碗で、高台は貼り付けられ、断面形状は四角く立ち、安定している。

綠釉陶器碗 (158~159)は両方碗であるが(159)の方が器厚が薄く、高台端部はやや内湾気味である。山茶碗 (160~165)は多少の時期差があり、特に(160)の底部からの立ち上がり角は急で丁寧に調整されている。(171~180)も同器種であるが、(175)には「ノ」の記号が、(176)には「入」の文字が認められる。

灰釉陶器 (167・169・170)の中で(167)の高台部は分厚く整形され、下面是広く安定する。また(169)は底部は丸みを帯び、高台部は回転ナデによって薄く調整され、立つ。

須恵器壺 (181)は底径が9.8cmである。

山皿 (182~185)は藤澤氏編年のIII-6~7段階の遺物である。(182)の底部に「ニ」の花押が認められる。陶器碗 (186~187)は瀬戸産の碗である。体部外面には釉薬が施されている。

灰釉陶器小壺 (188)は器高が5.4cmのミニチュア品である。瀬戸産であると考えられる。

土錘 (189~197)は残存長5cm未満の遺物である。そのうち(186)には上・下部外面に工具ナデが施されている。

土師器甌(把手) (198)は日用雑器のうちで大型品であるが、残存度が低い。建物群から出土した。

錢貨 (199~201)のうち(199)は景德元寶、(201)は元祐通寶と判別できる。(200)は判別しにくいが「皇宋通寶」とも判読できる。

須恵器 (202・203)はそれぞれ杯と壺である。壺の底径は11.3cmで、大型品であるとみられる。

陶器 (204~207)はA地区の包含層出土遺物である。

弥生土器 (208)は鉢で推定径は9.7cmである。精製土器で指オサエの痕が明瞭に残存している。

縄文土器 (209・210)は突帶文土器である。包含層遺物であるが、器面の摩滅は少ない遺物である。

土師質不明土器 (211)は土製のミニチュア品である。用途は不明であるが、仏具の可能性がある。

灰釉陶器碗 (212~213)は都城の土器編年でのIII期ころの遺物である。建物跡の上面から出土した。

土師器皿 (214・215)は伊藤氏編年の南伊勢系土師器の皿でIII-b段階期に相当する。<sup>⑤</sup>

陶器椀 (216～224)は山茶椀である。(216) (219)は底径が8cm程で大型品である。どちらもⅢ-6型式期に相当する遺物である。

陶器 (225)は渥美産の甕である。(226)は天目茶椀である。室町時代中期頃の所産である。(227)は鉢 (228)は佛飯具の椀である。外面に蓮華花弁の文様が刻まれている。

瓦質土器 (229)は落し蓋である。材質的には硬い瓦質で、丁寧に磨かれ光沢がある。上面に「水」「友」の文字が刻まれている。近代遺物の可能性もある。

磁器椀 (230)は瀬戸産である。

軒平瓦 (231)は平瓦で、瓦当の残存品である。

石器 A地区出土の石鎌である。(232・234)は五角形石鎌である。(233)は有茎鎌で、表裏面に一次剥離を留めている。(235)は楔形石器で、上下極部に打面が観察できる。(236～238)はどれもRFで、(236)の側縁には小剥離が施されている。

須恵器 (239)は蓋のツマミ部である。

弥生土器 (241)は壺底部である。木葉痕がわずかに

裏面に残る。

山茶椀 (242)は同編年のⅢ-6型式期に該当する。

土師器鍋 (243)は伊藤氏編年にいう南伊勢系土師器のb類に該当する。

捏鉢 (244・245)はともに鉢である。(244)は器厚が薄く、口縁は分厚くなり、やや外方へ引き出され、丸く納められている。

#### 註

①上村安生「1伊勢・伊賀地域」『弥生土器の様式と編年』

木耳社 2003年

②藤澤良祐「瀬戸古窯址群I」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』瀬戸市歴史民俗資料館 1982

③赤堀英三「石器研究の一方法」『人類学雑誌』第44巻3号 東京人類会 1929

④玉田芳英「平城京の土器」『古代の土器研究－律令的土器様式の西・東－』古代の土器研究会 1992

⑤伊藤裕偉「IV.調査の成果－出土した遺物」『多気遺跡群発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター 1993

※以降の同器種についても同編年に基づく。

## V 結 語

### 1 掘立柱建物について

今回検出したA地区の建物は、後の東拡張部分を含めて14棟である。これらのうちのほとんどが調査区中央部に配列されていた。既述のとおり棟方向は、ほぼ一定であり、N28°E又はN33°Eを示している。N28°Eの方位は過年度に調査済の蔵田遺跡・位田遺跡等においても検出されている条里方向とほぼ一致することになる。出土遺物やそのプランから試案ではあるが、いくつかの建物群を考えてみた。

まず、SB1・2・4・8・9・73・76・65の建物I群である。これらは棟方向が概ねN28°Eを示していて、一つのまとまりを構成し、東西棟はN62°Wを示している。SB65・1の他は存続時期がほぼ同時期であると考えられる。おそらく平安時代中葉ころまでの存続であろう。

次に、その埋没後に建てられたSB5・7が建物II群を構成する建物であると考えられる。これらの棟方向は、N30°Eを示しており、I群と比較すると若

干東に振る傾向にある。

又さらに、既述の建物とは若干東に振るSB3・6・74の建物III群の構成が想定されるわけである。これらの棟方向はN33°Eであり、これらは前期までの間存続していた。

これらのどの建物構造をとっても、非常に企画的な要素を持ち、ある一定の組織のなかで設営されたプランであると考えられる。

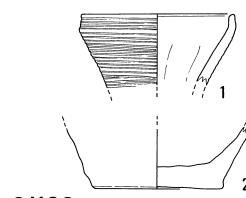
### 2 焼失住居SH64について

A地区的北側で確認したSH64は、近年の調査で非常に注目すべき建物である。

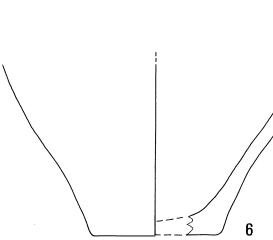
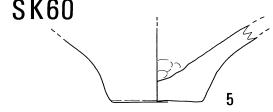
まず、包含層を除去していくと、炭化材を含む褐色土が多量に散乱していた。その中に焼土等を含む土層も現れ、硬く締まった床面が検出された。また、さらに周壁から内側へ7～80cmの箇所には柱穴又は垂木穴が認められ、円形に7箇所に認められたことである。これらの断面は掘形は垂直か、または若干上部が内側に傾く程度の構造である。中央部には焼土

A地区

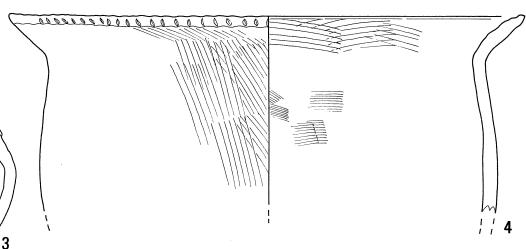
SK41



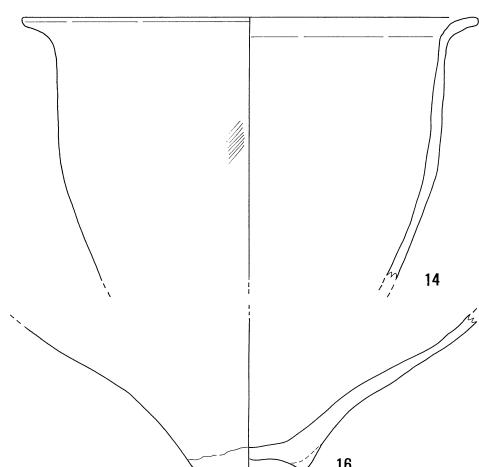
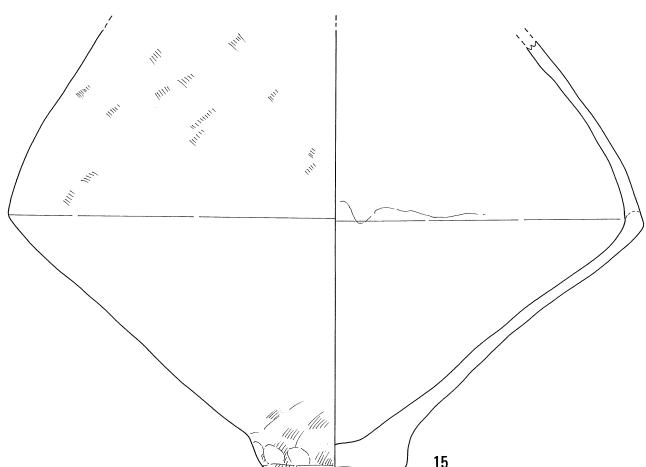
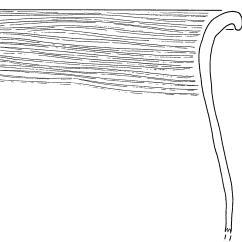
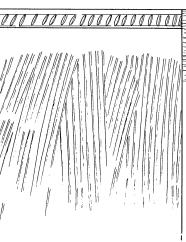
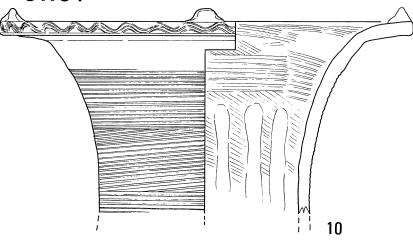
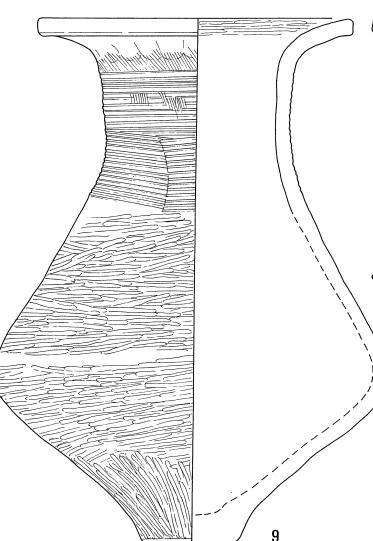
SK60



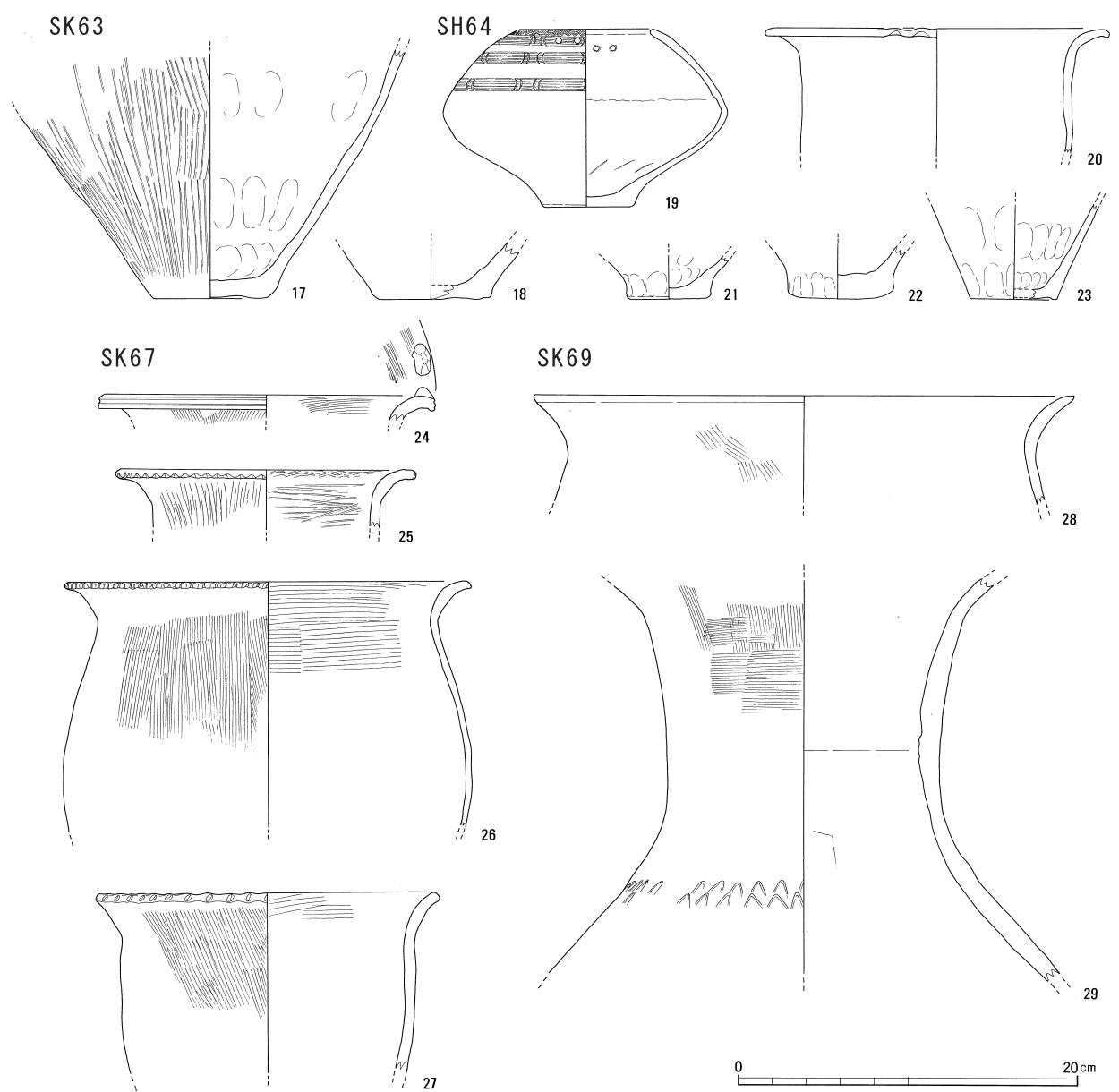
SK59



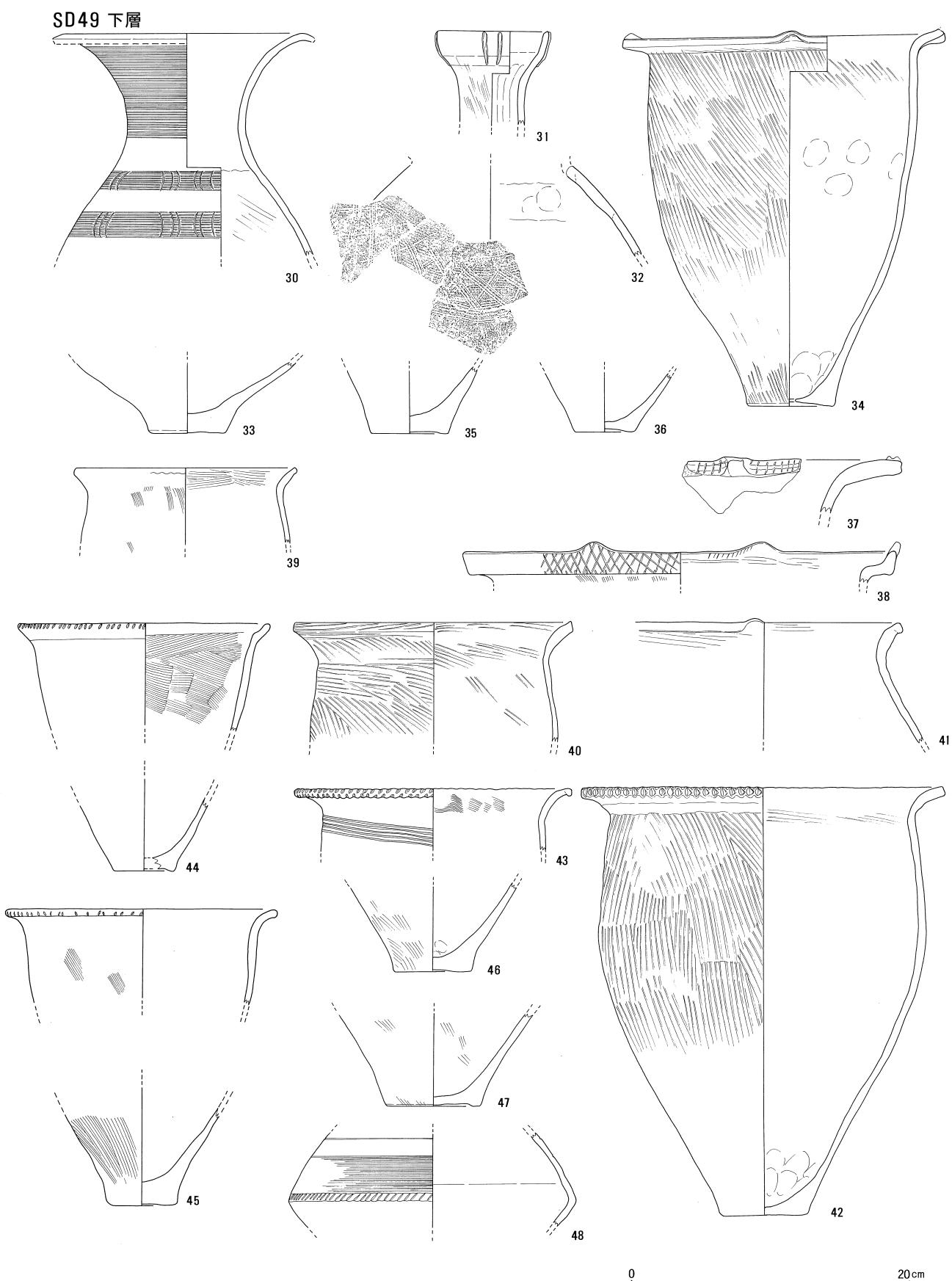
SK61



第17図 出土遺物実測図(1) (1:4)

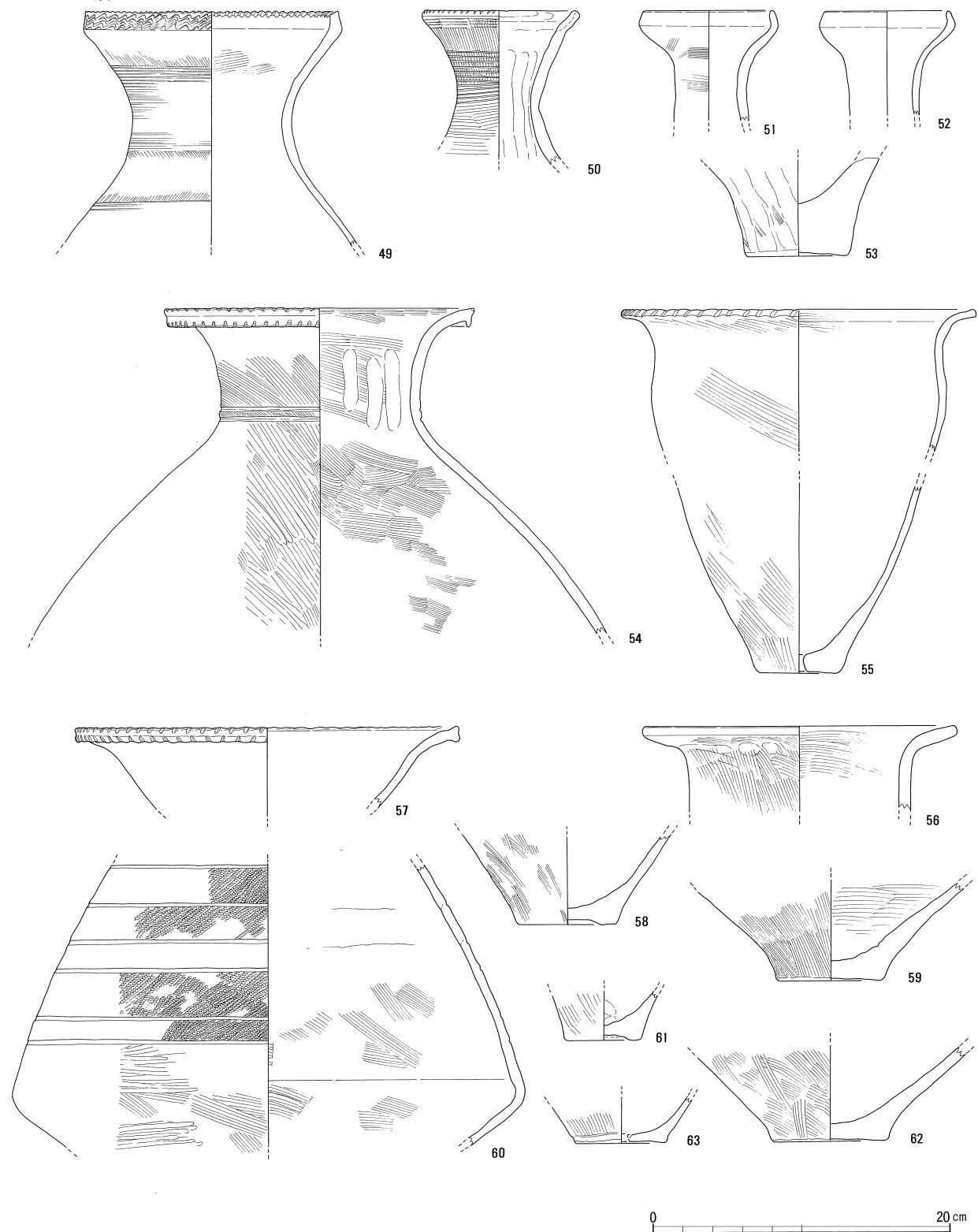


第18図 出土遺物実測図(2) (1:4)



第19図 出土遺物実測図(3) (1:4)

SD49 上層



第20図 出土遺物実測図(4) (1:4)

こそ少量ではあったが地焼炉も確認できた。また特筆すべきは、円周南端の一部が方形に突出する柄鏡状のプランである。これはおそらく構造的にも家屋入口と考えられるものである。類例的には安濃町の平田古墳群に若干規模の小さい豊穴がある。<sup>④</sup>

焼土の分布状況と入口の検出等を総合的に考えると、やはり当遺構は、焼失家屋と考えていいのではないか。しかも焼失家屋があまり期間を経ずに埋没したものと考えられ、残存状態が良好な事例であるといえる。

今回の調査で確認できたこの豊穴住居が、消失し、倒壊直後の屋内の状況であるとすると、今後の調査事例の増加を期して止まない。

### 3 溝について

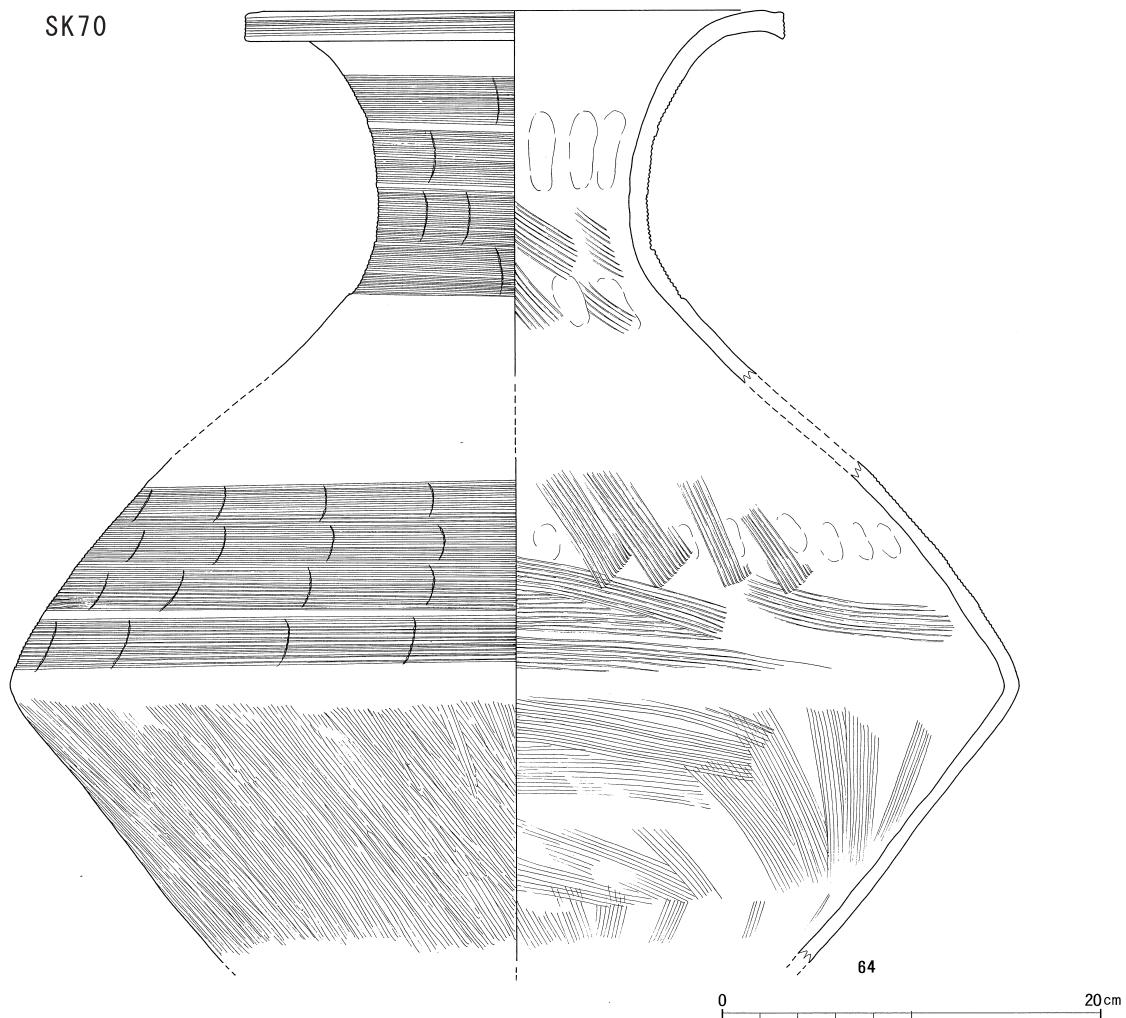
A地区で確認できた溝群は、それぞれから出土した遺物は少量で、詳細時期は断定できなかったが、概

ね後に示す図のようなまとまりあるいは、方向性が考えられる。以下時期別に整理した。

まず、調査区北側とそこから南へ降りたSD79とSD49については各所での蛇行はあるが概ね東に流出した遺構群であると考えられる。また、SD58とSD48とSD36はともに79等と比較すると若干東へ振るが、奈良末期に機能した溝であると考えられる。さらに南側で建物に沿うかたちのSD56・52・51、そしてSD16・14・12・11は平安時代初めまでに機能していた遺構であるとみられる。

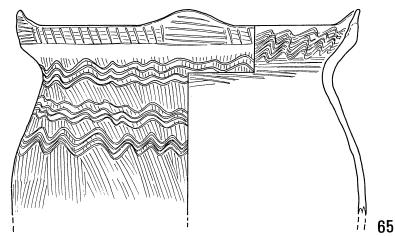
### 4 弥生土器について

遺構出土の弥生土器にはいくつかの特徴的な調整がみられた。概ね近畿の弥生土器Ⅲ様式に該当する遺物がほとんどである。その調整方法は(19・30)にもみられたように、櫛描直線文を横方向に施した上、その単位間に後から括弧文を施す製法である。しか

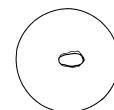
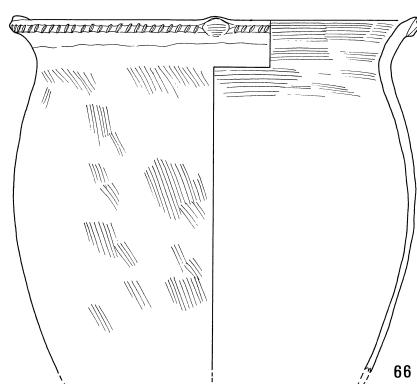
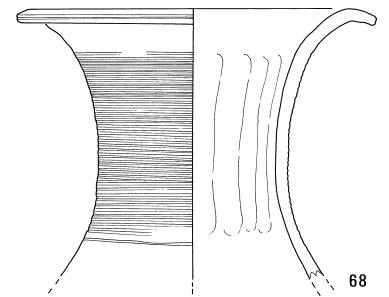


第21図 出土遺物実測図(5) (1:4)

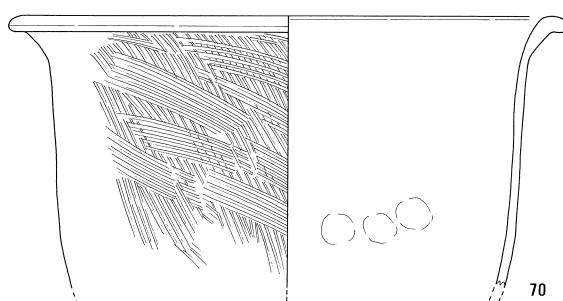
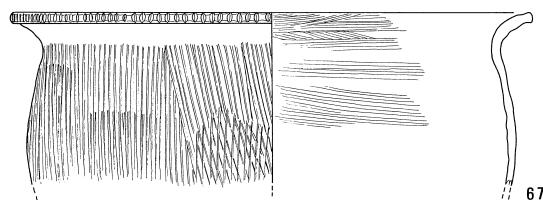
SK72



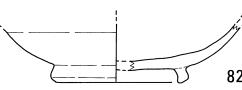
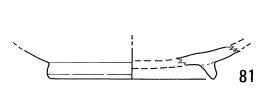
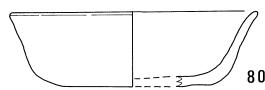
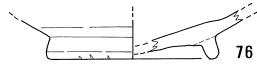
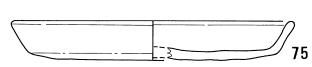
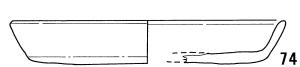
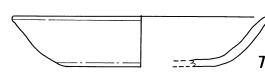
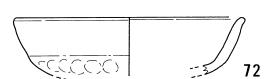
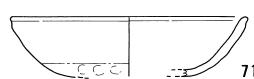
SD79



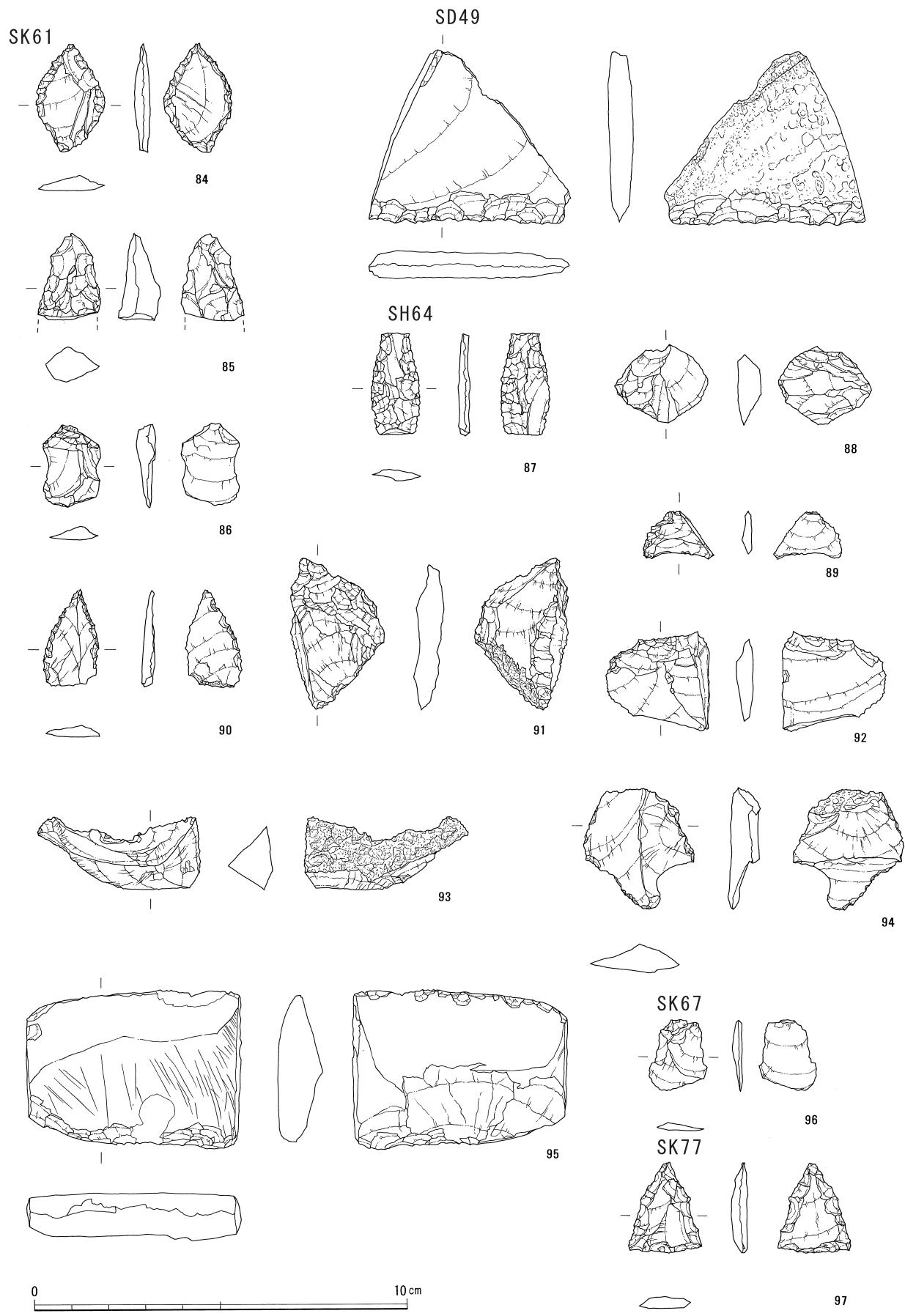
SD78



SK50 · SD16 · 18 · 39 · 51 · 52



第22図 出土遺物実測図(6) (1:4)

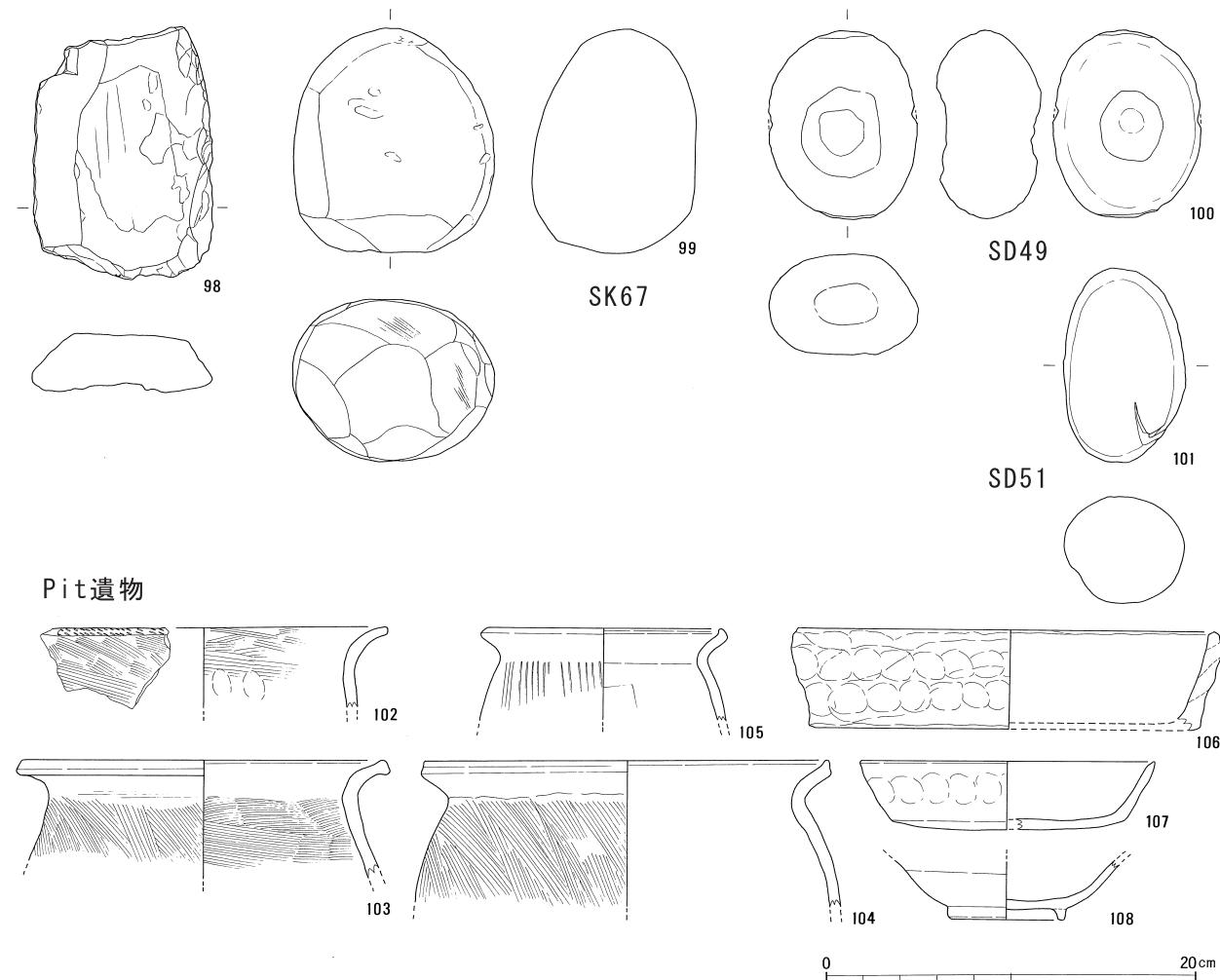


第23図 出土遺物実測図(7) (3:2)

しながらこれらの他に、若干古い様相を示している  
と考えられる遺物にSK60・61出土の甕がある。<sup>⑤</sup>

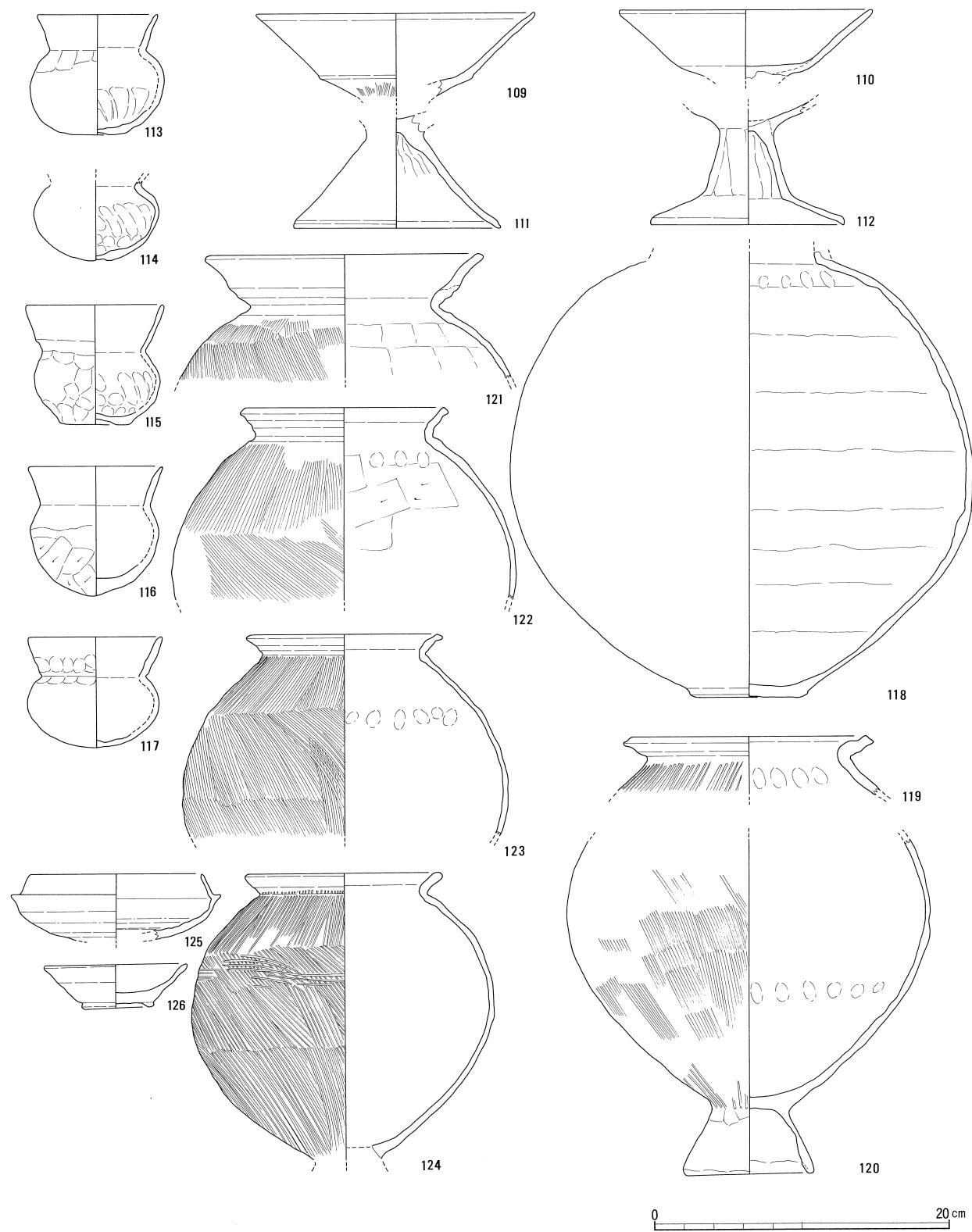
#### 註

- ①米山浩之・宮田勝功『一般国道23号中勢道路建設事業に伴う  
蔵田遺跡発掘調査報告』(三重県埋蔵文化財センター 1999.10)
- ②中村光司『位田遺跡(第2次)発掘調査報告』(津市教育委員  
会 2001.3)
- ③水谷豊『惣作遺跡発掘調査報告』(三重県埋蔵文化財センター  
2002.3)
- ④竹内英昭他『平田古墳群』(安濃町遺跡調査会 1987.3)
- ⑤上村安生「1伊勢・伊賀地域」『弥生土器の様式と編年』木耳  
社 2003.3



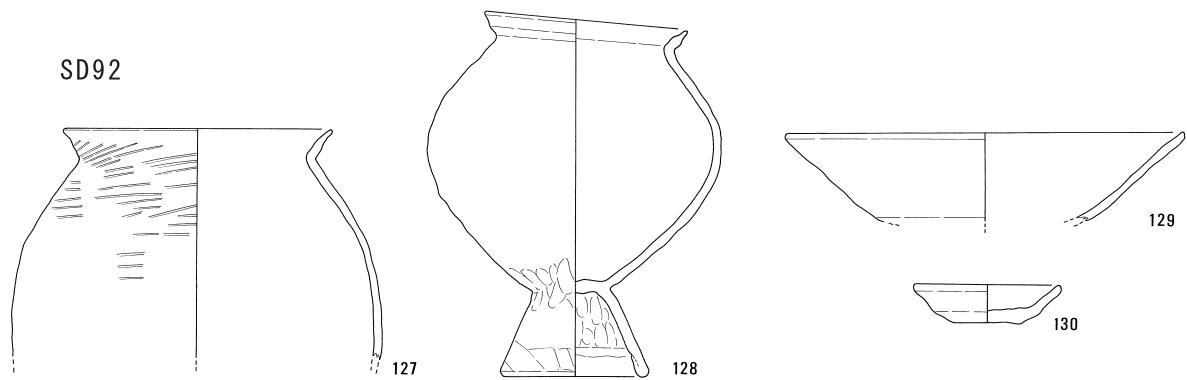
第24図 出土遺物実測図(8) (1:4)

C 地区  
SD91

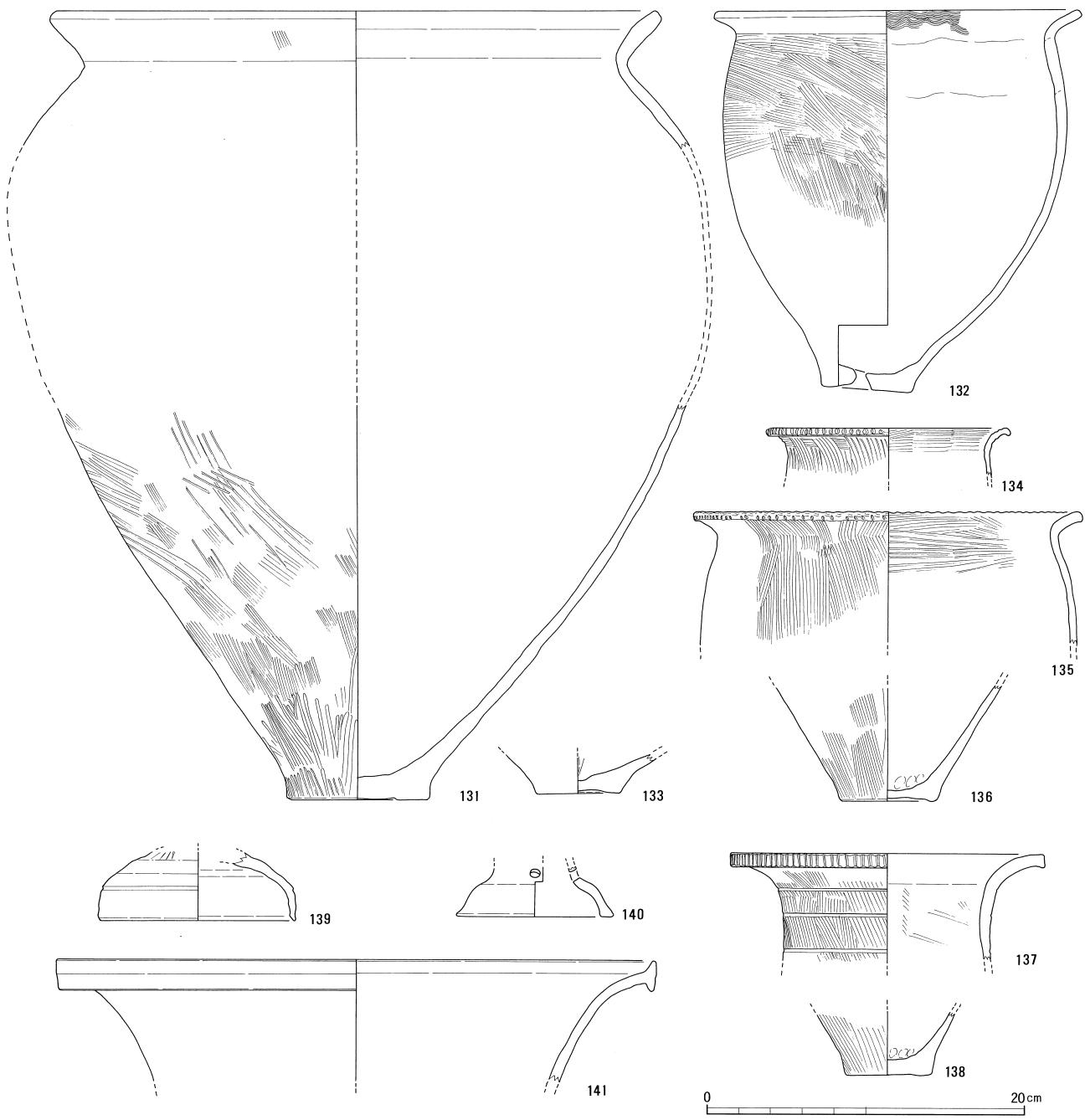


第25図 出土遺物実測図(9) (1:4)

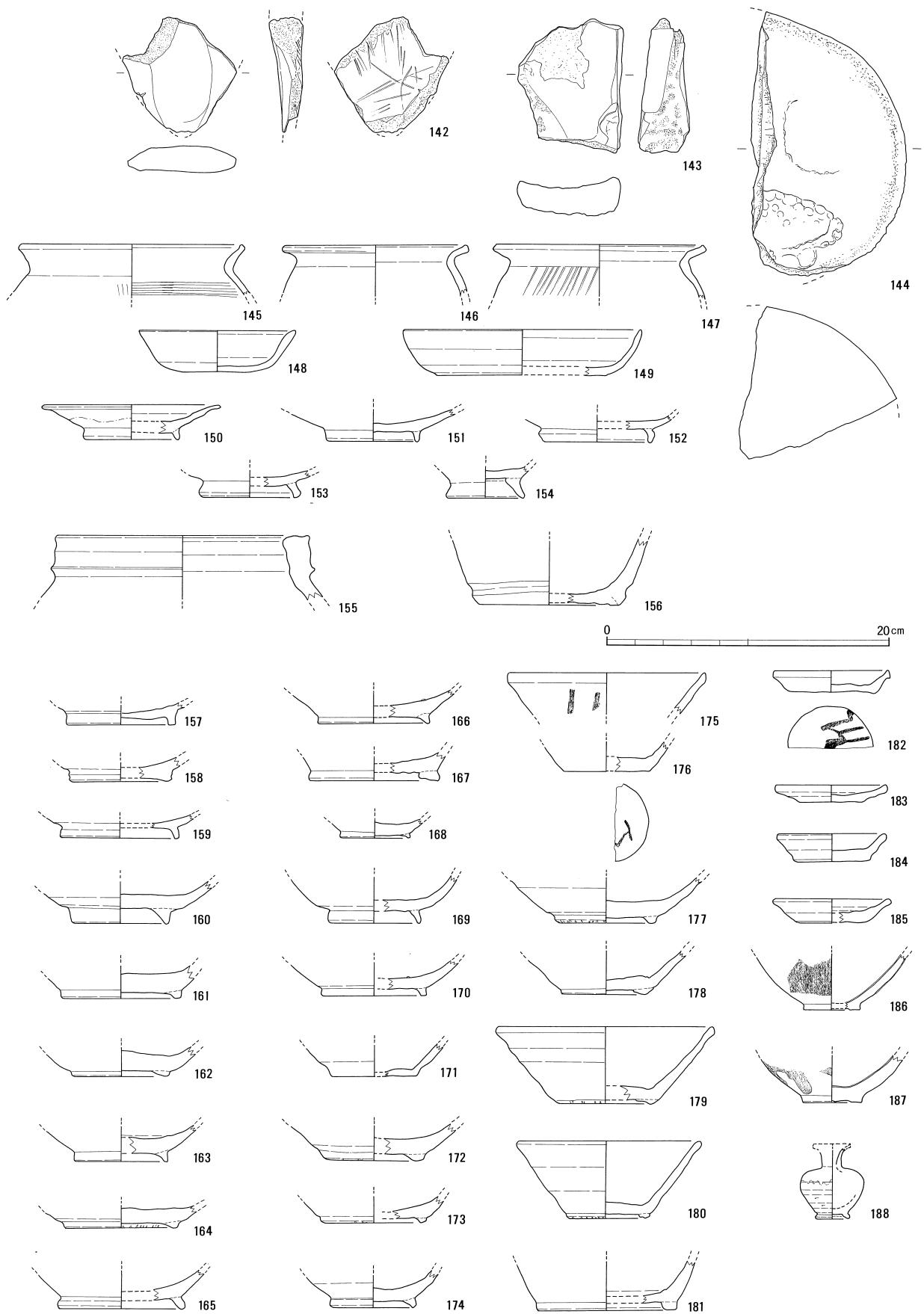
SD92



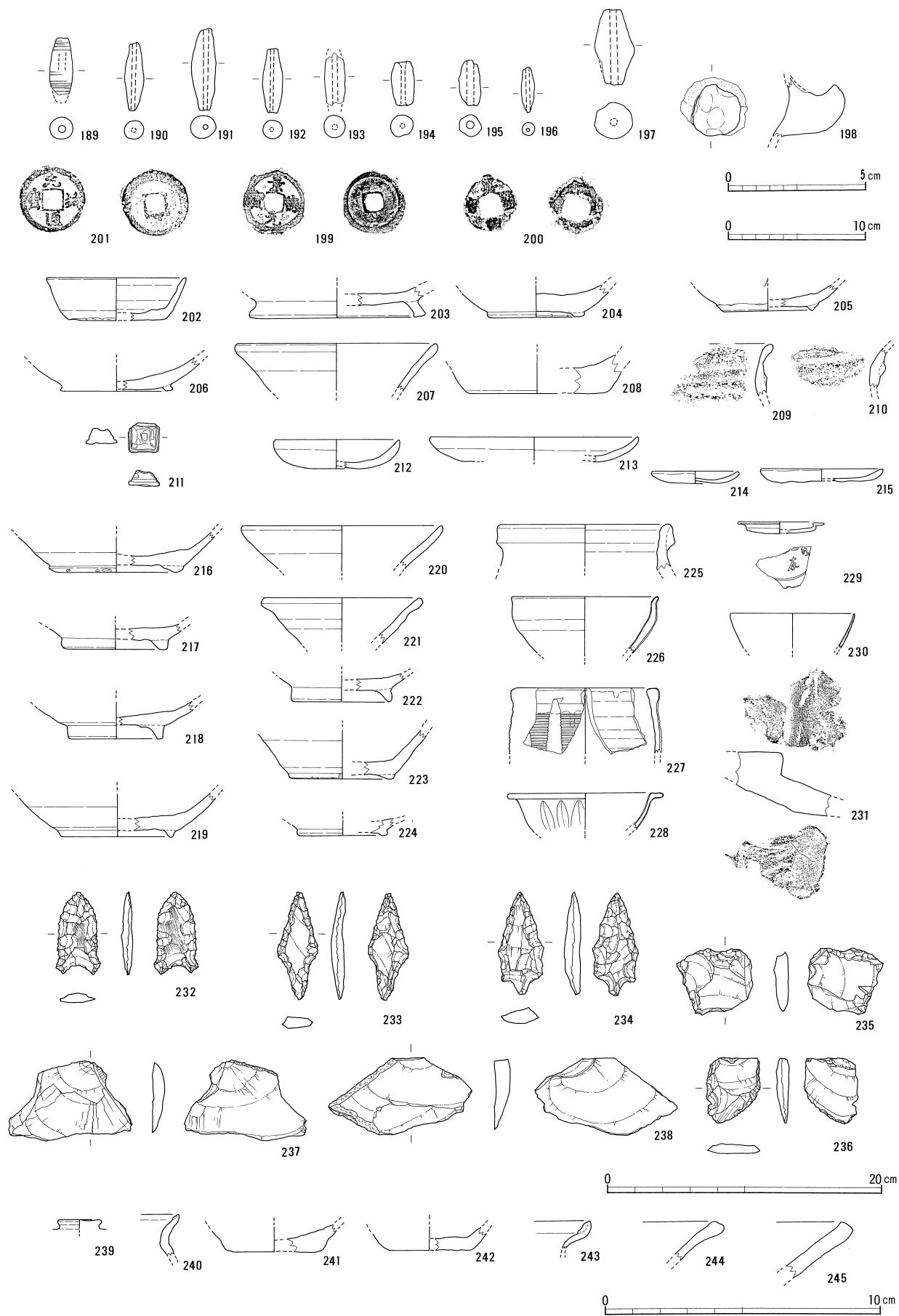
包含層



第26図 出土遺物実測図(10) (1:4)



第27図 出土遺物実測図(11) (1:4)



第28図 出土遺物実測図(12) (1:4、古銭・石器については1:2)

## S B

遺構番号	検出時	規模				棟方向	柱間寸法		時期	備考
		間数	桁行(m)	梁行(m)	面積(m <sup>2</sup> )		桁行(m)	梁行(m)		
SB 1	同	3 × 2	5.3	3.8	20.14	N28°E南北棟	1.8	2.0	奈良後期	掘形方形
SB 2	同	3 × 2	5.2	4.0	20.8	N63°W東西棟	1.7	2.0	平安初	掘形方形
SB 3	同	3 × 2	5.1	4.1	20.91	N33°E南北棟	1.8	2.1	平安初	掘形方形
SB 4	同	4 × 2	6.5	4.2	27.3	N28°E南北棟	1.7	2.1	平安初	大型掘立
SB 5	同	3 × 2	6.4	4.5	28.8	N28°E南北棟	2.2	0.9	平安初	掘形方形
SB 6	同	3 × 2	6.7	4.2	28.14	N62°W東西棟	2.4	2.1	平安初	掘形方形
SB 7	同	4 × 2	8.4	4.3	36.12	N28°E南北棟	2.3	2.1	平安初	掘形方形
SB 8	同	3 × 2	7.0	4.4	30.8	N61°W東西棟	2.6	2.2	平安初	掘形方形
SB 9	同	3 × 2	5.0	3.6	18	N62°W東西棟	1.7	1.8	平安初	掘形方形
SB65	同	2 × 2	4.1	3.1	12.71	N63°W東西棟	2.1	1.7	奈良後期	掘形方形
SB73	同	2 × (1)	4.4	2.2	9.68	N62°W東西棟	2.1	2.4	平安初	掘形方形
SB74	同	2 × (1)	4.2	2.3	9.66	N60°W東西棟	2.4	2.1	平安初	掘形方形
SB75	同	4 × (1)	4.1	3.2	13.12	N28°E南北棟	2.4	2.2	平安初	掘形方形
SB76	同	2 × 4	4.1	3.2	13.12	N30°E南北棟	2.3	1.5	平安初	掘形方形

## S A

遺構番号	検出時	間数	方向	柱間寸法(m)	時期	備考
SA71	同	2	N28° E 東西棟	1.8	平安？	

## S H

遺構番号	検出時	柱穴	方向	面積(m <sup>2</sup> )	時期	備考
SH64	SK64	7	南東入口	91.56	弥生時代中期	炭化材・無頸壺

## S K

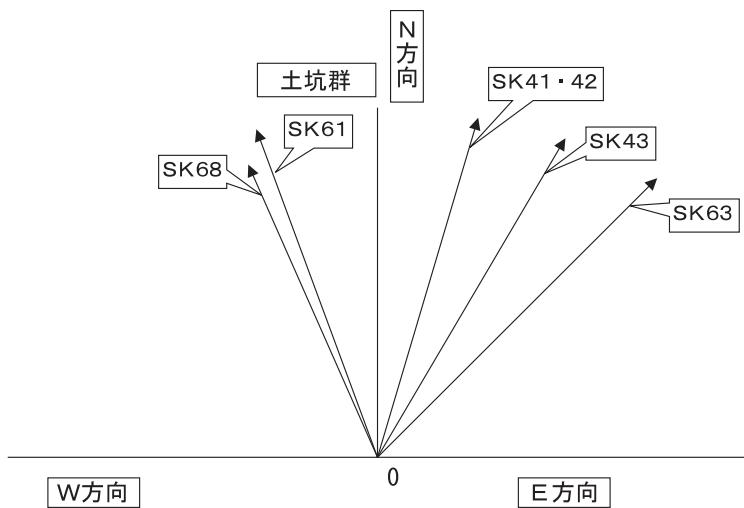
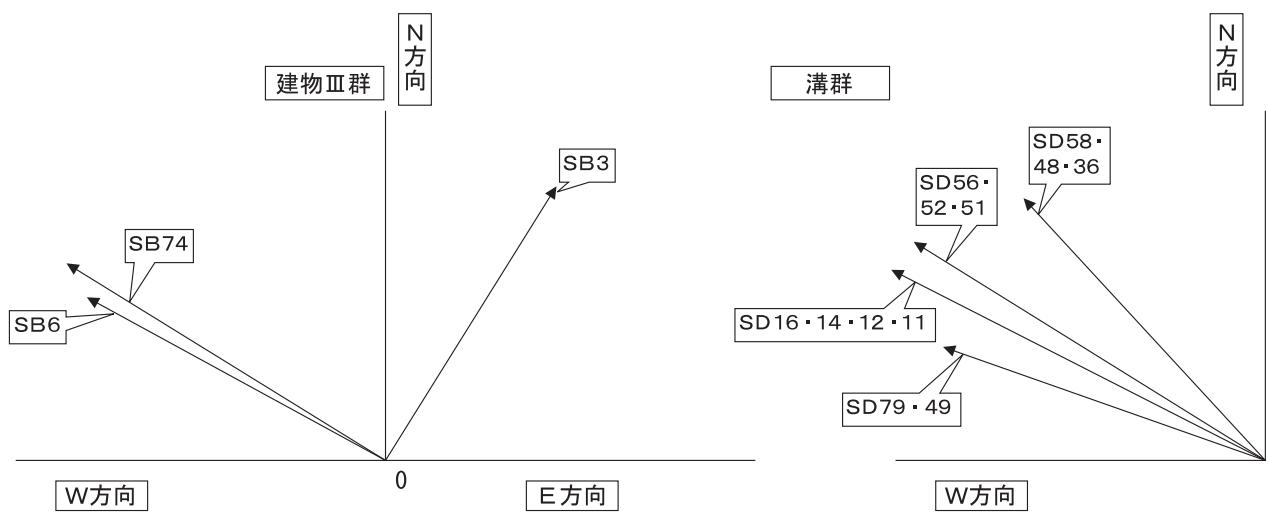
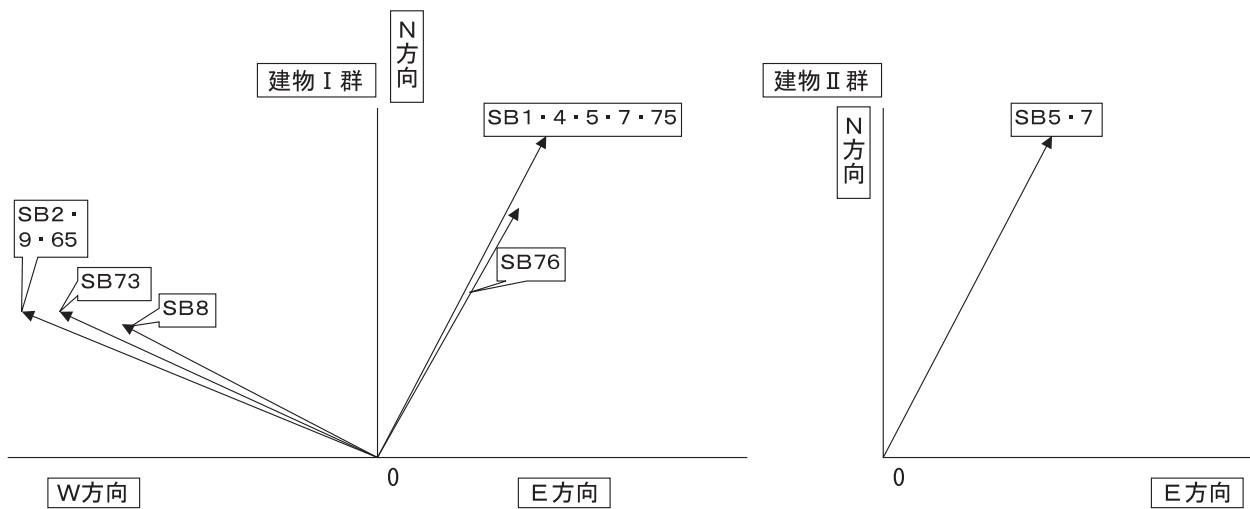
遺構番号	検出時	出土位置	縦(m)	横(m)	深さ(m)	時期	形状等	備考
SK13	同	J20	1.0	0.5	0.1	奈良～平安？	長楕円	土師器
SK17	同	I18	1.7	1.4	0.1	奈良～平安？	不整楕円	土師器
SK27	同	O16～17	1.9	1.0	0.25	平安～鎌倉	不定形	土師器
SK30	同	N・O15～16	3.7	3.6	0.2	奈良～平安？	不定形	
SK41	同	O10	0.5	0.4	0.1	弥生中期	隅丸長方形	壺・甕
SK42	同	O10	1.4	0.7	0.4	弥生時代	長楕円	
SK43	同	N13～15	5.5	1.4	0.4	弥生？	長細楕円	
SK45	同	O10	1.5	0.7	0.2	弥生？	不整楕円	
SK50	同	L・M 7	3.0	5.0	0.3	奈良後期	長方形	土師器杯
SK54	同	Q 9	0.8	0.3	0.15	古代	隅丸長方形	
SK59	同	N・O 3	1.2	1.2	0.2	弥生	円形	廐棄土坑・壺・甕
SK60	同	N 1	1.2	0.8	0.2	弥生中期	隅丸長方形	壺・甕
SK61	同	P・Q 1～2	6.2	1.2	0.35	弥生中期	長楕円	広口壺・甕・石鎌
SK63	同	O 3～4	1.3	0.8	0.1	弥生中期	長楕円	壺・甕
SK68	同	N・O 1	2.6	0.9	0.2	弥生中期	長細	
SK69	同	Q 1	1.1	0.5	0.2	弥生中期	不整形楕円	甕
SK70	同	N10・11	2.4	1.1	0.15	弥生中期末	隅丸長方形	広口壺
SK72	同	M 2	1.3	0.8	0.35	弥生中期	長楕円	甕
SK81	B・SK 2	N22・23	2.0	0.6	0.5	平安？	——	

第1表 遺構一覧表 1

## SD

遺構番号	検出時	出土位置	幅(m)	深さ(m)	方向	時期	形状等	備考	
SD10	同	L～P4～5	1.5	0.3	東西	平安初	U字状		
SD11	同	I～K22～23	1.7	0.1	東西	平安～	鉢状		
SD12	同	I～L22	0.8	0.25	東西	平安～	擂鉢状		B・SD84と同
SD14	同	I～O18～19	0.6	0.25	東西	平安～	U字状		
SD15	同	O18	0.4	0.1	南北	平安～	U字状		
SD16	同	I～P17	0.5	0.1	東西	平安～	U字状	灰釉椀	
SD18	同	I～M18	0.4	0.2	東西	平安～	U字状	土錐	
SD19	同	N17～18	0.4	0.05	南北	平安～	U字状		
SD20	同	K17～19	0.3	0.1	南北	平安～	U字状		
SD21	同	MN19	0.8	0.1	南北	平安～	擂鉢状		
SD22	同	M16～18	0.4	0.1	南北	平安～	U字状		
SD23	同	N17～18	0.6	0.1	南北	平安～	擂鉢状		
SD24	同	NO18～19	1.1	0.2	南北	古墳時代	擂鉢状		周溝か
SD25	同	L～N16	0.4	0.07	東西	平安～	U字状		
SD26	同	L～M15	0.4	0.05	東西	平安～	U字状		
SD28	同	K～O14～16	0.6	0.1	東西	平安～	U字状		
SD29	同	L～O14～15	0.6	0.08	東西	平安～	U字状		
SD31	同	K13～14	0.3	0.1	南北	鎌倉～	U字状	山茶碗・土師器	
SD32	同	L13～14	0.3	0.1	南北	平安～鎌倉	U字状	山茶碗・土師器	
SD33	同	K13～M14	1.3	0.4	東西	鎌倉～	逆台形	山皿・土師器	
SD34	同	k12～13	0.3	0.07	南北	古代	逆台形	土師器片	
SD35	同	L12～M13	0.7	0.3	東西	古代	逆台形	土師器片	
SD36	同	J12～Q15	0.4	0.3	南北	古代	U字状	土師器片	
SD37	同	L12～N13	0.3	0.5	東西	古代	U字状	土師器片	
SD38	同	L12～N13	0.3	0.08	東西	平安～	U字状		
SD39	同	O6～13	0.4	0.35	南北	古代	擂鉢状	土錐	
SD40	同	NM1 1	0.4	0.15	東西	平安～	擂鉢状	土師器皿	
SD46	同	K10	0.3	0.2	東西	古代	擂鉢状	土師器片	
SD47	同	K11	0.3	0.2	東西	平安～	U字状		
SD48	同	J9～Q12	0.3	0.1	東西	平安～	U字状		
SD49	同	JKL8・7	2.5	0.6	東西	弥生中期	U字状	細頸壺・甕	
SD51	同	J6・7～QA7	1.4	0.6	東西	平安～	U字状	土師器杯	
SD52	同	J7～Q2	0.8	0.2	東西	平安～	U字状	灰釉陶器	
SD53	同	M10	0.3	0.2	東西	不明	U字状	土師器	
SD55	同	N7～8	0.4	0.2	南北	不明	U字状	土師器	
SD56	同	O4～5	0.4	0.2	東西	不明	逆台形	土師器	
SD57	同	I～Q4～5	1.1	0.2	東西	平安～	逆台形		
SD58	同	K～O14～16G	1.1	0.2	南北	平安～	逆台形		
SD62	同	O5	0.4	0.1	東西	弥生中期	U字状		
SD66	同	J・K4	0.4	0.1	東西	平安～	U字状		
SD67	同	J・K5	0.4	0.1	東西	平安～	U字状		
SD78	同	J11～Q13	2	0.5	東西	弥生中期	U字状	甕	
SD79	同	M・N0	2.5	0.6	東西	弥生中期	U字状	広口壺・甕	
SD80	B・SD1	K～L23	1.2	0.5	東西	平安～	U字状	土師器	
SD82	B・SD4	O～P21・22	0.6	0.3	東西	平安～	U字状	土師器	SD12に接続
SD83	B・SD3	N21	0.4	0.2	東西	平安～	擂鉢状		
SD84	C-2・SD	K80	1.8	0.3	東西	平安～	擂鉢状		
SD85	C-2・SD	K81	1.1	—	東西	平安～	擂鉢状		
SD86	C-3・SD1	K87	1.4	0.4	東西	平安～	擂鉢状		
SD87	C-3・SD2	K87	0.6	0.1	東西	平安～	擂鉢状		
SD88	C-3・SD3	K88	0.7	—	東西	平安～	擂鉢状		
SD89	C-3・SD4	K88	0.7	0.2	東西	平安～	—		
SD90	C-1・SD	K54	0.2	0.2	東西	平安～	U字状		
SD91	C-4・SD1	N～Q87・88	1.4	0.8	東西	鎌倉時代	逆台形	土師器	
SD92	C-4・SD2	M～N88～94	1.6	0.6	南北	古墳時代	擂鉢状	S字甕	

第2表 遺構一覧表2



〈建物・溝・土坑の方向性〉

報告番号	RNo.	質	器形	大地区	地区	遺構層位	取上げNo.	計測値			調整技法	胎土(石材)	色調	残存	特記事項
								口径(cm)	器高(cm)	径はcm ・重量はg					
1	806	弥生土器	壺	A	O10	SK41		8.0			口縁～頸部外一直線文(9本/cm)、内一ハケの後ナデ	やや粗	10YR6/2	口縁部1/2	
2	1802	弥生土器	壺	A	O10	SK41			底径6.6		体部内外一ナデ	粗	10YR6/3	底部完存	外面被熱する
3	1302	弥生土器	壺	A	O3	SK59	No.4	—			体部外上-(沈線+節描直線文2条+沈線)の文様帶2条以上+ヘラミガキ+円形浮文2個残る	粗	10YR6/3	体部小片	
4	101	弥生土器	壺	A	O3	SK59	No.1・2	27.0			口縁端部外一刻目、口縁内外一ヨコナデ、体部外一タテ方向のハケメ・内一横ハケのあとナデ	粗	10YR7/2	口縁～体部上部1/2	
5	1101	弥生土器	壺	A	N1	SK60	No.4		底径4.8		体部下内外一ナデ、底部内一指オサエ	粗	7.5YR6/3	底部2/3	
6	1103	弥生土器	壺	A	N1	SK60	No.2		底径6.4		体部内一ナデ・外一マツ、底部外一ナデ	粗	7.5YR6/3	底部1/6	
7	1102	弥生土器	壺	A	N1	SK60	No.5		底径5.2		体部外一ハケのちヘラミガキ、体部内上一横方向のハケメ・下半一ハケのちナデ、底部外一ナデ	粗	10YR6/3	底部完存	
8	301	弥生土器	壺	A	N1	SK60	No.3	25.8	底径6.0		口縁端部外一刻目、口縁内一横ハケの後ヨコナデ、体部外一タテハケ(4本/cm)・内一ナデ、底部外一ナデ	粗	5YR6/4	口縁部1/4	上と下は接合せず
9	201	弥生土器	壺	A	N1	SK60	No.1	16.3	底径4.8	27.8	口縁内一ヨコナデの後ヘラミガキ・外一タテハケの後ナデ、頸部外一貝殻直線文(14本/cm)、体部外一横方向のヘラミガキ下端は縱方向のヘラミガキ・内一ナデか	粗	10YR7/3	口縁部2/3欠	
10	601	弥生土器	広口壺	A	Q2	SK61	No.4	21.8			口縁端部外一波状文、口縁内外一ヨコナデ、頸部外一貝殻直線文・内一横ハケ	密	7.5YR8/4	口縁部1/4	口縁端部上方に瘤状突起(3~4カ所)
11	801	弥生土器	壺	A	Q2	SK61	No.5	18.0			口縁内外一横ハケの後ヨコナデ、体部外一斜めハケの後タテハケ・内一指オサエナナデ	やや粗	10YR7/3	口縁部1/4	
12	805	弥生土器	壺	A	Q2	SK61	No.11		底径6.3		体部外一タテハケ(4本/cm)、底部内外一ナデ	粗	10YR7/2	底部完存	外面スス
13	701	弥生土器	壺	A	Q2	SK61	No.7	25.3			口縁端部外一刻目、口縁内一横ハケの後ヨコナデ、体部外一タテハケ(4本/cm)・内一ナデ	密	2.5YR7/8	口縁部1/4	体部内面一部スス
14	501	弥生土器	壺	A	Q2	SK61	No.2	24.0			口縁内外一ヨコナデ、体部外一摩滅のため不明・内一ナデ?	粗	10YR7/3	口縁部1/4	
15	401	弥生土器	壺	A	Q2	SK61	No.1・3		底径7.3		体部外一斜ハケ・内一ナデ?、底部外一ナデ	やや粗	外 7.5YR8/4 内 7.5YR2/1	底部完存	体部最大径33.5cm
16	901	弥生土器	壺	A	Q2	SK61	No.6・10		底径5.8		体部外一マツのため不明ハケ?・内一ナデ、底部外一ナデ	粗	7.5YR8/4	底部ほぼ完存	
17	902	弥生土器	壺	A	O4	SK63	No.2~4		底径6.4		体部下外一タテハケ(4本/cm)・内一指オサエナナデ、底部外一ナデ	やや粗	10YR6/2	底部3/4	内面スス
18	802	弥生土器	壺	A	O4	SK63	No.1		底径6.5		体部内外一ナデ、底部外一木葉痕?	粗	7.5YR6/3	底部1/2	
19	1201	弥生土器	無頸壺	A	L4	SK64	No.1	8.0	底径5.1	10.5	体部外上一波状文1条+(櫛描直線文+鬚文)3条・外下-剥離のため調整不明・内一ナデ、内面中央に接合痕	密	7.5YR8/1	口縁部ほぼ完存	上端に穿孔(4mm)2個1対
20	1001	弥生土器	壺	A	M3	SK64	No.20	20.4			口縁内外一ヨコナデ、体部内外一マツのため不明	粗	7.5YR6/3	口縁部1/6	口縁端部に指で摘んだ痕跡
21	804	弥生土器	壺	A	M3	SK64	No.8		底径4.5		体部内外一指オサエのちナデ	やや粗	7.5YR7/4	底部1/3	
22	1002	弥生土器	壺	A	M3	SK64	No.16		底径6.2		底部内外一ナデ	粗	7.5YR5/2	底部完存	
23	803	弥生土器	壺	A	N3	SK64			底径5.1		体部内外一指オサエのちナデ	やや粗	7.5YR5/3	底部1/3	
24	1105	弥生土器	壺	A	O1	SK67	No.2	19.9			口縁端部外一沈線・上端に瘤条突起、口縁内一横ハケのちヨコナデ・外一タテハケのちヨコナデ	やや粗	10YR5/1	口縁部1/8	
25	1104	弥生土器	壺	A	O1	SK67	No.1	17.2			口縁端部外一刻目、口縁内外一ヨコナデ+波状文、外一ヨコナデ、体部内一横ハケ・外一タテハケ	粗	5YR7/4	口縁部1/8	
26	1301	弥生土器	壺	A	O1	SK67	No.4・5	23.6			口縁端部外一刻目、口縁内一ヨコハケの後ヨコナデ・外一ヨコナデ、体部内一ナデ・外一タテハケ	粗	10R5/6	口縁部1/4	
27	1401	弥生土器	壺	A	Q1	SK69	No.1	19.8			口縁端部外一刻目、口縁内一ヨコハケの後ヨコナデ・外一ヨコナデ、体部内一ナデ?・外一タテハケ	粗	10YR7/2	口縁部1/3	
28	1402	弥生土器	壺	A	Q1	SK69	No.2	32.0			口縁内外一ヨコナデ、体部内一マツのため不明・外一タテハケ?	粗	7.5YR7/3	口縁部1/8	
29	1501	弥生土器	壺	A	Q1	SK69	No.3		頸径16.0		頸部上一マツ著しいがタテハケのあと櫛描直線文(7~8本/cm)・外下-刺突文・ナデ?	粗	10YR7/3	頸部～肩部1/2	
30	2002	弥生土器	広口壺	A	K8	SD49下層		17.4			口縁部内外一ヨコナデ、頸部内一横方向のヘラミガキ・外一ヘラミガキ+櫛描直線文4条以上(10本/cm)、体部内一ナデ・外一ヘラミガキ+櫛描直線文(4条以上)	密	5YR3/1	頸部完存	口縁端部下端欠損
31	1902	弥生土器	細頸壺	A	M7	SD49下層		7.8			口縁内外一ヨコナデ、頸部内一ナデ・外一ハケメ薄く残る。粘土紐縫方に2個張り付けたもの2対	密	7.5YR8/6	口縁部完存	受け口状細頸壺
32	3204	弥生土器	壺	A	K8	SD49下層		—			体部内一ナデ・外一櫛描直線文のあと斜格子文	やや粗	10YR6/6	体部小片	
33	2702	土師器	壺	A	K8	SD49下層			底径5.1		体部内外一ナデ、底部内一オサエ	粗	10YR6/4	底部完存	
34	2001	弥生土器	壺	A	N7	SD49下層		23.2	26.7	底径6.0	口縁内外一ヨコナデ、体部内上一粗いハケメ残る・内下ナデ+指オサエ、底部内一指オサエ・外一ナデ	密	7.5YR6/3	口縁部5/6	口縁端部4カ所つまみ上げる、底部中央に6mmの穿孔、体部外面中位スス付着
35	2103	弥生土器	壺	A	J8	SD49下層			底径5.6		マツのため調整不明	粗	7.5YR7/3	底部完存	
36	2104	弥生土器	壺	A	K7	SD49下層			底径4.4		マツのため調整不明	粗	5YR6/6	底部ほぼ完存	
37	3203	弥生土器	壺	A	L8	SD49下層		—			口縁端部外一刻目、口縁内外一ヨコナデ	粗	5YR6/4	口縁部小片	口縁部つまみ上げ
38	2201	弥生土器	壺	A	N7	SD49下層		31.0			口縁端部外一斜格子状刻線+下端に刻目・波状口縁、口縁内外一ヨコナデ	粗	外 10YR6/2 内 10YR7/2	口縁部1/8	
39	1901	弥生土器	壺	A	M7	SD49下層		15.6			口縁端部外一刺突?、口縁内外一ヨコハケの後ヨコナデ・外一ヨコナデ、体部内一ナデ・外一タテハケ	やや粗	10YR5/2	口縁部1/6	体部外スス付着

第3表 遺物観察表1

報告番号	RNo.	質	器形	大地区	地区	遺構層位	取上げNo.	計測値			調整技法	胎土(石材)	色調	残存	特記事項
								口径(cm)	器高(cm)	径はcm ・重量はg					
40	1904	弥生土器	甕	A	K 7	SD49下層		19.8			口縁内外一ヨコナデ、体部内一ナデ・外一タテハケ	密	7.5YR4/3	口縁部3/4	
41	2202	弥生土器	甕	A	N 7	SD49下層		—			口縁内外一ヨコナデ、体部内外一マメツのため調整不明	粗	7.5YR7/4	口縁部小片	口縁部つまみ上げ
42	2901	弥生土器	甕	A	J 8	SD49下層		25.6	30.7	底径5.8	口縁端部外一刻目、口縁内外一ヨコナデ、体部内一ナデ・外一タテハケ(3本/cm)、底部内面一オサエ	密	5YR4/6	口縁部1/4	内外面スス
43	2107	弥生土器	甕	A	J 8	SD49下層		19.6			口縁端部外一上端と下端に刻目、口縁部内一波状文・外一ヨコナデ、体部外上一輪描直線文1条	粗	10YR7/2	口縁部1/3	
44	2106	弥生土器	甕	A	K 7	SD49下層		17.8		底径4.4	口縁端部外一刻目、口縁内外一ヨコナデ、体部内上一斜ハケ、内下一ナデ・外一マメツのため不明	粗	10YR4/2	口縁部1/4	上と下は接合せず
45	2204	弥生土器	甕	A	M 7	SD49下層		19.6		底径4.9	口縁端部外一刻目、口縁内外一ヨコナデ、体部内一ナデ?・外一タテハケ	粗	10YR7/3	口縁部1/4	上と下は接合せず 底部内面スス
46	2105	弥生土器	甕	A	K 8	SD49下層				底径5.3	体部内一ナデ・外一タテハケ	粗	10YR6/2	底部1/2	
47	2701	弥生土器	甕	A	K 8	SD49下層				底径6.8	体部内外一タテハケ、底部外一ナデ	粗	10YR6/2	底部完存	体部外面スス
48	2203	弥生土器	細頸甕	A	N 7	SD49下層				底径20.6	体部外上一輪描直線文(1本/cm)+部位最大径に凸帯貼り付け刺突文、内一ナデか	やや粗	2.5Y4/1	体部上部3/8	
49	1903	弥生土器	壺	A	O 7	SD49		17.0			口縁端部上端一刻目・外一波状文・口縁内外一ヨコナデ、頸部外面残り悪いが輪描横線文か	密	2.5YR7/6	口縁部完存	
50	2401	弥生土器	細頸甕	A	P 7	SD49		10.1			口縁端部上端一刻目、口縁内外一ヨコナデ、頸部内一ナデ・外一タテハケのあと輪描直線文(7本/cm)	やや粗	10YR6/2	口縁部1/2	
51	2601	弥生土器	細頸甕	A	P 7	SD49		8.5			口縁内外一ヨコナデ、頸部内一ナデ・外一残り悪いが輪描直線文(10本/cm)残る	粗	7.5YR7/3	口縁部3/4	
52	2602	弥生土器	細頸甕	A	P 7	SD49		8.2			口縁内外一ヨコナデ、頸部内一ナデ・外一残り悪い調整不明	粗	7.5YR8/2	口縁部3/4	
53	2404	弥生土器	甕	A	P 7	SD49				底径6.6	体部下外一タテハケのあと指ナデによる面取り、内一ナデ	粗	5Y3/1	底部完存	
54	2302	弥生土器	壺	A	M 8 ·N 7	SD49・ SD49下層		20.6			口縁端部外一上端と下端に刻目、口縁内外一ヨコナデ、頸部内一横ハケ後ナデ・外一斜ハケ、頸部と体部の境界にへラ描沈線2条、体部内一横ハケ(8本/cm)・外一タテハケのあとヘルミガキ	やや粗	10YR6/3	口縁部1/4	
55	2801	弥生土器	甕	A	O 7	SD49		23.4		底径5.3	口縁端部外一刻目、口縁内外一ヨコナデ、体部内一ナデ?・外一タテハケ	粗	7.5YR8/4	口縁部1/6	底部中央に1.2cmの穿孔、体部上半と下半接合せず
56	3202	弥生土器	甕	A	P 7	SD49		20.6			口縁内外一ヨコナデ、体部内一ヨコハケ・外一横ナデのあとタテハケ	粗	7.5YR6/4	口縁部1/4	
57	2301	弥生土器	高杯	A	M 8	SD49		25.3			口縁端部外一上端と下端に刻目、口縁内外一マメツのため調整不明	粗	10YR7/3	口縁部1/2	
58	2101	弥生土器	甕	A	O 7	SD49				底径6.6	体部内一工具ナデ?・外一タテハケ、底部外一ナデ	粗	10YR6/2	底部1/2	底部外面砂粒痕
59	2402	弥生土器	壺	A	P 7	SD49				底径6.7	体部内一横ハケ(2~3本/cm)・外一タテハケ(8本/cm)、底部外一ナデ	粗	10YR7/3	底部完存	
60	2501	弥生土器	細頸甕	A	M 7	SD49				底径34.4	体部内上一ナデ・上下一横ハケ(5本/cm)・外一ヘルミガキ+(沈線・擬似繩目・沈線)を一単位とする文様帶2条以上	粗	10YR6/2	体部2/3	体部外擬似繩目文
61	2102	弥生土器	甕	A	O 7	SD49				底径4.6	体部内一ナデ・外一タテハケ(4本/cm)、底部外一ナデ	粗	外 10YR5/2 内 N4/	底部3/4	
62	3104	弥生土器	壺	A	Q 7	SD49				底径7.8	体部外一タテハケ(5本/cm)	粗	10YR8/2	底部3/4	外面スス
63	3103	弥生土器	甕	A	Q 7	SD49				底径6.0	体部外一タテハケ	粗	10YR6/2	底部完存	外面スス 底部穿孔
64	1601	弥生土器	広口壺	A	N11 ·O11	SK70		28.2			口縁端部外面一直線文、口縁内外一ヨコナデ、頸部外面一員穀直線文(16本/cm)4条・内一指オサエ、体部外面上一員穀直線文4条以上・下へラミガキ、体部内面上一ナデ・下へ斜ハケ(4本/cm)	やや粗	外 5YR6/6 内 10YR8/4	口縁部1/4	頸部と体部接合せず。体部最大径53.5cm
65	1701	弥生土器	甕	A	M 2	SK72 (除去後)	No.1～3	18.0			口縁端部外一刻目・上端一波状口縁・内一波状文、体部内一ナデ・外一タテハケの後波状文(4本)3条	密	10YR6/1	口縁部3/4	体部外面スス
66	1702	弥生土器	甕	A	M 2	SK72	No.1～4	21.3			口縁端部外一刻目・口縁内外一ヨコナデ、体部外一タテハケ・内一ナデ	粗	7.5YR4/3	口縁部ほぼ完存	4カ所口縁端部を上方にほぼ上げる
67	3001	弥生土器	甕	A	J 11	SD78 底部トレント		27.4			口縁端部外一刻目、口縁内外一ヨコナデ、体部内一ヨコハケ(6本/cm)・内下一ナデ・外一タテハケ(4本/cm)	粗	7.5YR5/4	口縁部1/5	口縁部刻目
68	2403	弥生土器	広口壺	A	—	SD79		16.8			口縁内外一ヨコナデ、頸部内一縱方向のナデ・外一輪描直線文(4本/cm)	粗	10YR8/2	口縁部1/3	
69	3101	弥生土器	甕	A	—	SD79		22.2		底径5.4	口縁端部外一輪描横線文・上端一刻目・内一波状文、口縁内外一ヨコナデ、体部内上一ナデ・外一タテハケ(7本/cm)のあと波状文(7本/cm)3条	粗	10YR7/1	口縁部1/3	体部外面スス 底部焼成後穿孔
70	3201	弥生土器	甕	A	—	SD79		28.5			口縁内外一ヨコナデ、体部内一ナデ+指オサエ・外一タテハケ(3~4本/cm)	やや粗	10YR6/2	口縁部1/3	体部外面スス
71	1801	土師器	杯	A	M 8	SK50		12.4	3.1		口縁内外一ヨコナデ、底部外一指オサエ	やや密	7.5YR7/4	口縁部1/4	
72	1803	土師器	杯	A	M 8	SK50		12.1			口縁内外一ヨコナデ、底部外一指オサエ	やや粗	10YR8/4	口縁部1/3	
73	1806	土師器	杯	A	M 8	SK50		13.6	2.7		口縁内外一ヨコナデ、底部外一指オサエ	密	7.5YR8/4	口縁部1/4	
74	1805	土師器	皿	A	M 8	SK50		14.4	2.3		マメツのため調整不明	やや密	5YR6/8	口縁部1/6	
75	1804	土師器	皿	A	M 8	SK50		14.8	2.1		マメツのため調整不明	やや密	5YR6/8	1/3	
76	3102	陶器	山茶碗	A	K 17	SD16				底径8.8	体部内外一ロクロナデ、底部外一糸切り、貼り付け高台	やや密	5Y7/1	底部1/6	高台部モミガラ痕
77	2804	土製品	土鍤	A	M 18	SD18		5.6×1.7		重量(12.4)	ナデ+指オサエ	密	10YR4/1	ほぼ完存	
78	2805	土製品	土鍤	A	O 9	SD39		4.7×1.3		重量(7.6)	ナデ+指オサエ	密	10YR5/3	ほぼ完存	
79	2803	土師器	甕	A	K 7	SD51		—			ナデ+指オサエ	やや密	5YR8/2	把手部片	押入式
80	4501	土師器	杯	A	M 7	SD51		12.8	4.0		マメツのため調整不明	密	5YR7/4	口縁部1/5	

第4表 遺物観察表2

報告番号	RNo.	質	器 形	大 地 区	地 区	遺構層位	取上げNo.	計 测 値		調整技法	胎 土 (石材)	色 調	残 存	特記事項		
								口径 (cm)	器高 (cm)							
81	2802	陶器	山茶碗	A	Q7	SD52				底径 8.6	底部内一ロクロナデ・外一ロクロケズリ、貼 り付け高台	密	2.5Y7/1	底部1/4 内面に自然釉		
82	4502	灰釉陶器	椀	A	Q7	SD52				底径 6.5	体部内外一ロクロナデ、底部外一系切り、貼 り付け高台	密	N8/	底部1/4		
83	3301	石製品	削器	A	P7	SD49		4.70× 5.37	0.76	重量 19.2	——	サヌカ イト	——	完存		
84	3402	石製品	石鎌	A	Q2	SK61		2.90× 1.83	0.46	重量 2.1	——	サヌカ イト	——	完存		
85	3403	石製品	石鎌	A	Q2	SK61		(2.3)× (1.63)	(1.11)	重量 (3.1)	——	サヌカ イト	——	ほぼ完存		
86	3401	石製品	F	A	Q2	SK61		2.19× 1.53	0.51	重量 1.3	——	サヌカ イト	——	完存		
87	3502	石製品	石鎌	A	M3	SK64 (床面)		(2.80)× 1.30	0.30	重量 (1.4)	——	サヌカ イト	——	ほぼ完存		
88	3801	石製品	楔形	A	—	SK64(炉粘 質土層)		2.07× 2.45	0.74	重量 3.1	——	サヌカ イト	——	完存		
89	3602	石製品	F	A	M2	SK64		(1.25)× (1.90)	0.25	重量 (0.6)	——	サヌカ イト	——	ほぼ完存		
90	3501	石製品	石鎌	A	L3	SK64		2.60× 1.50	0.35	重量 1.2	——	サヌカ イト	——	完存 未製品		
91	3601	石製品	RF	A	M4	SK64		4.05× 2.50	0.85	重量 (7.9)	——	サヌカ イト	——	ほぼ完存		
92	4002	石製品	RF	A	P1	SK64		2.70× 2.80	0.55	重量 (4.1)	——	サヌカ イト	——	ほぼ完存		
93	3701	石製品	F	A	M3	SK64		2.00× 4.40	1.30	重量 (7.4)	——	サヌカ イト	——	ほぼ完存		
94	4001	石製品	RF	A	M2	SK64 (床面)	No.3	3.20× 3.00	0.85	重量 (5.6)	——	サヌカ イト	——	ほぼ完存		
95	3702	石製品	石斧	A	L2	SK64		(4.30)× 5.80	1.30	重量 (53.0)	——	砂岩	——	ほぼ完存 擦面有り		
96	3901	石製品	F	A	O1	SK67		1.91× (1.52)	0.24	重量 (0.6)	——	サヌカ イト	——	ほぼ完存		
97	5801	石製品	石鎌	A	L10	SK77		2.42× 1.96	0.40	重量 1.6	——	サヌカ イト	——	完存		
98	4301	石製品	砥石	A	M3	SK64	No.3	(13.8)× 9.7	3.2	重量 501.3	——	不明	——	—		
99	4401	石製品	敲石	A	O1	SK67	No.7	12.2× 10.9	8.9	重量 1713.1	——	不明	——	完存		
100	4101	石製品	凹石 (敲石)	A	O7 ·P7	SD49		10.2× 8.0	5.5	重量 596.6	——	不明	——	完存 両端に使用痕残る		
101	4201	石製品	敲石?	A	M7	SD51		10.5× 6.5	5.7	重量 564.5	——	不明	——	完存		
102	4602	弥生土器	壺	A	Q8	p1		—		口縁端部外一上端と下端に刺突文、口縁内外一 ヨコナデ、体部内一ナデ、外一タテハケ	やや密 外 10YR5/2 内 10YR6/3	口縁部 小片				
103	4506	土師器	壺	A	M9	SB9(p2)		19.6		口縁内外一ヨコナデ、体部内一ヨコハケ・外一 タテハケ	密	5YR8/3	口縁部 1/12	外面スス		
104	4505	土師器	壺	A	Q8	p1		22.0		口縁内外一ヨコナデ、体部内一ナデ・外一タ テハケ	やや粗	7.5YR7/4	口縁部 1/12			
105	4601	土師器	壺	A	K10	p1		12.7		口縁内外一ヨコナデ、体部内一工具ナデ・外一 タテハケ(3本/cm)を粗く施す	やや密	10YR5/1	口縁部 1/10			
106	4507	土師器	製塙土器	A	J9	p5(底)		22.5	5.4	内一ナデ、外一指オサエ	やや粗	5YR7/6	口縁部 1/12	志摩式		
107	4504	土師器	杯	A	J9	SB1(p4)		15.8	3.7	口縁内外一ヨコナデ、底部内一ナデ・外一ナ デ+指オサエ	密	5YR7/6	口縁部 1/12			
108	4503	灰釉陶器	椀	A	R9	SB73(p2)				底径 6.1	体部内外一ロクロナデ、底部外一系切り、貼 り付け高台	密	N8/	底部完存 内面に赤色顔料及び重焼 痕		
109	7201	土師器	高杯	C	M94	SD1下層		18.8			口縁内外一ヨコナデ、底部外一タテハケのあ とナデ	密	7.5YR7/6	口縁部 1/6		
110	7202	土師器	高杯	C	M94	SD1下層		17.0			口縁内外一ヨコナデ	密	7.5YR8/4	口縁部 1/6	内面に黒斑	
111	7205	土師器	高杯	C	N91	SD1下層	No.7			底径 13.8 ~ 14.2	脚裾内外一ヨコナデ、脚柱内一ナデ絞り目残 る・外一ナデ	密	7.5YR7/8	底部1/2		
112	7204	土師器	高杯	C	N90	SD1上層 北セクション SD1下層				底径 13.0	脚裾内外一ヨコナデ、脚柱内一ナデ絞り目残 る・外一縦方向のナデ?・杯底部内外一ナデ	密	7.5YR8/3	底部1/6		
113	7302	土師器	小形丸底壺	C	N91	SD1下層 直上	No.9	8.1	8.1		口縁内外一ヨコナデ、体部内上一ナデ・内下 一指オサエ・外上一指オサエ・外下一ナデ	密	10YR8/2	体底部 完存	体部外一黒斑	
114	7303	土師器	小形丸底壺	C	N91	SD1下層				体径 8.4	口縁内外一ヨコナデ、体部内上一ナデ・内下 一指オサエ・外一ナデ	密	10YR8/3	体底部 ほぼ完存	体部外一黒斑	
115	7305	土師器	小形丸底壺	C	M91	SD1下層	No.8	9.2	8.1		口縁内外一ヨコナデ、体部内上一ナデ・内下 一指オサエ+ナデ	密	10YR7/2	ほぼ完存		
116	7304	土師器	小形丸底壺	C	M92	SD1下層	No.4	9.0	8.8		口縁内外一ヨコナデ、体部内上一ナデ・外上一 ナデ・外下一ラケズリ	密	7.5YR7/3	体部完存		
117	7301	土師器	小形丸底壺	C	N92	SD1上層	No.5	8.9	7.5		口縁内外一ヨコナデ、体部内上一ナデ・内下 一指オサエ・外一ナデ	密	7.5YR7/3	ほぼ完存		
118	6701	土師器	壺	C	M94	SD1下層	No.11			底径 7.0	体部内上一オサエ+ナデ・内下一ナデ・外一 マツメのため調整不明	密	10YR7/3	体底部 ほぼ完存	肩部に黒斑	
119	6801	土師器	台付壺	C	N92	SD1下層		15.8			口縁内外一ヨコナデ、体部内上一指オサエ+ ナデ・外一タテハケ(3本/cm)	密	7.5YR7/6	口縁部 5/12		
120	6901	土師器	台付壺	C	M92	SD1下層	No.3			底径 8.2	体部内上一指オサエ+ナデ・外一タテハケ(5本/cm)・脚 内一指オサエ+ナデ・外一ナデ	密	7.5YR7/6	体底部 2/3	体部外面スス	
121	6602	土師器	壺	C	M92	SD1上層	No.2	18.0			口縁内外一ヨコナデ、体部内上一ラケズリ・ 外一タテハケ(5本/cm)	密	10YR8/3	口縁部 1/4		
122	6601	土師器	台付壺	C	N91	SD1下層 直上	No.6	13.2 ~14			口縁内外一ヨコナデ、体部内上一ラケズリ・ 内下一ナデ・外一タテハケ(4本/cm)	密	10YR8/3	口縁部 2/3	体部外面スス	
123	7001	土師器	台付壺	C	N90	SD1(砂)		12.6			口縁内外一ヨコナデ、体部内上一指オサエ+ ナデ・内下一ナデ・外一タテハケ(5本/cm)	密	10YR8/4	口縁部 1/4		
124	7101	土師器	台付壺	C	M93	SD1	No.1	12.8			口縁内外一ヨコナデ、体部内一ナデ・外一タ テハケ(5~6本/cm)	密	7.5YR7/4	口縁 ~体部 ほぼ完存		
125	7402	須恵器	杯身	C	K80	SD1		11.6			口縁内外一ロクロナデ、底部外一ロクロケズ リ	密	5Y8/1	口縁部 1/12		

第5表 遺物観察表3

報告番号	RNo.	質	器 形	大 地 区	地区	遺構層位	取上げNo.	計 测 値			調整技法	胎 土 (石材)	色 調	残 存	特記事項
								口径 (cm)	器高 (cm)	径はcm ・重 量はg					
126	7401	陶器	山皿	C	K79	SD 1		9.6	3.0	底径 4.1	口縁内外一ロクロナデ、底部外一系切り、貼り付け高台	密	2.5Y8/1	ほぼ完存	
127	6502	土師器	甕	C	M91-N90	SD 2 溝直上		14.0			口縁内外一ヨコナデ、体部内一ナデ・外一マメツ著しいがタタキ(3本/cm)の痕跡残る	粗	2.5YR6/6	口縁部 1/2	体部外面スス
128	6501	土師器	台付甕	C	N90 N91 SD 1 下層 M92	SD 2 溝直上 SD 1 下層 (粘) SD 1 下層	No.10	10.7	19.3	脚径 7.4	口縁内外一ヨコナデ、体部内一ナデ・外一マメツのため調整不明、脚内一指オサエナデ・外一ナデ、脚端外一板ナデ	密	10YR8/3	口縁部 7/12	体部外面下半スス
129	7203	土師器	高杯	C	N90 -91	SD 2		21.0			口縁内外一ヨコナデ	密	7.5YR7/3	口縁部 1/2	
130	7403	陶器	山皿	C	K88	SD 2		7.6	2.0	底径 3.8	口縁内外一ロクロナデ、底部外一系切り	密	2.5Y7/1	口縁部 1/3	
131	4701	弥生土器	甕	A	K 5	包含層		38.0		底径 8.5	口縁内外一ヨコナデ、体部内一ナデ?・外一細かいタテハケ(5~6本/cm)のあと粗いタテハケ(4本/2cm)、底部外一指オサエナデ	粗	2.5Y7/2	口縁部 1/6	上半と下半接合せず
132	4901	弥生土器	甕	A	L 7	包含層(暗 褐色粘質土落 ち込み部)		22.5	24.2	底径 5.8	口縁内外一ヨコナデのあと波状文2条・外一ヨコナデ、体部内一ナデ・外一タテハケ	粗	10YR6/4	1/2	体部外面一部被熱、底部中央に穿孔(1.1cm)
133	5003	弥生土器	甕	A	M 5	包含層				底径 5.3	体部内外一ナデ、底部内外一ナデ	やや粗	10YR7/2	底部完存	
134	5303	弥生土器	甕	A	Q 8	包含層		14.8			口縁端部外一刻目、口縁内一ヨコハケ後ヨコナデ・外一ヨコナデ、体部内一ナデ・外一タテハケ	粗	7.5YR5/3	口縁部 1/4	口縁部刻目
135	5001	弥生土器	甕	A	P 10	包含層		24.2			口縁端部外一上端と下端に刻目、口縁内一ヨコハケ(4本/cm)の後ヨコナデ・外一ヨコナデ、体部内一ナデ・外一タテハケ(6本/cm)	粗	7.5YR6/4	口縁部 1/8	口縁部刻目
136	5101	弥生土器	甕	A	Q 2	排水溝 (砂質土)				底径 5.9	体部内一ナデ・外一タテハケ(8~9本/cm)底部内一指オサエ・外一ナデ	やや粗	10YR6/2	底部完存	
137	5002	弥生土器	壺	A	P 7	包含層		19.7			口縁端部外一刺突文、口縁内外一ヨコナデ、頸部内一マメツのため調整不明・外一タテハケ(4本/cm)のあと沈殿3本以上	粗	7.5YR7/4	口縁部 1/6	
138	5703	弥生土器	甕	A	M 12	包含層				底径 5.3	体部内一ナデ・外一タテハケ(5本/cm)、底部内一指オサエ・外一ナデ	やや粗	7.5YR7/3	底部完存	
139	5408	須恵器	杯蓋	A	M 12	包含層		12.2			口縁内外一ロクロナデ、底部内一ロクロナデ・外一ロクロケズリ	密	N7//	1/5	
140	5409	須恵器	高杯	A	L 5	包含層				底径 9.8	脚部内外一ロクロナデ	やや密	N8//	脚部1/7	円形透かし1カ所残る
141	4801	須恵器	甕	A	N 10	包含層		37.7			口縁内外一ロクロナデ	やや粗	N6//	口縁部 1/12	
142	5105	石製品	砥石	A	J 17	包含層	(8.2)× 8.1	2.4	重量 (134.9)			-	-	擦面有り	
143	5106	石製品	砥石	A	L 2	包含層	(9.5)× 7.4	3.6	重量 (221.5)			-	-	擦面有り	
144	6301	石製品	敲石	A	L 7	包含層	(9.33)× (5.52)	(5.38)	重量 (311.7)						
145	5304	土師器	甕	A	Q 9	包含層		15.7			口縁内外一ヨコナデ、体部内一ヨコハケ(7本/cm)・外一タテハケ	やや粗	7.5Y8/3	口縁部 1/8	
146	5701	土師器	甕	A	O 12	包含層		12.8			口縁内外一ヨコナデ、体部内一工具ナデ・外一マメツのため不明	やや粗	5YR6/6	口縁部 1/8	
147	5702	土師器	甕	A	L 8	包含層		14.6			口縁内外一ヨコナデ、体部内一ナデ・外一粗いタテハケ	やや粗	10YR8/2	口縁部 1/12	
148	5004	土師器	杯	A	M 8	包含層		11.0	2.9		口縁内外一ヨコナデ、底部外一ナデ	やや粗	7.5YR7/4	1/8	
149	5507	須恵器	杯	A	J 14	包含層		16.8	3.2		口縁内外一ロクロナデ、底部内一ロクロナデ・外一ヘラ切り	密	5Y7/1	口縁部 1/8	焼き垂み大
150	5401	灰釉陶器	段皿	A	L 14	包含層		12.3	2.4		口縁内外一ロクロナデ、底部外一ロクロケズリ、貼り付け高台	やや密	釉 7.5Y7/1 2.5Y8/1	口縁部 1/6	釉漬け掛け
151	5007	灰釉陶器	椀	A	J 21	包含層				底径 6.3	体部内外一ロクロナデ、底部外一ロクロケズリ、貼り付け高台	やや密	7.5Y7/1	底部1/4	
152	5209	灰釉陶器	椀	A	O 7	包含層				底径 7.5	底部内一ロクロナデ・外一ロクロケズリ、貼り付け高台	やや密	N8//	底部1/3	
153	5008	灰釉陶器	椀	A	N 8	包含層				底径 6.4	体部内外一ロクロナデ、貼り付け高台	密	5Y8/1	底部1/4	
154	5704	土師器	椀	A	L 14	包含層				底径 5.3	底部内外一ナデ、貼り付け高台	やや粗	10YR8/2	底部3/4	
155	5508	陶器	甕	A	L 18	包含層		17.8			口縁内外一ロクロナデ	やや密	7.5YR4/2	口縁部 1/6	
156	5212	陶器	瓶子?	A	N 4	包含層				底径 10.0	内外一ロクロナデ	やや粗	5Y7/1	底部1/4	底部外剥離
157	5102	須恵器	椀	A	I 1 3	排水溝 (包含層)				底径 7.6	底部内一ロクロナデ・外一系切り、貼り付け	密	N6//	底部1/3	
158	5103	綠釉陶器	椀	A	I 2 3	排水溝 (包含層)				底径 6.8	底部内一ロクロナデ・外一ロクロケズリ	密	釉 10Y7/2 2.5GY7/1	底部1/5	京都産、釉全面、内面重焼痕
159	5104	綠釉陶器	椀	A	L 15	包含層				底径 8.1	内外一ロクロナデ、貼り付け高台	密	釉 10Y7/2 N8//	底部1/6	釉全面
160	5205	陶器	山茶椀	A	O 15	包含層				底径 6.6	底部内一ロクロナデ・外一系切り、貼り付け	やや密	2.5Y8/2	底部1/2	
161	5206	陶器	山茶椀	A	Q 8	包含層				底径 8.1	底部内一ロクロナデ・外一系切り、貼り付け	やや密	2.5Y8/3	底部1/3	
162	5202	陶器	山茶椀	A	Q 16	包含層				底径 6.5	底部内一ロクロナデ・外一系切り、貼り付け	やや密	5Y8/1	底部1/2	
163	5204	陶器	山茶椀	A	O 0	包含層				底径 6.5	底部内一ロクロナデ・外一系切り、貼り付け	やや粗	5Y7/1	底部1/3	
164	5203	陶器	山茶椀	A	O 0	包含層				底径 7.7	底部内一ロクロナデ・外一系切り、貼り付け	やや密	7.5Y8/1	底部1/4	高台部モミガラ痕
165	5207	陶器	山茶椀	A	P 15	包含層				底径 8.8	底部内一ロクロナデ、貼り付け高台	やや密	10Y8/1	底部1/4	
166	5210	陶器	山茶椀	A	O 1	包含層				底径 7.9	底部内一ロクロナデ・外一系切り、貼り付け	やや密	2.5Y7/2	底部1/6	内面重焼痕
167	5211	灰釉陶器	壺	A	N 7	包含層				底径 9.0	底部内一ロクロナデ・外一ロクロケズリ、貼り付け高台	やや密	5Y8/1	底部1/2	底部内面自然釉
168	5301	陶器	山茶椀	A	h21	包含層				底径 4.9	内外一ロクロナデ、貼り付け高台	やや密	5Y7/1	底部1/2	
169	5402	灰釉陶器	椀	A	L 18	包含層				底径 6.3	口縁内外一ロクロナデ、底部外一系切り、貼り付け高台	密	N8//	底部1/4	

第6表 遺物観察表4

報告番号	RNo.	質	器形	大地区	地区	遺構層位	取上げNo.	計測値		調整技法	胎土(石材)	色調	残存	特記事項	
								口径(cm)	器高(cm)	径はcm ・重量はg					
170	5403	灰釉陶器	椀	A	O13	包含層			底径7.3	口縁内外一ロクロナデ、底部外一ロクロナデ、貼り付け高台	やや密	5Y8/1	底部5/12	内面三又トチン痕	
171	5404	陶器	山茶椀	A	L4	包含層			底径6.0	底部外一系切り・内一ロクロナデ	粗	5Y8/2	底部1/3		
172	5406	陶器	山茶椀	A	O13	包含層			底径7.0	口縁内外一ロクロナデ、底部外一系切り、貼り付け高台	やや密	N8/	底部1/3	高台部モミガラ痕	
173	5407	陶器	山茶椀	A	O11	包含層			底径6.8	口縁内外一ロクロナデ、底部外一系切り、貼り付け高台	やや粗	7.5Y8/1	底部1/4	内面重焼痕	
174	5405	陶器	山茶椀	A	O11	包含層			底径5.6	口縁内外一ロクロナデ、底部外一系切り、貼り付け高台	やや密	5Y8/2	底部1/4	底部内面マツツ	
175	5213	陶器	山茶椀	A	O4	包含層	13.9			口縁内外一ロクロナデ	やや粗	5Y8/1	口縁部1/6	側面墨書	
176	5201	陶器	山茶椀	A	O17	包含層			底径6.1	底部外一系切り・内一方向ナデ	やや粗	5Y8/1	底部1/3	底部外面墨書	
177	5501	陶器	山茶椀	A	J5	包含層			底径6.6	内外一ロクロナデ、貼り付け高台	やや密	5Y7/1	底部1/4	底部内面に墨痕 高台部モミガラ痕	
178	5502	陶器	山茶椀	A	M2	包含層			底径6.0	口縁内外一ロクロナデ、底部内一方向ナデ・外一系切り、貼り付け高台	粗	5Y7/1	底部完存	内面に重焼痕 高台部モミガラ痕	
179	5208	陶器	山茶椀	A	N20	包含層	15.1	5.5	底径6.5	口縁内外一ロクロナデ、底部内一ロクロナデ・外一系切り、貼り付け高台	やや粗	5Y7/1	口縁部1/12		
180	5509	陶器	山茶椀	A	K22	包含層		12.8	5.5	底径5.3	口縁内外一ロクロナデ、底部内一ロクロナデ・外一系切り、貼り付け高台	粗	5Y7/1	口縁部1/4	高台部モミガラ痕
181	5506	須恵器	壺	A	M5	包含層			底径9.8	内外一ロクロナデ、貼り付け高台	密	N6/	底部1/8		
182	5302	陶器	山皿	A	L22	包含層	8.0	1.5	底径6.0	口縁内外一ロクロナデ、底部外一系切り	やや粗	7.5Y8/1	1/2	底部外面墨書?	
183	5503	陶器	山皿	A	M17	包含層		7.9	1.2	底径4.4	口縁内外一ロクロナデ、底部内一方向ナデ・外一系切り	やや密	7.5Y7/1	1/4	
184	5504	陶器	山皿	A	M4	包含層		7.6	2.0	底径4.6	口縁内外一ロクロナデ、底部内一ロクロナデ・外一系切り	やや密	5Y7/1	1/4	
185	5505	陶器	山皿	A	J6	包含層		8.0	1.7	底径4.5	口縁内外一ロクロナデ、底部内一ロクロナデ・外一系切り	やや密	5Y7/1	1/6	
186	5006	陶器	天目茶碗	A	J22	包含層			底径3.8	内外一ロクロナデ、ケズリ出し高台	密	軸素 10YR3/1 N8/	底部1/4		
187	5005	陶器	天目茶碗	A	J23	包含層			底径4.0	内外一ロクロナデ、ケズリ出し高台	密	軸素 10YR3/1 N8/ 7.5Y7/1	底部1/2		
188	5601	灰釉陶器	ミニチュア壺	A	L8	包含層			底径2.2	口縁内外一ロクロナデ、体部内一ロクロナデ・外上一ロクロナデ・外下一ロクロケズリ、貼り付け高台	密	7.5Y5/2	体底部完存		
189	5305	土製品	土錘	A	O19	包含層	(4.1)×1.7		重量(9.8)	ナデ+指オサエ	やや密	10YR7/2	ほぼ完存	横線有り	
190	5306	土製品	土錘	A	M15	包含層		4.9×1.4	重量(8.4)	ナデ+指オサエ	密	2.5Y3/1	ほぼ完存		
191	5307	土製品	土錘	A	N8	包含層		6.0×1.8	重量(17.0)	ナデ+指オサエ	密	5Y3/1	ほぼ完存		
192	5308	土製品	土錘	A	L8	包含層		4.6×1.5	重量(8.4)	ナデ+指オサエ	密	2.5Y3/1	ほぼ完存		
193	5309	土製品	土錘	A	N18	包含層		(3.8)×1.5	重量(9.6)	ナデ+指オサエ	やや粗	5Y3/1	2/3		
194	5310	土製品	土錘	A	K17	包含層		3.2×1.6	重量(8.8)	ナデ+指オサエ	やや密	7.5Y2/1	ほぼ完存		
195	5311	土製品	土錘	A	M19	包含層		3.3×1.6	重量(7.5)	ナデ+指オサエ	やや粗	2.5Y8/2	ほぼ完存		
196	5312	土製品	土錘	A	M4	包含層		3.3×0.9	重量(2.3)	ナデ+指オサエ	やや密	7.5YR5/1	ほぼ完存		
197	5313	土製品	土錘	A	M8	包含層		5.5×2.8	重量(31.6)	ナデ+指オサエ	やや粗	2.5Y8/2	ほぼ完存		
198	5314	土師器	甕	A	O7	包含層	—			ナデ+指オサエ	やや密	10YR8/2	把手部片	挿入式	
199	5705	錢貨		A	L17	包含層			重量(3.0)				ほぼ完存	「景德元寶」1044年	
200	5706	錢貨		A	L15	包含層			重量(0.9)				3/4		
201	5707	錢貨		A	J14	包含層			重量(3.0)				ほぼ完存	「元祐通寶」?1086年	
202	6406	須恵器	杯身	B	N28	2層	10.1	3.1		口縁内外一ロクロナデ、底部内一ロクロナデ・外一ロクロケズリ	密	N7/	口縁部1/12		
203	6401	須恵器	壺	B	L28	2層			底径11.3	内外一ロクロナデ、貼り付け高台	密	N7/	底部1/3		
204	6402	陶器	山茶椀	B	O25	2層			底径6.1	体部内外一ロクロナデ、底部内一ロクロナデ・外一系切り、貼り付け高台	密	5Y7/1	底部1/2	高台部モミガラ痕	
205	6403	陶器	山茶椀	B	—	西壁表土はぎ			底径6.4	体部内外一ロクロナデ、底部内一ロクロナデ・外一系切り、貼り付け高台	やや密	N7/	底部1/4		
206	6404	灰釉陶器	椀	B	N29	2層			底径8.0	体部内外一ロクロナデ、底部内一ロクロナデ・外一ロクロケズリ、貼り付け高台	密	軸素 7.5Y5/2 10YR7/2	底部1/4	内面トチン痕	
207	6405	陶器	山茶椀	B	P22	2層	14.4			口縁内外一ロクロナデ	やや密	N7/	口縁部1/8		
208	6407	弥生土器	壺	B	—	西壁表土はぎ			底径9.7	内外一ナデ	粗	10YR7/4	底部1/3		
209	7507	縄文土器	鉢	C	K62	2層(灰黒色粘質土上層)	—			口縁内外一ナデ	粗	10YR4/3	口縁部小片	突帶有り	
210	7508	縄文土器	鉢	C	K62	2層(灰黒色粘質土上層)	—			体部内外一ナデ	粗	10YR5/3	口縁部小片	突帶有り	
211	7502	土師質	不明品	C	K35	耕作土(包含層)	2.2×2.1	1.1		指オサエ+ナデ	密	7.5YR7/4	ほぼ完存	火輪部?	
212	7606	土師器	小皿	C	K78	4層(褐灰色シルト)	9.0	2.1		口縁内外一ヨコナデ、底部内一ナデ・外一指オサエ+ナデ	密	10YR8/3	口縁部1/6		
213	7608	土師器	皿	C	K82	2層(褐色砂質土下位)	15.0			口縁内外一ヨコナデ、底部内一ナデ・外一指オサエ+ナデ	密	10YR8/3	口縁部1/8		
214	7803	土師器	小皿	C	N91	包含層	6.2	1.4		口縁内外一ヨコナデ、底部内一ナデ・外一指オサエ+ナデ	やや粗	2.5Y8/2	口縁部1/4		
215	7805	土師器	小皿	C	Q93	包含層	8.8	0.9		口縁内外一ヨコナデ、底部内一ナデ・外一指オサエ+ナデ	密	5YR7/6	口縁部1/6		

第7表 遺物観察表5

報告番号	RNo.	質	器形	大地区	地区	遺構層位	取上げNo.	計測値		調整技法	胎土(石材)	色調	残存	特記事項
								口径(cm)	器高(cm)					
216	7505	陶器	山茶椀	C	K54	2層(灰色粘質土)			底径8.4	口縁内外一ロクロナデ、底部外一糸切り、貼り付け高台	密	5Y8/1	底部1/4	高台部モミガラ痕
217	7506	陶器	山茶椀	C	K43	灰色粘質土			底径7.2	底部内外一ロクロナデ、貼り付け高台	密	2.5Y7/1	底部1/3	
218	7510	陶器	山茶椀	C	K68	2層(灰黑色粘質土B混・灰色粘質土)			底径6.7	体部内外一ロクロナデ、貼り付け高台	密	2.5Y7/2	底部1/2	
219	7511	陶器	山茶椀	C	K76	2層(明褐色粘質土)			底径8.0	口縁内外一ロクロナデ、底部外一糸切り、貼り付け高台	密	2.5Y7/1	底部1/3	
220	7604	陶器	山茶椀	C	K78	2層(明褐色粘質土)		14.4		口縁内外一ロクロナデ	密	2.5Y8/2	口縁部1/12	
221	7804	陶器	山茶椀	C	N91	包含層		11.4		口縁内外一ロクロナデ	密	2.5Y7/1	口縁部1/6	
222	7702	陶器	山茶椀	C	N98	攪乱土			底径7.0	底部内外一ロクロナデ、貼り付け高台	密	10YR7/3	底部1/6	
223	7703	陶器	山茶椀	C	O88	西トレンド(褐色砂質土)			底径7.0	口縁内外一ロクロナデ、底部内一ロクロナデ、貼り付け高台	密	2.5Y8/1	底部1/3	高台部モミガラ痕
224	7701	綠釉陶器	椀	C	N89	攪乱土			底径6.2	底部内一ロクロナデ・底部内外一マメツ	密	釉素7.5Y7/3 7.5YRS/3	底部1/4	京都産
225	7501	陶器	甕	C	K35	耕作土(包含層)		12.3		口縁内外一ロクロナデ	密	10YR6/3	口縁部1/6	常滑
226	7602	陶器	天目茶碗	C	K77	2層(明褐色粘質土)		10.6		口縁内外一ロクロナデ	密	釉素10YR3/2 10YR7/2	口縁部1/12	
227	7704	陶器	椀	C	P87	攪乱土		10.0		口縁内外一ロクロナデ	密	釉素7.5Y7/3 2.5Y7/2	口縁部1/12	瀬戸
228	7801	青磁	椀	C	P91	包含層		11.0		口縁内外一ロクロナデ、外面輪花	密	釉素10GY7/1 5Y8/1	口縁部1/6	
229	7807	陶器	蓋	C	O93	包含層		6.2		内外一ロクロナデ	密	7.5Y3/1	口縁部1/12	外面に文字を線刻
230	7806	磁器	椀	C	M91	包含層		9.0		口縁内外一ロクロナデ	密	釉素10Y8/1 7.5Y8/1	口縁部1/12	
231	7607	瓦質	丸瓦	C	K79	3層(褐色粘質土)				外面ナデ・内面布目	密	10YR8/2	玉縁部片	
232	5901	石製品	石鎚	A	K20	包含層	2.96×1.61	0.38	重量(1.5)		サヌカイト		ほぼ完存	両面中央部擦痕跡
233	5802	石製品	石鎚	A	Q6	遺構面(包含層)	3.86×1.48	0.42	重量1.8				完存	
234	6001	石製品	石鎚	A	K20	包含層	3.69×1.66	0.55	重量2.7		下呂石		完存	
235	6201	石製品	楔形石器	A	P3	遺構面(包含層)	2.39×2.76	0.54	重量3.6		サヌカイト		完存	
236	6002	石製品	F	A	N18	包含層	2.35×1.92	0.45	重量(2.1)		サヌカイト		ほぼ完存	二次加工痕有り
237	6101	石製品	F	A	M7	包含層	2.88×(4.42)	0.69	重量(6.2)		サヌカイト		ほぼ完存	
238	6102	石製品	F	A	N8	包含層	2.30×5.19	0.61	重量7.4		サヌカイト		完存	
239	7503	須恵器	杯蓋	C	K39	耕作土(包含層)			摘径2.9	ロクロナデ	密	10YR8/2	摘み部完存	
240	7504	土師器	甕	C	K42	耕作土(包含層)				口縁内外一ヨコナデ	密	10YR8/3	口縁部小片	
241	7509	弥生土器	壺	C	K57	2層(灰色砂質土)			底径7.0	底部内外一ナデ	密	10YR8/2	底部1/3	底部外面木葉痕?
242	7601	陶器	山茶椀	C	K77	2層(明褐色粘質土)				底部内一ロクロナデ・外一糸切り、高台剥離	やや粗	2.5Y8/1	底部1/3	
243	7603	土師器	鍋	C	K78	3層(褐色粘質土)				口縁内外一ヨコナデ	密	10YR7/3	口縁部小片	
244	7605	陶器	鍊鉢	C	K78	2層(明褐色粘質土)				口縁内外一ロクロナデ	密	2.5Y7/1	口縁部小片	
245	7802	陶器	鍊鉢	C	P89	包含層				口縁内外一ヨコナデ	密	5YR6/4	口縁部小片	常滑

第8表 遺物観察表6

\* 地区名・遺構層位については取上げ時の名称・番号をそのまま使用している。

## VI 自然科学分析 パリノサーヴェイ株式会社

### はじめに

式ノ坪遺跡は、安濃川下流部右岸の沖積低地に立地する。周辺には替田遺跡、位田遺跡、藏田遺跡などがあり、これまで継続的に発掘調査が進められている。各遺跡からは、弥生時代～中世の遺構、縄文時代～中世の遺物などが検出されている。

今回の自然科学分析調査では、式ノ坪遺跡で検出された時期不明の土坑の年代に関する資料を得るために、その覆土から採取された炭化材を資料として、放射性炭素年代測定を行った。また、当時の植生および用材に関する資料を得るために、樹種同定をあわせて行った。

### 1 試料

資料は、SK64から検出された炭化材4点(試料番号1～4)である。この中で、放射性炭素年代測定に試料番号1～3の3点を、樹種同定に試料番号1～4の4点を選択する。

### 2 分析方法

#### (1) 放射性炭素年代測定

測定は、ベンゼン合成による液体シンチレーション法を用いた。以下に、処理過程を述べる。

##### a) 前処理

炭化材は乾燥、粉碎したものを水に入れて、浮上してきたものを除去する。次に水酸化ナトリウム溶液で煮沸する。室温まで冷却した後、傾斜法により除去する。この作業を、除去した水酸化ナトリウム溶液の色が薄い褐色になるまで繰り返す。次に、濃硝酸を加えて煮沸する。室温まで冷却した後、傾斜法により除去する。充分水で洗浄した後、乾燥して

蒸し焼き(無酸素状態で400°Cに加熱)にする。蒸し焼きにした試料は、純酸素中で燃焼して二酸化炭素を発生させる。発生した二酸化炭素は捕集後、純粋な炭酸カルシウムとして回収する。

##### b) 測定試料の調製

前処理で得られた炭酸カルシウムから、真空状態で二酸化炭素、アセチレン、ベンゼンの順に合成する。最終的に得られた合成ベンゼン3ml(足りない場合は、市販の特級ベンゼンを足して3mlとする)に、シンチレイターを含むベンゼン2mlを加えたものを測定試料とする。

##### c) 測定

測定は、1回の測定時間50分間を、20回繰り返す計1,000分間行う。未知試料の他に、値が知られているスタンダード試料と、自然計数を測定するブランク試料と一緒に測定する。

##### d) 計算

放射性炭素の半減期として、LIBBYの半減期5,570を使用する。

#### (2) 樹種同定

木口(横断面)・柾目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の割断面を作成し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

### 3 結果

#### (1) 放射性炭素年代測定

結果を、表9に示す。3試料とも、比較的近い年代値が得られた。

#### (2) 樹種同定

試料名	性状	樹種	状態	年代値	誤差		LabNo.
					+	-	
SK64 970912 No.1	炭化材	コナラ属アカガシ亜属	根混入	2,270	250	240	PAL-400
SK64 970912 No.2	炭化材	不明	少量	2,320	430	410	PAL-401
SK64 970912 No.3	炭化材	スダジイ	少量	2,560	350	340	PAL-402
SK64 970912 No.4	炭化材	スダジイ					

第9表 放射性炭素年代測定・樹種同定結果

注。(1)年代順:1,950年を基点とした値

(2)誤差:測定誤差 $2\sigma$ (測定値の95%が入る範囲)を年代値に換算した値

結果を、表9に示す。資料番号2は、保存状態が悪いため木材組織を観察することができず、不明とした。その他の資料は、いずれも常緑広葉樹で、2種類(コナラ属アカガシ属・スダジイ)に同定された。解剖学的特徴などを以下に記す。

● コナラ属アカガシ亜属 (*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*) ブナ科

放射孔材で、管壁厚は中庸～厚く、横断面では橢円形、単独で放射方向に配列する。導管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15細胞高。アカガシ亜属は、通常複合放射組織を有するが、今回の試料では確認できなかった。

● スダジイ (*Castanopsis cuspidata* var. *sieboldii* (Makino) Nakai) ブナ科シノキ属

環孔性放射孔材で、孔圈部は3～4列、孔圈外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら、火炎状に配列する。道管單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～20細胞高。

#### 4 考察

今回得られた年代値は、これまでのデータから、縄文時代晩期末から弥生時代初頭頃にあたると考えられる(キーリ・武藤、1982；日本第四紀学会ほか、1992)。したがって、本試料が検出された土坑の年代も、概ねその時期のものと考えられる。

また、炭化材は、アカガシ亜属とスダジイであった。ともに、暖温帯常緑広葉樹林(いわゆる照葉樹林)の主構成種であり、花粉分析結果などから西日本に広く生育していたことが、推定される。また、両種とも有用材であり、木製品や住居構造材などにしばしば利用されていたことが明らかとなっている(島地・伊東、1988；伊東、1991)。今回の結果から、本遺跡周辺にアカガシ亜属やスダジイの生育する植生が見られ、そこから木材を得ていたことが推定される。

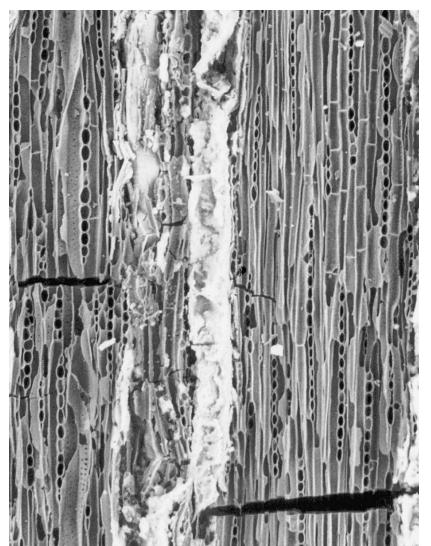
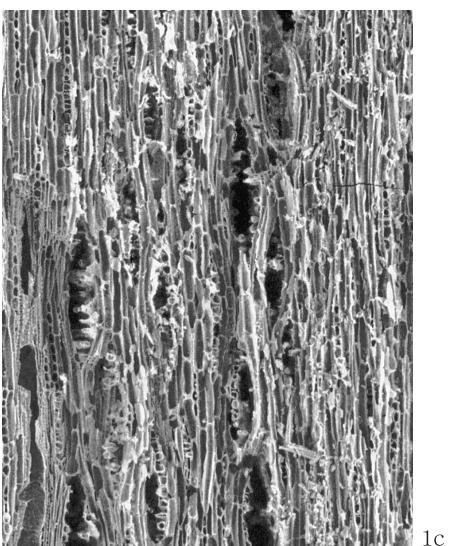
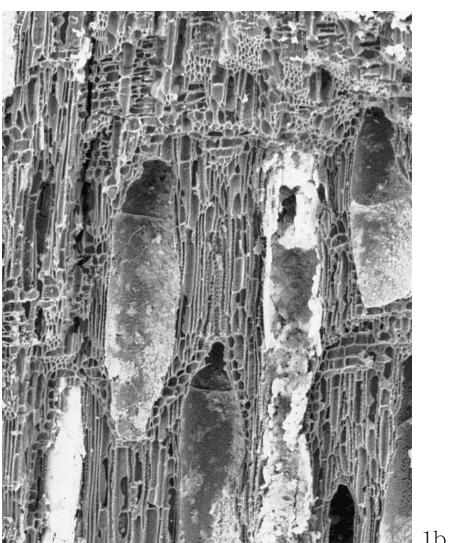
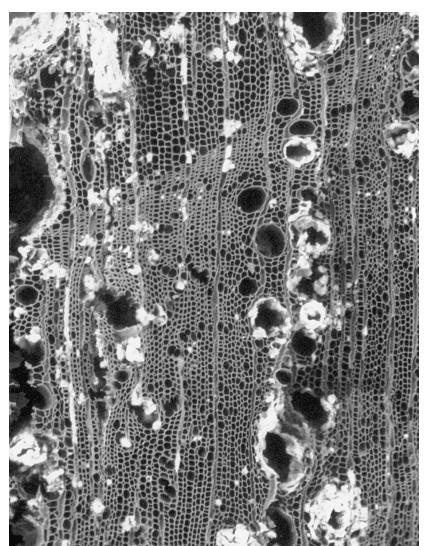
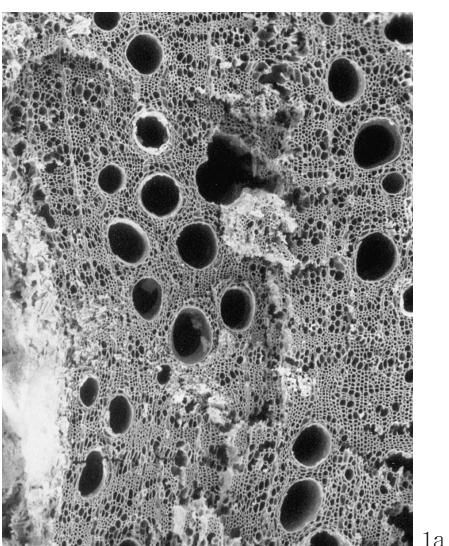
なお、本遺構の年代については、炭化材の出土状況や他の遺構の分布などの情報を併せ、さらに検討したい。

#### 引用文献

- 石河寛昭(1977)『最新液体シンチレーション測定法』。189.,南山堂。  
伊東隆夫(1991)日本の遺跡から出土した木材の樹種とその用途II.木材研究・資料,26,p.91-189,京都大学木材研究所。  
キーリC.T.・武藤康弘(1982)4.年代 縄文時代の年代.縄文文化の研究 第1巻 縄文人とその環境,p.246-275,雄山閣出版。  
日本第四紀学会・小野 昭・春成秀爾・小田静夫(1992)図解・日本の人類遺跡.242.,東京大学出版会。  
日本化学会(1976)同位体.年代測定『新実験化学講座10 宇宙地球科学』,p.337-353,丸善。  
島地 謙・伊東隆夫編(1988)日本の遺跡出土木製品総覧.296 p.,雄山閣。  
富樫茂子・松本英二(1983)ベンゼン-液体シンチレーションによる<sup>14</sup>C年代測定法.地質調査所月報,34,p.513-527.

\*なお文章については分析結果報告をそのまま掲載した。

図版1 炭化材



1. コナラ属アカガシ亜属（試料番号1）
  2. スダジイ（試料番号3）
- a : 木口, b : 桿目, c : 板目

— 200  $\mu\text{m}$  : a  
— 200  $\mu\text{m}$  : b, c

## 付編 SH64出土炭化材について

### はじめに

弥生時代中期のSH64は焼失住居の可能性があり、そこから出土した炭化材の残存状況は既述のように良好であった。そこで出土状況の検討に加えて樹種分析を行い、用材に関する資料の充足を計った。なお、その結果に関しては、後の表と第14図を併せて参照されたい。

#### (1)出土状況からみた用途

堅穴住居の輪郭にそって放射状に延びる材とそれとは直交する材の二種類に分けられる。建物の基軸となる柱が立てられる主柱穴はSH64の壁際から7～80cmほど内側を同心円状に並んでいる。しかし、主柱穴に伴う柱材と推定される材は確認できていない。便宜上、主柱穴をつないだ線の内側(内区)かあるいは外側(外区)から出土しているかを分け、さらに内側から出土しているものに関しては、纏まりごとにグルーピングを試みた。(第14図)外区では1点を除き、放射状材で占められる。このように放射状に出土する材はおそらく、上部構造材(垂木・屋根材)か、下部構造材(壁・土留め材)などが候補に挙げられる。しかし、入口部分にも見られることや内区にまで及んでいることから、土留め材などではなく、上部構造材の可能性が考えられる。放射状に出土した材のうち(33)は半載材であり、垂木材の可能性が高い。直交材(26・28・63)は放射状材(25・33・64・70)の上に重なって出土していることから垂木材やそれに近い用材として用いられたと考えられる。そして直交材は木舞材として用いられたものと考えられる。

#### (2)用材と樹種選択

SH64内の炭化材の分析結果によると、全ての材が広葉樹であり、詳細の判明した材に関してはコナラ属アカガシ亜属・スダジイ・ツブラジイの3種類であった。そしてこれらの材は、堅穴等住居構造材の屋根や垂木、木舞材等に使用例があり、全国各地の遺跡から出土している。当遺跡においてもこの3種類の選択は出土状況に反映されており(第14図)、以下、検出状況を記しておく。

コナラ属アカガシ亜属は内区のみで検出されてい

る。また、放射状材が材全体のなかで7割を占める中で、逆に直交材が約3割に上る。

スダジイとツブラジイは板状に加工されたものを含め、主に放射状材に用いられている。垂木材の可能性がある(33)はツブラジイである。内区c地点では、ツブラジイの用いられる比率が他の地点よりも高くなっている。以上のことから、コナラ属アカガシ亜属は主に木舞材を中心に用いられている可能性があり、スダジイとツブラジイは垂木材やそれに近い用材として用いられた可能性が指摘できる。なお、当遺跡では、花粉分析を実施していないので、当時の植生を復元することは不可能であるが強度の高い樹種が意図的に選択されて、堅穴の構造材として用いられていることには違いないであろう。(川崎志乃)

番号	樹種	番号	樹種
1	スダジイ	40	広葉樹
2	ツブラジイ	41	広葉樹
3	スダジイ	42	スダジイ
4	広葉樹	43	スダジイ
5	スダジイ	44	スダジイ
6	スダジイ	45	広葉樹
7	広葉樹	46	広葉樹
9	不明	47	スダジイ
10	コナラ属アカガシ亜属	48	スダジイ
11	ツブラジイ	50	スダジイ
12	スダジイ	51	スダジイ
14	スダジイ	52	広葉樹
15	広葉樹	53	コナラ属アカガシ亜属
16	ツブラジイ	54	スダジイ
17	広葉樹	55	スダジイ
18	コナラ属アカガシ亜属	56	ツブラジイ
19	スダジイ	57	コナラ属アカガシ亜属
20	広葉樹	58	スダジイ
21	スダジイ	59	スダジイ
22	スダジイ	60	広葉樹
23	広葉樹	61	ツブラジイ
24	広葉樹	62	ツブラジイ
25	スダジイ	64	スダジイ
26	スダジイ	65	スダジイ
27	スダジイ	66	スダジイ
28	スダジイ	67	スダジイ
29	スダジイ	68	ツブラジイ
30	スダジイ	70	ツブラジイ
31	スダジイ	71	スダジイ
32	スダジイ	72	スダジイ
33	ツブラジイ	73	ツブラジイ
34	広葉樹	74	ツブラジイ
35	スダジイ	75	ツブラジイ
36	スダジイ	76	ツブラジイ
37	広葉樹	77	ツブラジイ
38	広葉樹	78	ツブラジイ
39	スダジイ		



図 版





遺跡周辺の上空(昭22撮影) (←は遺跡位置)



SH64 炭化材出土状況(北西から)



SH64 (北から)



S K59 遺物出土状況(西から)



S K60 遺物出土状況(北から)



S K61 土器出土状況(西から)



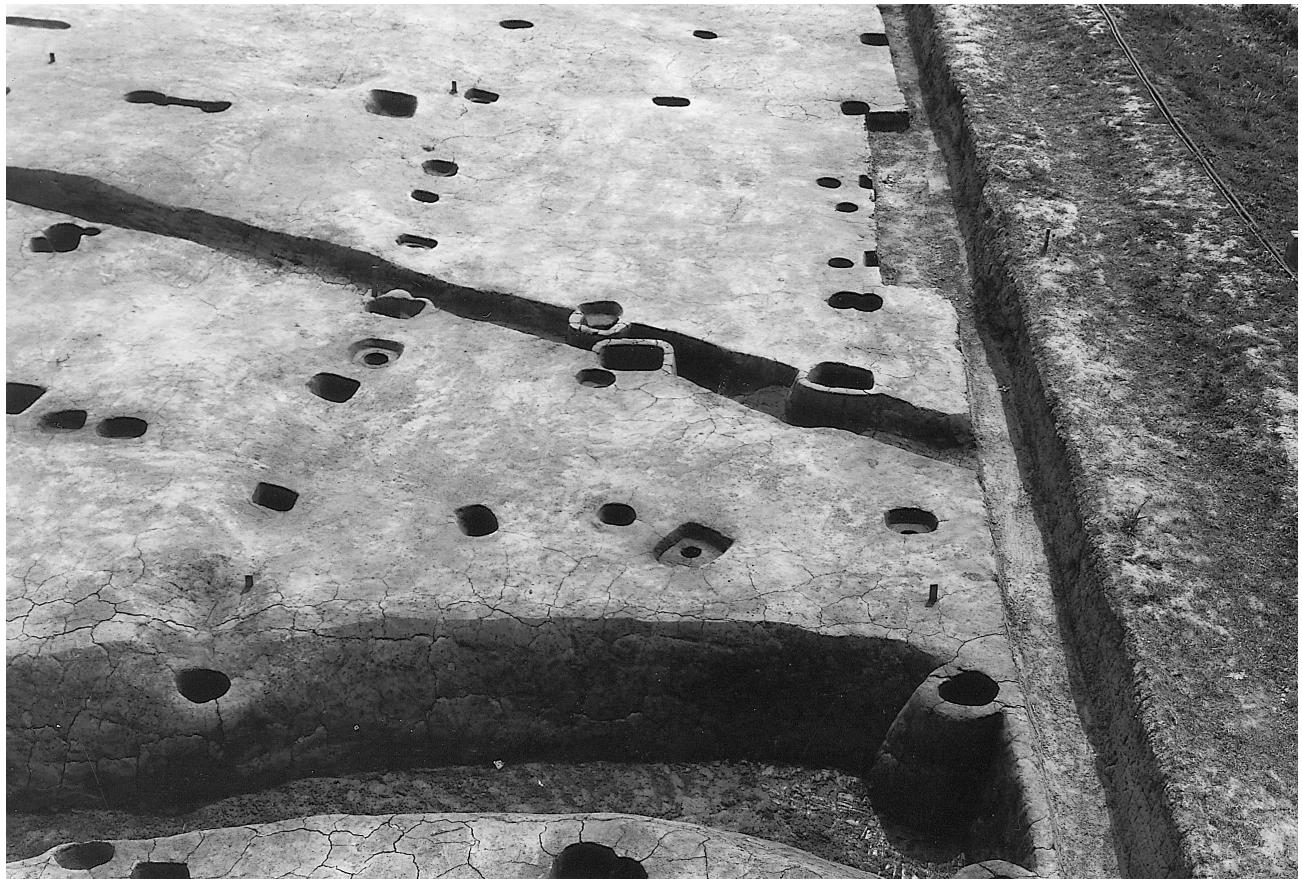
S K69 土器出土状況(北から)



S K 70 遺物出土状況(西から)



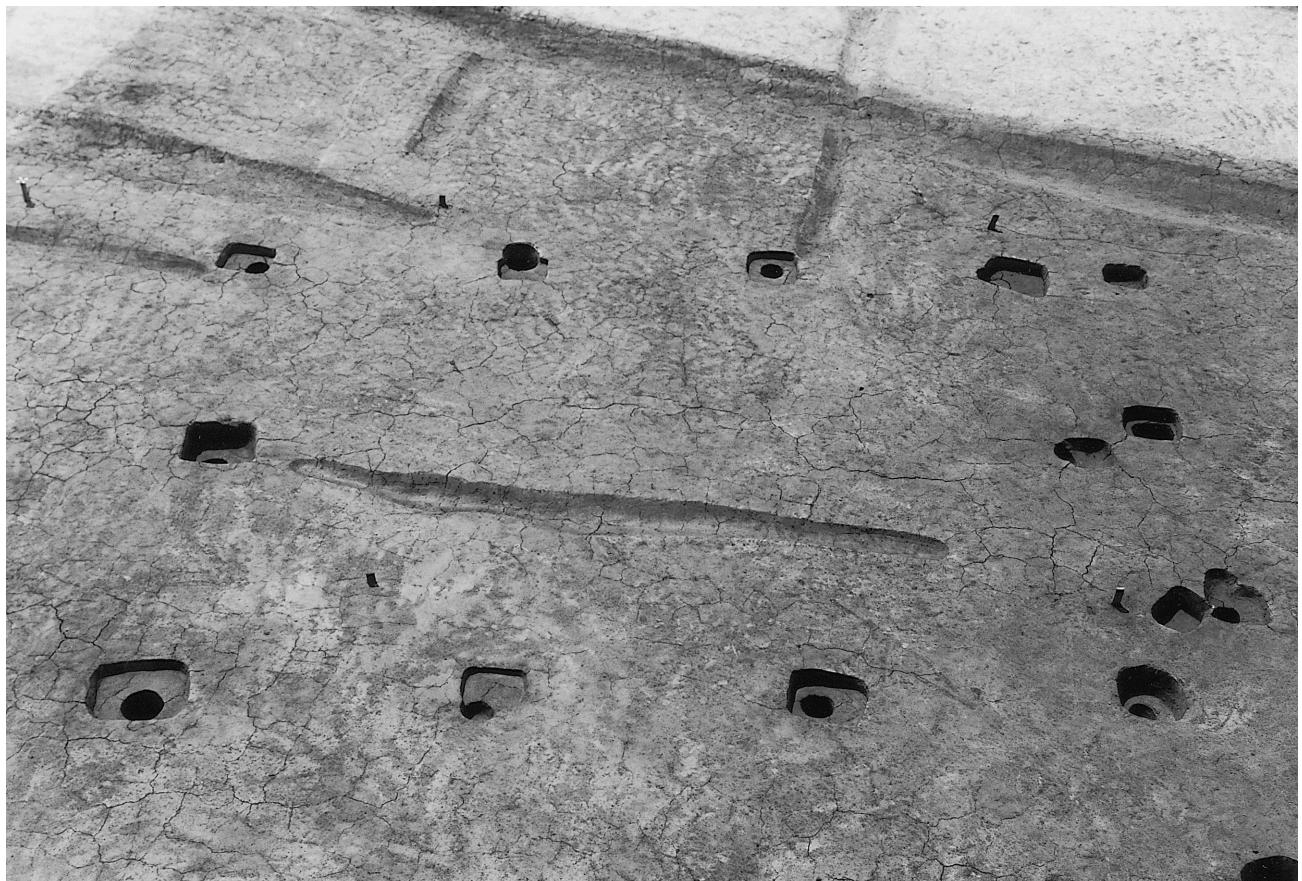
S K 72 土器出土状況(南から)



S B 65・1 (北から)



S B 6 (北から)



SB 2 (北から)



拡張部の建物群 (北から)

P L 8



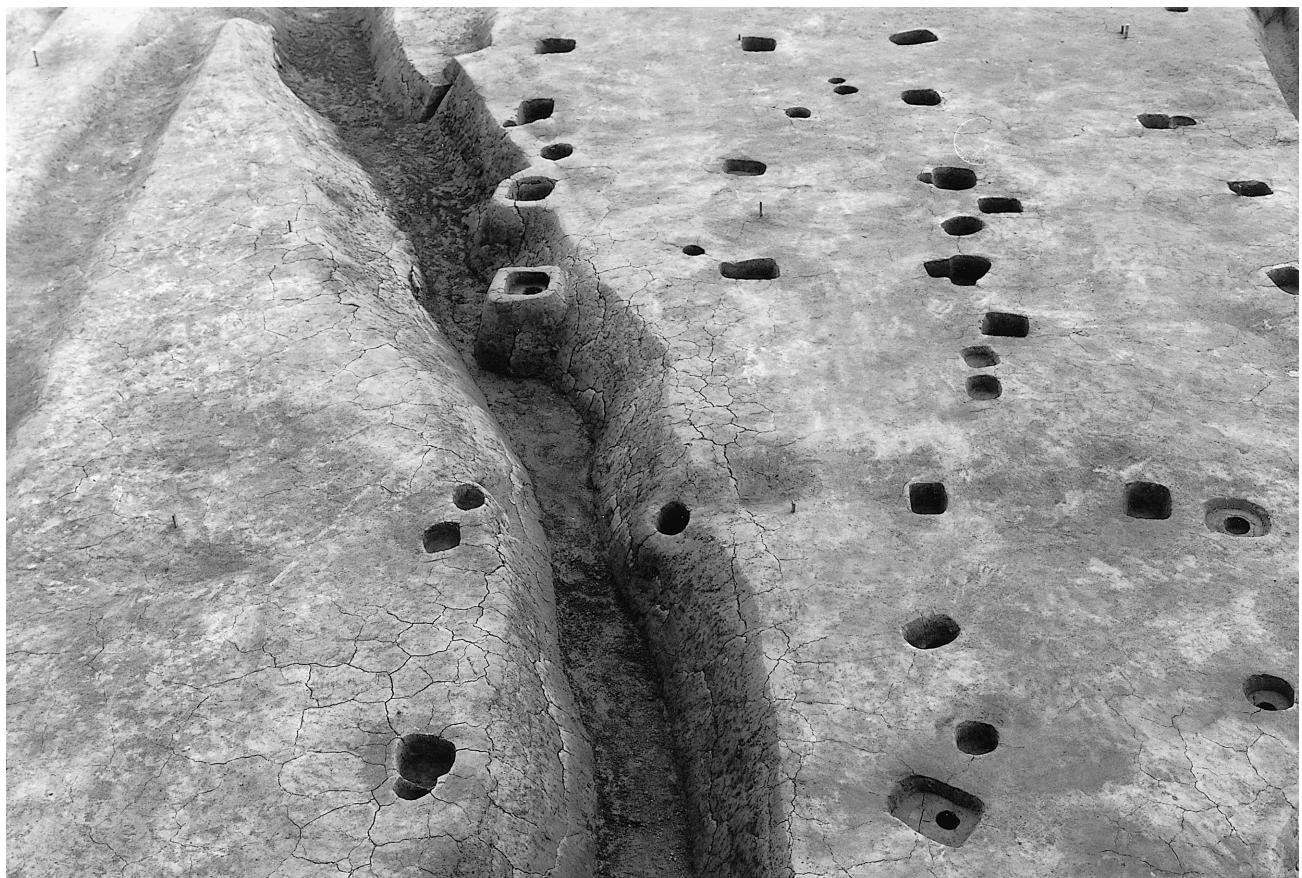
S B 3 (北から)



S B 4 (東から)



S B 8 (北から)



S B 9 (西から)

P L 10



S B 7 拡張前(西から)



S B 7 拡張後(西から)



S B 5・75 (西から)



S B 73・74 (西から)



S B 75柱穴 2 (西から)



S B 75柱穴 4 (北から)



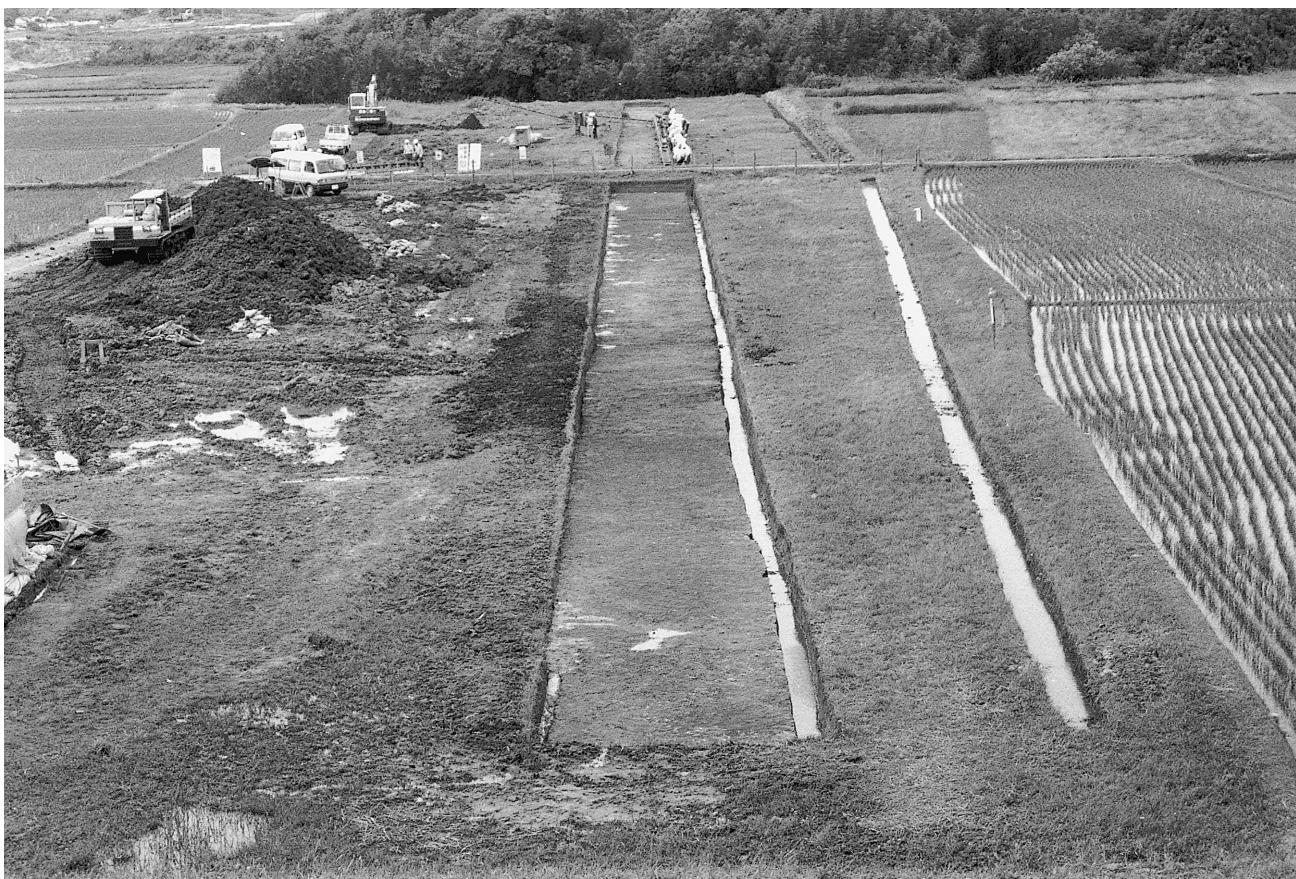
S B 75柱穴 1 (西から)



S B 75柱穴 3 (南から)



B地区全景(南から)



C地区 全景(北から)



C-4 地区 検出状況(北から)



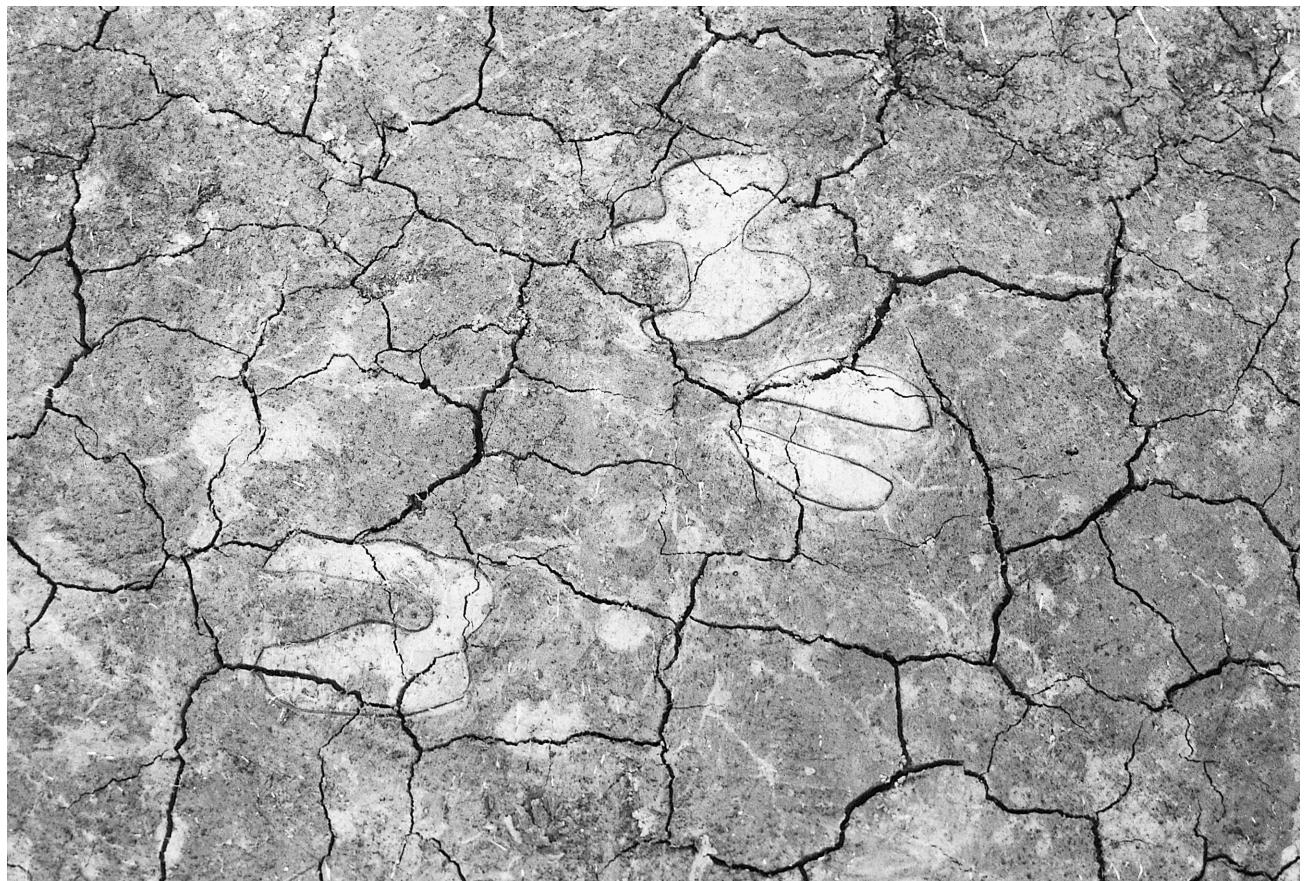
S D 88 土器出土状況(西から)



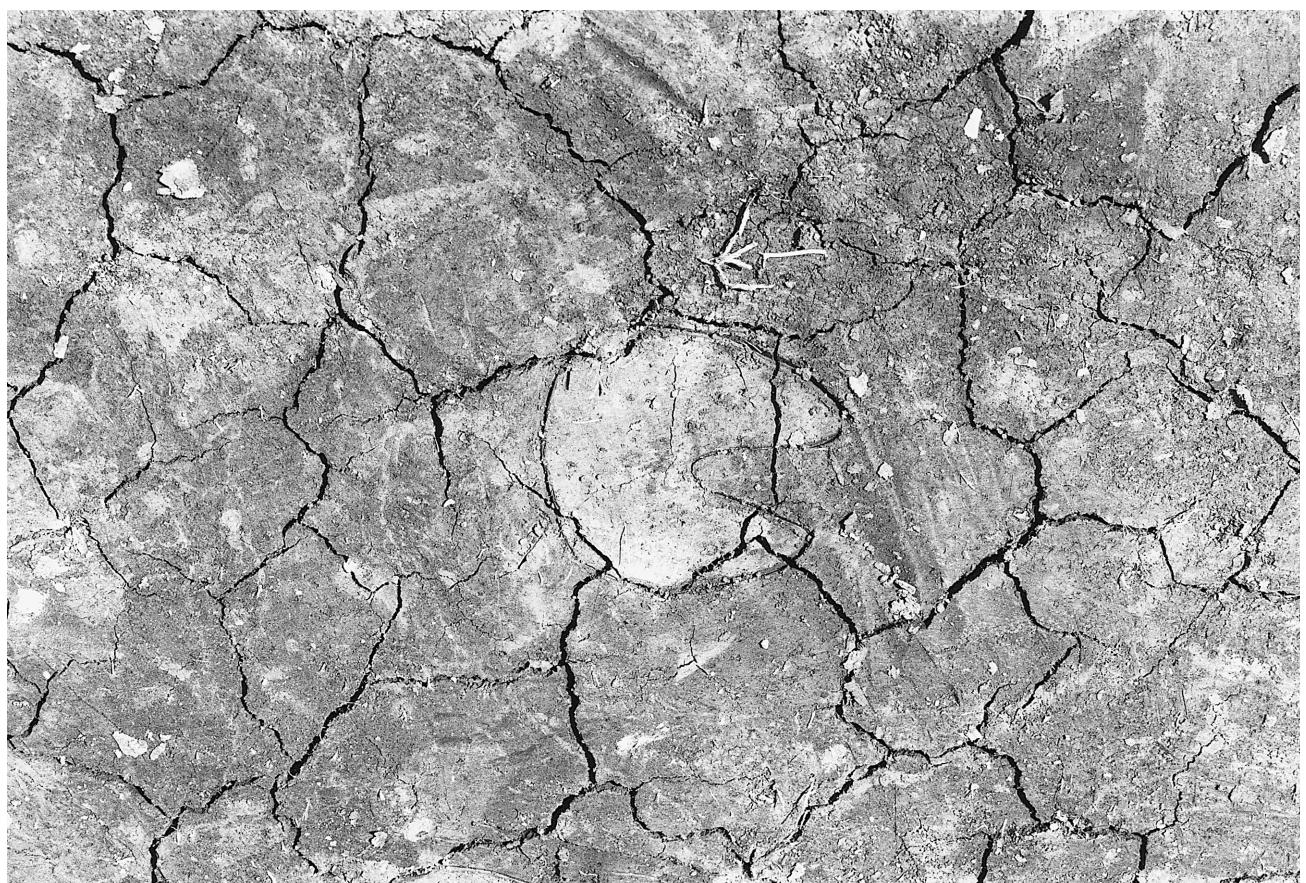
土器出土状況



C地区 牛の足跡検出状況(北から)



牛の足跡 1 近接(南から)



牛の足跡 2 近接(東から)



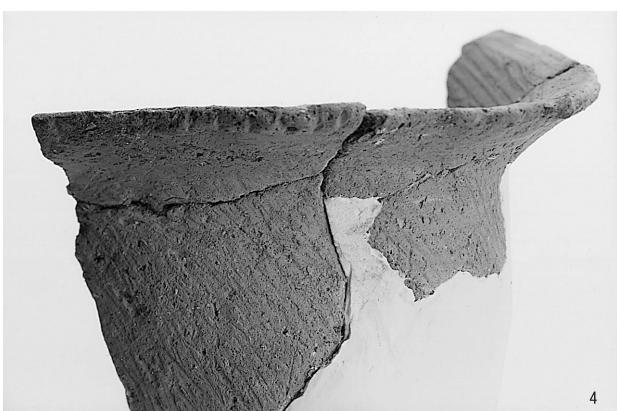
1



2



3



4



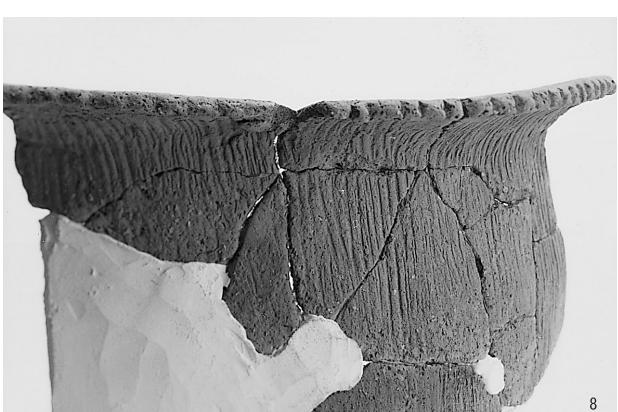
5



6

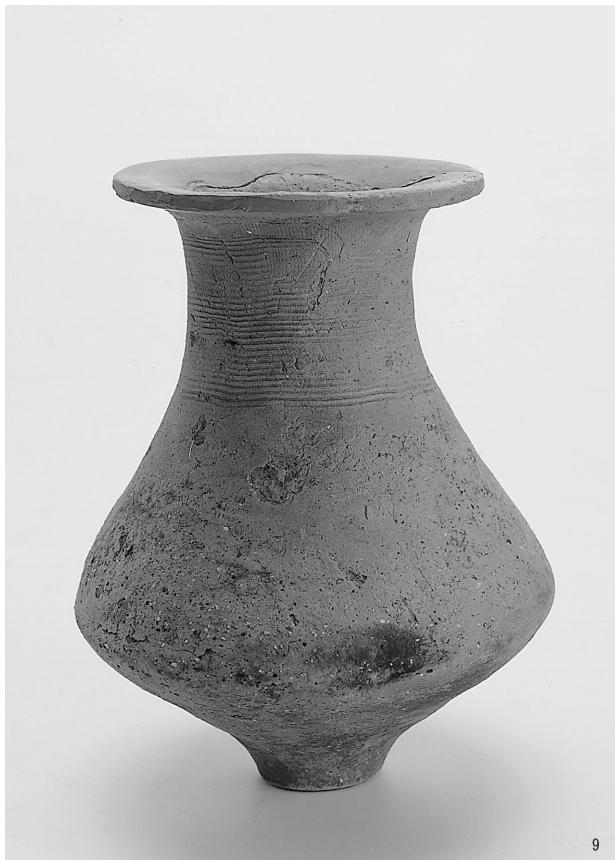


7

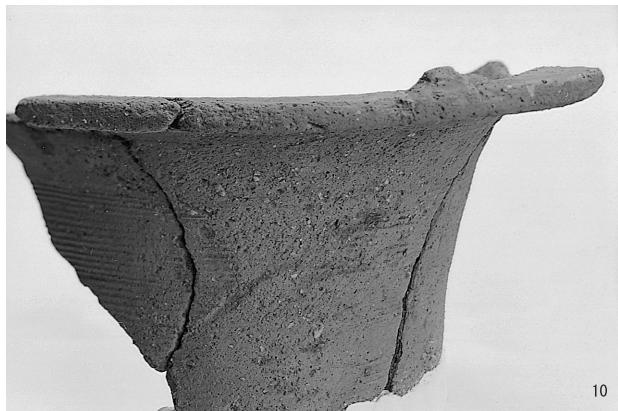


8

出土遺物 1



9



10



11



13



14

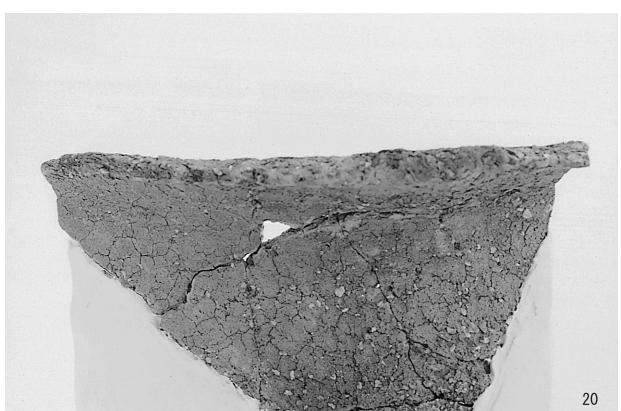
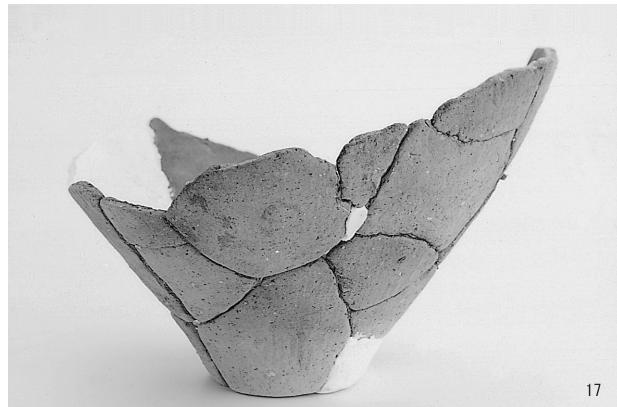


15

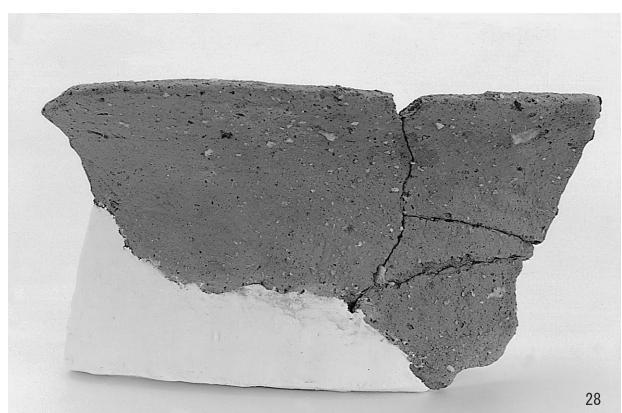


16

出土遺物 2



出土遺物 3





31



35



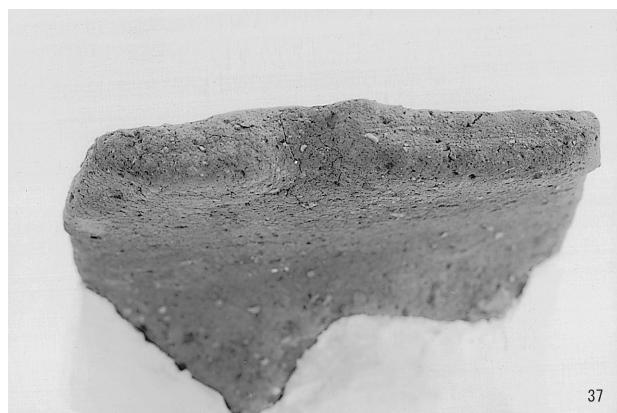
36



33



34



37



38

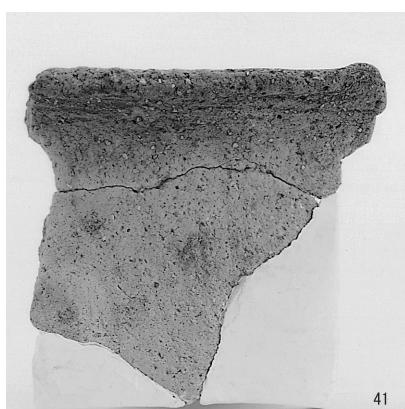
39



40



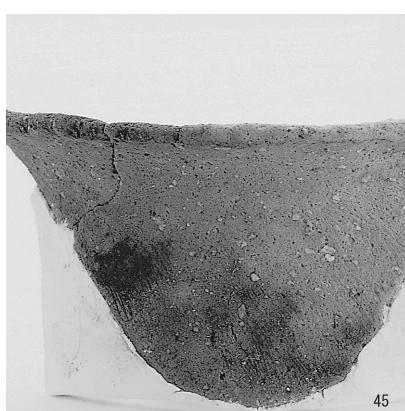
42



41



43



45



46



47

## 出土遺物 6



48



49



50



51



52



53



54



55



56



58



61



57



59



63



66



67



69

出土遺物 8



64



65

出土遺物 9



68



70

出土遺物10



71



72



73



74



75



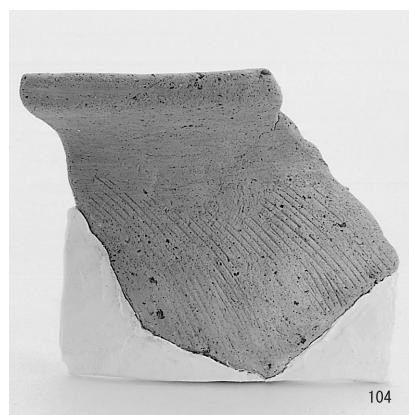
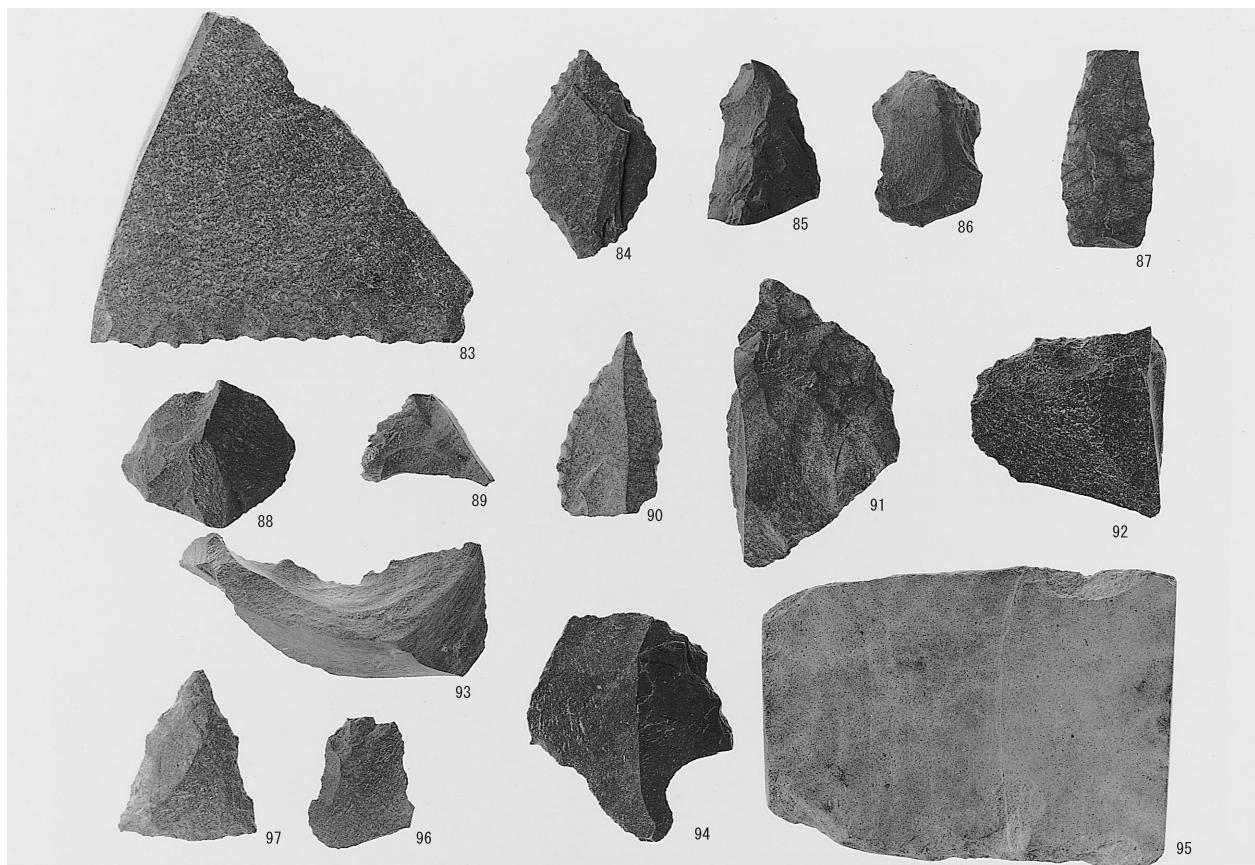
76~78



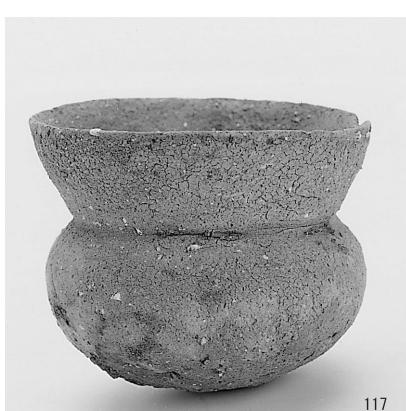
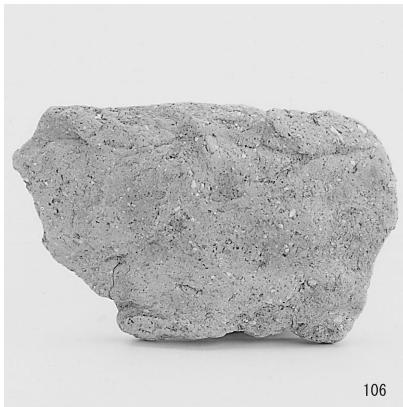
81



82



出土遺物12



出土遺物13



118



120



121



122



123

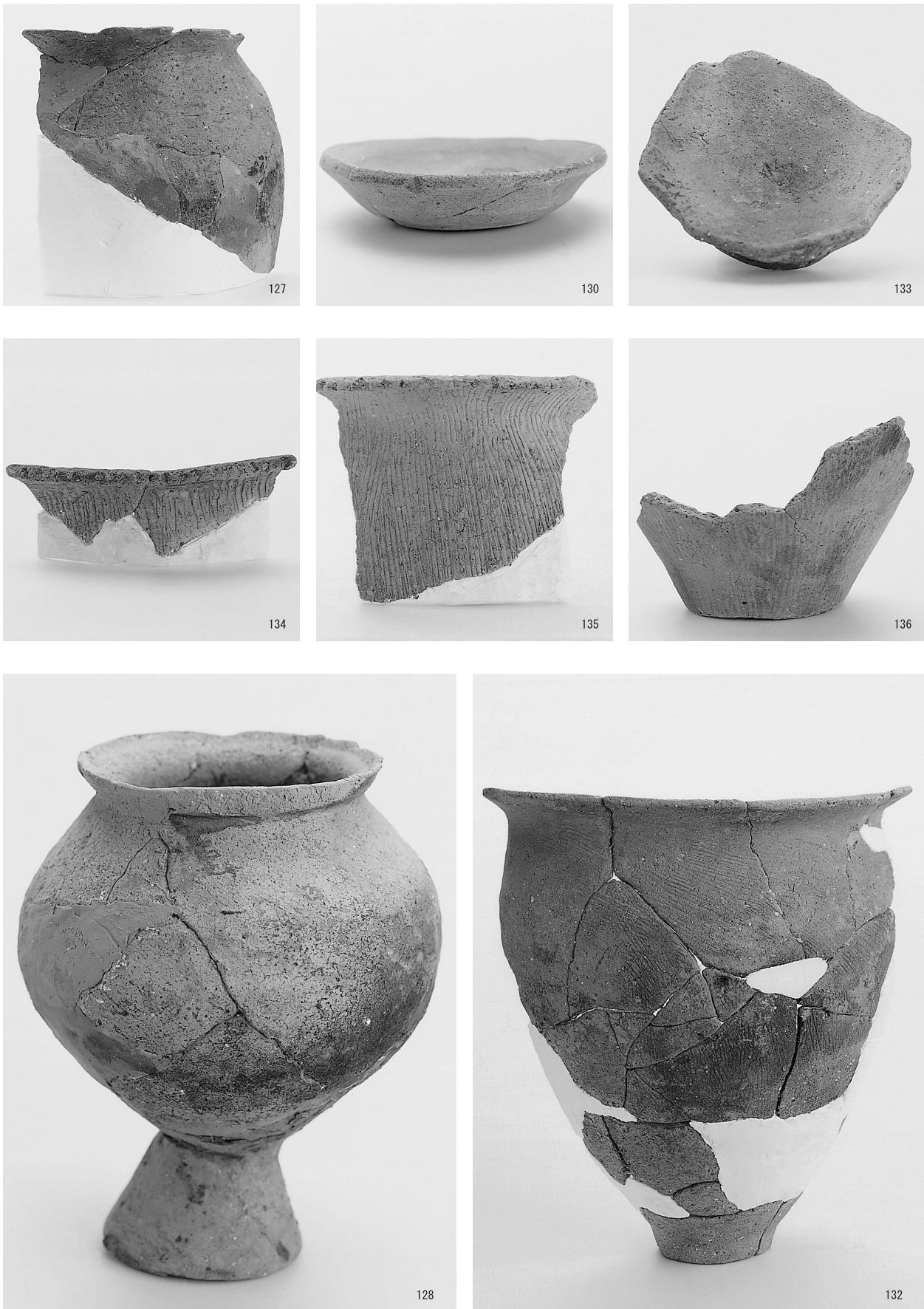


125



126

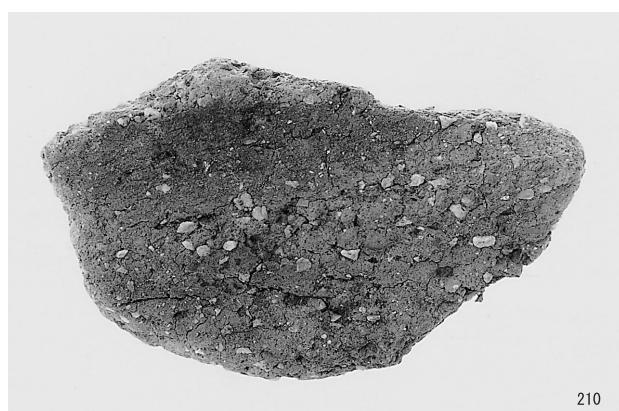
出土遺物14



出土遺物15







出土遺物18



# 報 告 書 抄 錄

ふりがな	にのつぼいせきはくつちょうさほうこく							
書名	式ノ坪遺跡発掘調査報告							
副書名	国道23号中勢道路建設工事							
卷次								
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	115-14							
編著者名	中川 明・川崎志乃							
編集機関	三重県埋蔵文化財センター							
所在地	〒 515-0325 三重県多気郡明和町竹川503 TEL 0596(52)1732							
発行年月日	2005年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °' "	東経 °' "	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
にのつぼいせき 式ノ坪遺跡	つしのだ 津市野田 あざにのつぼ 字式ノ坪 あざはたんだ 字八反田	市町村 24201	遺跡番号 760	136度 29分 03秒	34度 42分 55秒	19980507～ 19981020	5,100	中勢道路工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
式ノ坪遺跡	集落跡	弥生時代 古墳時代 奈良時代	竪穴住居跡 掘立柱建物 溝	弥生土器甕・壺 石器 土師器杯・甕 土師器壺・高杯		焼失した竪穴住居と 条里方向の建物跡14棟		
その他	自然化学分析結果（㈱パリノ・サーヴェイ）を掲載。							
要約	条里地割に並行する掘立柱建物群と溝跡およびそれに先行する弥生時代の竪穴住居跡1基を検出。							



三重県埋蔵文化財調査報告115-14

**式ノ坪遺跡発掘調査報告**

～国道23号中勢道路建設工事～

2005（平成17）年3月

編集・発行 三重県埋蔵文化財センター

印 刷 光出版印刷株式会社

